

正倉一文 筆写

期間
2018年5月23日から

佐藤愛子

血脈

上

第一部

第一章 予兆	9
第二章 崩壊の始まり	204
第三章 彷徨 ^{さまよ} う息子たち	327
第四章 明暗	524

第一章 予兆

—

服部坂を風が吹き上ってくる。

風に向って八郎は坂を降りて行く。

頭の上をどンドン雲が流れる。坂下に広がる小日向の町は、忙しく光ったり翳ったりしている。

ゴーツという音が向うからきて空を横切っていったと思うと、遠くの方でヒューーと消えた。

風が「もすそ」を引き摺っている音だ、と八郎は思う。八郎は「もすそ」という言葉を憶えたば

かりだった。「もすそ」は「裳裾」と書く。裳裾を引いて風は走る。してみると風は女だ、と八

郎は思う。

風は裾の短い紺かすじの着物を引き剥がそうとするように吹き上げてくる。それを辛うじて押えている黒い三尺帯に、八郎はキャッチャーミットを括りつけている。右手にはバットを持っている。

八郎は坂を降りながら、風に向ってバットを構えて振った。

「佐藤先生のとこの坊やないですか？」

坂を上って来た男が立ち止っていった。風の中で黒っぽい羽織と着物が痩せた身体に巻きついて、波に揉まれる昆布のように揺れていた。

「そつだよ」

そのまま通り過ぎようとするや、

「やっぱリィ……」

大仰に頷いて、

「お父さん、おうちっ。」

馴れ馴れしくいった。

「知らねえ」

素気なくいつてからふと視線を感じて目を向けると、男の後ろに女がいた。紫と薄い鼠色の同じ柄の（それは確か矢舁という柄だと伯母さんがいつていた）羽織と着物を着て、臙脂のシヨールを顎の下でしっかりと掻き合わせていた。

大きな廂髪が風に乱されるのを気にするように、俯き加減に頭を傾けて、上目遣いにじっと八郎を見ていた。黒く光る、愛想のカケラもない大きな目だった。

「道、間違えてしもつてね。俵宿の前を右へ曲るのを忘れて、真直に行てもたもんやから」
大阪弁の男はいわでものことをつい、

「お父さん、」機嫌はどつやろっ。」

「知らねえよ」

いい捨てて通り過ぎた。

坂はその先で二股に分れる。左へ行かないで右へ行くんだよ、といおうかと思ったがやめた。ふり返ると、思った通り、二股を左へ上って行く男と、その後ろからとほとほとついていく女の後ろ姿が風に煽あおられていた。

それが横田シナと佐藤八郎の最初の出会いである。

大正四年秋の、強風の吹くその日、横田シナはそんなふうに登場した。気乗りのしなさそうな美しいけれども陰気な顔を俯けて、意思のない、ただおとなしいだけの女のように黙りこくって、小石川区茗荷谷みよがだにの八郎の父、佐藤治六しゅうくくの家に向って坂を上って行ったのだ。

それが佐藤家の混乱の端緒である。もしもその日、横田シナが三浦敏夫に連れられて来なかったら、佐藤家はそれなりの安泰をつづけたことだろう。たとえ佐藤家の平和が他の家では滅多に見られない特殊なものであったとしても。

いうまでもなく当の横田シナは（そして彼女を引っぱって来た三浦敏夫も）これから自分たちが果すことになる佐藤家での役割りを知らなかった。彼女は女優になりたいというただ一つのことを胸に、三浦に引っぱられてやって来た。これから自分はどうなっていくのか、本当に女優になれるのか、想像もつかぬままに半ば怯気おしげつき、半ば期待を持って佐藤治六の門の前に佇たたずんだのであった。

佐藤治六は雅号を紅緑こうりくといい、新聞小説を書かせれば当代人気随一といわれている大衆小説家である。彼が新聞に小説を書けば購読部数が伸び、その小説を劇化すれば必ず当る。小説を書く

よようになる前は、彼は松竹新派の脚本を書いていた。その前は子規門下の俳人で、その前は新聞記者だった。藩閥政府に反発して改進黨の陣笠だった時代もあり、一攫千金を夢見て事業を始め、詐欺師呼ばわりされたり、中国革命に加担し警視庁につけ狙われたこともある。そして今は小説を書く傍ら「新日本劇」という小劇団の顧問として羽振がいい。

紅緑については毀誉褒貶、さまざまの評価があるが、自らは“野人”を標榜して他人の思惑など気にせず、思うままの生活をしてきた。五、六年前は子供の飴代にもこと欠く暮しをしていたが、その時でも居候や女中を置いていた。小説を書き始めてからは少からぬ金が入るようになったが、入れば入るで入った以上の生活をするので、家の中は常に火の車である。佐藤家にはいたい何人の人間が暮しているのか、当の治六にもわからぬほどで、妻のハルに四人の子供、その上に夫と死に別れた治六の姉が二人の娘を連れて世話になっており、それらに加えて二人の女中、常に人数の定まらぬ書生や居候が玄関脇の六畳にうじゃうじゃといて、時をかまわずやって来ては飯を食い、勝手に泊っていく客の出入も激しい。

この邸は四百坪もあって、家は階下九間に二階二間の大きなものである。しかし家が広いから居候を置いているのではなく、居候が多いために広い家が必要になったというのが実情である。

「佐藤紅緑という男は頼ってくる者はどんな者でも受け容れる面倒見のいい男だという。東京に出て紅緑を頼ろう」

三浦敏夫はそういって、横田シナを大阪から連れ出したのであった。

横田シナは結婚というものを嫌い、人生に目標を定めて独りで自由に生きていきたいと考えて、女優を志した女である。二十歳の時、神戸に聚楽館しゅらくかんという劇場が出来、附属の女優養成所が作られることを知って第一期生に応募した。その時の神戸新聞の養成所第一期生紹介記事は彼女のこと

をこう書いている。

「クッキリとした丸顔の大廂髪に白いリボンのハイカラもくからず、木綿糸縞のごく質素な着物に鼠色銘仙の羽織という飾らぬ拵^{こしら}えで、ちよつとどこか貞奴の面影を偲^{しの}ばすような、やや険しい瞳を伏せてつつまじやかにうつむいている。ノーブルな、どことなく凄^{しみ}いような面持の、これで表情さえ巧みになればまず難のない女優だが、まだ娘離れのせぬせいか恥^はずかしげな色を見せ、その口は堅く閉ざされて開かないけれど、どこやら決心の色が閃^{ひらめ}いて、岩に齧^{かじ}りついてもこの素志を通さねばという健気な意気が見えていた。記者はその寡黙な、沈着な、そして純な乙女ぶりに望^{のぞ}みを繫^つぎたい」

実際、シナは「岩に齧りついてもこの素志を通し」たいと思っている女だった。そのこと以外には着るものも食べるものも、金にも男にも関心がなかった。養成所では模範生といわれ、卒業後の公演では常に主役か準主役を取っていた。だが一年後に聚楽館は経営困難のために映画館に變り、役者たちは解散したのである。

シナが同じ役者仲間の三浦敏夫を受け容れたのは、一口にいつてしまつと「面倒くさくなつた」からだつた。それまでシナは身持ちの堅い女という評判だったが、身持ちを堅くしている「とがだんだん面倒くさくなつてきた。女優と見れば男は簡単にいい寄ってくる。

「ふん、また、こいつもか」

と思ひながら、上手にいなす術^{すべ}のあれこれを知らず、またそれも面倒くさくなつて三浦を受け容れた。三浦は気のいい献身的な男だつたから、べつに邪魔ではなかつた。シナの頭にあることはただ一つ、舞台女優として成功したいということだけだつたから、男などどうでもよかつたのである。

東京へ行こう、大阪にいってもしょうがない、と三浦にいわれ、シナはその気になった。しかし「新日本劇」に入ることに気持は進まなかった。新日本劇は新派系の芝居をする劇団である。

それはいうならば義理人情や善玉悪玉の単純芝居である。二年前、シナが女優養成所に入った年、島村抱月（ほらげつ）が新しい演劇を提唱して松井須磨子と結成した芸術座は、シナを刺激しつつけていたのだ。須磨子の演じた「人形の家」は平塚らいてうら青鞥社（せいこうしゃ）の女性解放運動に拍車をかけたといわれている。それこそシナの理想の演劇なのである。

「どうせ東京へ行くのなら芸術座へ入りたい」

そついうシナを三浦はなだめていった。

「とにかく、いっぺん東京へ行ってみよ。芸術座に入るにせよ、何にせよ、佐藤紅緑を足がかりにしたらええがな」

そつして横田シナは気が進まぬままに佐藤紅緑の門をくぐったのであった。

気がつくくと、八郎の母の部屋にあの女がいた。だがいつからそこにいるようになっていたのかわからない。

八郎の母は寒くなると赤ん坊のワタルを連れて茅ヶ崎へ保養に出かける。女学校が冬休みに入ったら姉も行く。二つ下の弟のチャカも行くといっている。だが、オレは行かねえよ、と八郎はいつていた。

「あんなところ、つまんねえや」

海と、砂浜と、松と、渚に打ち寄せられている藻屑、腐った蜜柑の皮、サイダー瓶、そして風

と波の音。そんなこといわないでお行き、とおそわ伯母さんがいった。

「お行き」「お行き」とみんながいう。八郎がいないとみんなはほっとするのだ。八郎はそれを知っている。だから、

「行かねえたら行かねえよ」

といった。

あの女がなぜ母さんの部屋にいるのだろうか？

しかし八郎にはどうでもいいことだから、誰にも訊ねない。知らなくても困ることは何もないのだ。

ある日、八郎は玄関脇の六畳にあの男がいることに気がついた。六畳は書生と居候でいっぱいだ。書生と居候の区別は八郎にはわからないが。あの男は書生なのか？ 居候なのか？

「うちは金持ちかい？」

と伯母さんに訊いたら、

「冗談おいでないよ」

と伯母さんはいった。叔母さんの二人の娘、ユウちゃんとシユウちゃんは二人とも女子大へ行っている。女子大は女の大学だ。今どき女で大学へ行くひとなんて、そうザラにはいないんだ。

はなやがそういつていた。質草の心配しながら姪を女子大へ行かせる方も行かせる方なら、行く方も行く方だ、って。

あの女は台所つづきの板の間で、みんなと一緒にご飯を食べていた。みんなといっても、八郎の家族は別だ。家族は板の間の右手の茶の間で、みんなよりも先に食べる。家族がすませてからみんなが食べるわけは、きつと残ったおかずをみんなに廻すためだ。殊に父さんの残りものは上

等だから、みんなはそれを待っている。

八郎はみんなの食事風景を見物するのが好きだ。大飯を食うのは誰か、誰が一番厚かましくうまいもの(つまり父さんの残した刺身やカレイの塩焼)に手を出すか。見ているうちにまた食べなくなってきた、男たちの後ろから手を出して摘み食いをする。その時、誰が無頓着で誰がいやな顔をするか、八郎は知っている。

あの女は肩をすぼめ、俯いて飯粒を口に運んでいた。

「さあ、横田さん、遠慮しないでお代りを……」

はなやが手を出すとモジモジして、いえ、もう……という。「もう結構」「結構」が口の中に消えている。

「そんな」といわないで、もう少し……。ねっ、もう一口食べてちょうだいよ

いえ、ほんとに、もう……。いえ」ともう「の間に今度は」ほんとに「が入ったが、」結構

です「はやっぱり口の中だ。

」遠慮せんといただきますよ」

向い側からあの男が口を出した。

「この人、恥かしがりで」

男はいった。

「人の見てると」で飯食うのも恥かしいちゃうんやから」

女はむっとしたように目を伏せている。女は怒ったのか？ 切長の目尻がきゅッと上っている。

「それでもって女優になるの、ふじぎな人だな」

ガヤガヤとみんなはしゃべり出す。女優の素質とは何かということについて。普段、話をさせ

るとうまくて面白いのに、芝居となるとからきしダメなのがいる、と元安サカラッキョもとやすがいつている。(元安にサカラッキョという渾名あだなをつけたのは父だ)要するに問題はアタマだよ。理解力だよ。しかし、バカが結構名優になってるぜ。だからだな、何をもって捌口しりごとし何をバカとするかだ……。

女は茶碗と箸を持ったまま、じっと俯いている。まるで裁判を受けている犯人みたいに。女は我慢している。早くみんなが自分のことを忘れてくれるようにと待っているのだ。晩飯の最中に屋間の悪戯いたずらの話題が出た時の、あの気持ときっと同じだ。八郎はしげしげと女を眺める。女は怒っているんだ、と思う。だが誰も(あの男も)女が怒っていることに気がついていない。

あの女の部屋(本当は母の部屋だが)から妙に甲高い裏声が聞えてくることに八郎は気がついた。唐紙の外に立って耳を澄ますと、

「いけすかないったらありゃしない」

と女がいつていた。

「あたい、岡惚れしちゃったわ」

ともいつている。同じ言葉を何度も何度もくり返している。

「岡惚れしちゃったわ」

八郎はあの女の妙なイントネーションを真似していった。その声はあの女にも聞えた筈だが、女は八郎と会って笑いもせず何もいわずに知らん顔をしている。

女の声は二階からも聞えてくる。

その時は自分の部屋でいつている時よりも、もっと大きく高く不自然に張った声だ。八郎は梯子段の真中へんに腰を下ろしてそれを聞いた。

「しばらくでしたわね。どうかなすって？　まあ、お敷きなさいまし。丁度いいと」ろへいぶしてたわね。坊やの本復祝いなものよ」

「おさまたげをしました」

父さんの声がいった。

「来る筈じゃなかったけれども、少し用があったから来ました。なあに簡単な用事です。返すものを返して、受け取るものを受け取りさえすればいいんですから」

「何をおっしゃるの。今日はおめでたいんだから、むずかしいことはいっこなしよ」

「いっこなしよ」のところを女は何度もいわされている。

「関東の女は全体に調子が高いんだよ。だから明るい。『あーら、いやだア……』『こっとう調子だ。軽いでしょう？』ところが関西は全体に低いね。関東の娘が『あらまあ、どうして？』というところを、関西の娘は『なんですのん？　なんで？』という。関東じゃそんなのは病人です」

「^ト」

「なんですのん……なんでエ……なんでエ……といいながら八郎は家の中を部屋から部屋へとぐるぐる廻り、玄関にあった大人の下駄を突っかけて表へ出て行った。

「なんですのん？」

といいながら小石を拾うと、帯に挟んでいたパチンコを取って、止めてあった自転車の荷台の箱から覗いている兎の耳を狙って撃った。

すると向うからチャカがやってきたので、パチンコをチャカに向けた。

「やい、手を上げるー！」

「なんでィ」

チャカは細いつり目をつり上げる。

「手を上げる！ さもないと撃ち殺すぞ！」

「なんでイ」

チャカはバカだ。いつも同じことしかいえない。「なんでイ」と「この野郎」と「こんチクシヨウ」と「ハリ倒すぞ」と。にくまれ口なんか上手でもちっともえらくないわ、と喜美子姉さんきみこはいうけれど、にくまれ口がうまいってことは、アタマのいい証拠なんだ。八郎がつける渾名を聞くと父さんはいつもいう。

「この子は頭がいい！ オレにそっくりだ！」

八郎はチャカに向って、

「てい丁、丁、丁……」

わざとへっぴり腰になってからかった。チャカの通信簿の半分は丁だ。あとは丙と、乙が一つだ。

これがチャカをやっつける最高の武器だ。チャカは口惜し泣きに泣いて追いかけてくる。

「てい丁、丁、丁……」

叫んで逃げる。野球で鍛えているから足は速い。チャカは追うのをやめて、泣きながら家へ帰って行った。

八郎はぶらぶら坂を降りていく。

なんかもっと面白いことないかなア……。

そう思いながら前に行く女の丸髻まるまげを目かけて。パチンコを構えてみる。

佐藤治六四十二歳、妻ハル三十九歳。夫婦の間には十七歳の長女喜美子、十三歳の長男八郎、十一歳の次男節たかし、三男三歳の弥わたるの四人の子供がいるほかに、生後一年足らずで死んだ二人の女の子と五歳で死んだ女の子二人がいた。治六はハルに合計八人の子供を産ませた上に、いねという芸者上りの妾を囲い、そこには八歳の幸男ゆきお、六歳の与よしお四男の二人の男児がいた。もっともその二人のうち、上の幸男は治六の種ではない。だが治六はついでだからといって幸男も自分の子供として認知したのである。

いねのほかに治六は市川にも女義太夫を囲っていた。そのほかいねの妹芸者、三味線弾き、芝居茶屋の女中、寄席のお茶子など、手当り次第に関係をつけていて、二十歳の時に女千人斬りを目ざしたが、実際に何人斬ったか、手帖にでもつけておけばよかったといっている。

ハルは痩せて小さく、骨ばっていて、目が深く窪んでいるので出入の男たちは「火喰い鳥」という渾名をつけていた。あの火喰い鳥を先生はよく抱く気がするねえと感心したのは、昔、俳句の弟子であった佐藤惣之助そうのすけである。飢えたる者食を選ばずということがあるが、先生が飢えていゝるわけがない。要するに飢えていなくても食を選ばないんだ、とまた皆は感心した。いや、先生といえども食を選んでいるのだ。しかしうまいものを食うために、下宿の麦飯を我慢して食うってこともあるじゃないか。下宿のおかみの機嫌とりに、という者がいれば、だがそれにしてもそれをやってのけられるのは凄いことだ。あの精力はナミの日本人ではないよ、とほとほと感服する者もいる。

治六は朝六時半には起きて、冬でも双肌脱ぎになって庭で弓を引く。書生を相手に竹刀打をする日もある。八郎が野球をやるようになってからは野球に熱中して、毎朝、地下足袋にユニホームという格好で町を走り、帰ってくると居候の高梨を相手にキャッチボールを小一時間やる。

朝食の後は小説を書き、昼寝を少ししてから外出をしたり引きもきらぬ客の対応をする。喜多流の謡をやり義大夫も習っている。そしてその合間に家の者を怒鳴っている。

治六が家にいる間は、つむじ風が家の中を吹きまくっているようだった。風呂は沸いたか、飯はまだか、味噌汁がぬるいじゃないか、なぜ何をさせてもそう遅いんだ、なぜ子供を泣かせるんだ、返事の声が小さい、なんだそのツラは……としまいには顔の造作までが文句の種になるのである。機嫌がよければよいで、悪ければ悪いで騒がしい。つむじ風のように出て行き、つむじ風のように帰ってくる。その旋風に乗って八郎と節は喧嘩をした。悪態をつき、つかみ合い、殴り合いをして揚句の果は泣く喚く。それを制する女たちの金切声。赤ん坊の弥が怯えて泣く。

この家の障子に満足なのは一枚もなかった。玄関の履物は客のものであれ、家のものであれ、子供たちは勝手に穿いて出て行く。構わずに泥足で踏んづけ蹴散らされる。客の中には履物を懐中に入れて座敷に上る者もいる。玄関先では八郎の投げる癩癩玉が破裂する。

「うるさいッ！ 何だッ！」

という治六の怒鳴り声が落雷のように二階から落ちてきたと思うと、ダ、ダ、ダダーッと階段が割れそうな音が駆け降りてくる。それにつかまるまいと子供らは家中を逃げ廻る。治六は常に真剣勝負という男だから、子供が相手でもとことん追い廻し、ついにつかまえて拳固を固めて殴りつける。

「うるさいって起りながら、自分が一番うるさくしている」

ハルは頭痛膏の上を揉みながら、誰にいうともなく呟くだけであった。

まったくこの頃の佐藤家は、沸騰しているごった煮の鍋の中のようなものだった。だがそれでもこの家の子供たちは幸福だったのである。それは不幸を考える暇もないような毎日だった。こ

った煮の鍋の中身が、沸騰しながらそれなりに調和しているように、佐藤家では下働きの女中から居候まで、みんな嵐の日々に馴れてそれなりに居心地よく、ものを考える暇もなく（感じる暇さえなく）日は飛ぶように過ぎていったのである。

三浦敏夫と横田シナがそんな佐藤家の居候になったのは、あの嵐の日から十日と経たぬうちである。大阪から出て来てすぐに借りたのは布団屋の二階だったが、収入の当がなく、持ち金だけで暮さなければならぬ二人の生活が行き詰ることは目に見えていた。役者で居候の一人である元安サカラッキヨは三浦の古い知り合いで、この家へ三浦とシナを紹介した張本人である。その元安の心配で二人は佐藤家へ寄食することになったのだった。

「寒い間、奥さんが茅ヶ崎に行ってはるさかい、その間だけおらしてもろて、その間に次のこと考えたらええ。長い間やない、正月まで、僅かひと月くらいやがな」

三浦は渋るシナにそういった。新日本劇を頼るに当って三浦はシナに約束させられていたことがある。それは三浦とシナは兄妹だという建前を守るという約束である。

「ぼくかて辛いがな。いつまでも妹や兄やといってるのんは。早う二人で暮したいがな」

と三浦はいった。なぜ兄妹ということにしなければいけないのか、その理由は三浦にはわからない。シナはそのわけをただ

「そやかて、恥ずかしいもん」

とたっただけだった。

毎日が縁日の雑踏のような、いやそれよりも酷い、まるで喧嘩場のような佐藤家に入るかと思つとシナはいやでいやでたまらなかつた。たが女優として成功するための足がかりを作ればいいと三浦にいわれると、漸くその気になった。新日本劇には看板女優がまだいない。今のところ村

田エイ子がスターで渡瀬淳子が準スターというところだが、それとてもほかろくな女優がいな
いたためにそうなっているだけのことで、一枚看板になる女優がほしいというのは、新日本劇の年
来の課題だったのである。

「けど、わたしはなにも新日本劇の看板女優になりたいとは思ってへんし」

シナはぶすつとしていった。シナの目標はあくまで翻訳劇にあるのだ。

「わかってるがな。わかってるがな。けど、ともかくにもやね、まず、新日本劇で勉強するこ
とや。新日本劇の舞台踏んで、名前上げたら、どこへでも行きたいところに行けるがな。黙ってて
も向うから誘いにぎよるがな。それからの話や。松井須磨子になるのんは」

三浦は一所懸命にシナを説得した。今ですら兄妹ということにしてほしいなどといっているシ
ナが、もしもスターになっていった時にはどんなことをいいたすかわからない、という不安は三
浦には湧いてこないのである。三浦はシナの夢を果してやりたいという思いでいっぱいだった。

シナの夢はとりも直さず三浦の夢である。そしてその夢に近づくためには治六に気に入られるこ
とが一番だった。だから三浦は治六が「おい、誰か」というと書生部屋の誰より先に、

「ハイッ」

と答えて出て行った。治六のさほど面白くない冗談に、まっ先に笑うのも三浦だった。そうし
て三浦は何も知らずに自分で自分を悲劇の淵へ追いやるという、殆ど宿命ほくとん的ともいうべき役割り
を務めるために佐藤治六の書生部屋に入ったのだった。

「けどな、先生は女に手が早いいうさかい、氣イつけえな」

三浦の心配はそれだけだった。するとシナは軽蔑するよつに、

「へん」

と喋ればかばかしそうに横を向く。三浦はその「ぶ」で安心した。シナは常々、

「男みたいなん」

と口癖のように喋っている。男になんぼソノ気があっても、女に気がなかったらどないもならんもんや、と三浦は思っていた。しかし女のその無関心が、ある種の男を惹きつけ、狂気にしていく強力な磁力を持っていることにまで三浦は思い至らなかった。そしてそれはまたシナ自身も知らないことだったのである。

退屈を覚えると八郎はこっそり、あの女の部屋に入った。

庭を背にして置いてある鏡台は母のものだ。だが、その前に強いてあるメリンスの牡丹に唐獅子の座布団は母のものではない。

鏡台の脇の小机の上の朱塗りの丸盆に湯呑茶碗（湯呑茶碗は蓋つきで、狛が手毬にじゃれている模様だ）と急須と丸い罐が二つ置いてある。一つの罐には煎茶が、もう一つには殻つきの落花生が入っている。それを八郎は知っている。茶罐の色は緑色で、落花生の方は黒だ。八郎は部屋に入ると黒い方の罐を開けて、出窓に跨またがって落花生を食べた。

二階から父さんの声が聞えてくる。

あの女の声は聞えない。

父さんは大声で笑っているが、女の笑い声は聞こえない。

父さんの大声は機嫌がいい時に出る声だ。

八郎は出窓の外に落花生の殻を剥いては捨てた。

「だからね、いろいろな声が出せるというところは、いろいろな心になれるということでしょう。わかるかな。ほくはあなたにひとつ注文があるんだが、あなたは多分、正直な女性でしょう。必要以上に正直すぎるというてもいいかもしれない。しかし、正直だが、どこか自由じゃないんだな。どこかで自分を抑制しているでしょう？ 違いますか？」

八郎は懐に落花生を入れると出窓の前の楠の枝を伝って屋根に上った。屋根に上ると庭も近所の家も足の下に沈んで、何だか偉くなったような気持ちになる。谷を隔てて向い側の台湾学校に明るい陽が当って、冬のはじめなのに、まるで一足とびに春がきたような日だ。父さんの声がすぐ近くに聞えた。

「——いろいろな人間のいろいろな気持ちになれるということは、感性が柔軟でなくちゃいけないということですよ。理屈で人を理解しようとしてはいけないんだな……ほくのいうことがわかるだろうか？」

「はあ……」

あの女の声だ。

「わかりますけど……でも……やっぱし、わかりません」

「アッハッハッハア」

と父さんは笑った。一番機嫌のいい時の笑い方だ。

「まったく、あなたは正直だ……」

父さんの声にはまだ笑いが残っている。

「ぶっしたらいいでしょっつ？ 先生」

「小説を沢山お読みなさい。日本のものだけでなく、モーパッサン、ゾラ、トルストイ、ツルゲ

エネフ、バルザック、ドストエフスキ……ありとあらゆるものをお読みなさい。ほくの書棚から自由に持って行っていいですよ。それからどいどん芝居を見る。新旧問わずに見る」ことです。

そうだ、落語もいい。寄席へいらっしやい。大阪訛をとる勉強にもなる」

「はあ……」

「そしてね、経験を豊富にして自分をもっと開放することだな。閉じ籠っているところから外へ出ていらっしやい」

「はあ……けど」

「けど……何ですっ」

父さんはまた高く笑った。

「それぞれ、それがいけないんだ。いいことをいう前に、まるで牛のようにあなたは反芻する。その癖をおやめなさい。こんなこといったらいけないんじゃないかとか、恥かしいとか、人にどう思われるとか、そんな考えを捨てることですか。思ったことを思った通りに表現する。松井須磨子という女優はそういう女ですよ。べつに器量がいいわけじゃなし、頭もよくない。ただ彼女は常に自由なんだ。自分を解放している。それが須磨子の成功の原因なんだな」

「はあ……」

低い沈んだ返事。

「大丈夫。横田くんは須磨子を凌ぐ女優になれる。ぼくが今いったことを心掛ければ。アッハッハッハ……」

落花生を食べ終って八郎は屋根を降りた。そうして父の、

「アッハッハッハ」

を真似ながら、^{はだし} 跣のまま庭から表へ出て行った。

二、三日して八郎はまたあの女の部屋へ入った。黒い罐を開けると落花生が補充してあった。八郎はひと掴み懐に入れてまた屋根に登った。

「そんな」

というあの女の声が聞え、八郎は息を殺した。なぜ、息を殺さなければならぬのかわからなかったが、ひとりでに息が止り、聞き耳を立てていた。

突然湯呑茶碗が倒れる音がした。ジュウ、ブワアアと灰神楽の^{はいかぐら} 気配が立ちのぼった。あの女が小さな悲鳴を上げて立ち上り、襖^{ふすま}を開けて階段を駆け降りて行く。間もなくどやどやと足音がして、はなやの声がいった。

「あらまあ、あらまあ、たーいへん」

「オレが袖を引っかけたんだ」

父さんの声が聞えた。はなやが拭いたりはいたりする音が聞えてきた。暫^{しばし}くすると静かになり、

「すみません」

というあの女の低い声が聞えた。父さんの声は聞えなかった。

何日か経って、また八郎はあの女の部屋を覗いた。あの女はメリンスの座布団を出窓の前に寄せて、広げた新聞の上で落花生を剥いていた。

女はふり返って八郎を見ると、黙ったまま剥き上った落花生を手に載せてさし出した。八郎は部屋の中に入って行った。落花生を受け取って口に入れながら出窓に跨った。

女は落花生を剥いてはさし出す。

八郎は受けとっては食べる。

女は片肘を膝に載せた前かがみの格好で、まるで考えごとごに耽ひげっているように豆を剥きつつける。

「いったい、いつまで剥くつもりなのか。八郎がそここにいることを忘れたように何もいわずに剥いてる。」

八郎は豆を食べながら歌った。

「ハコネの山は天下のケン

カンコクカンもものならず」

それから八郎は出窓から降りて、剥いてある豆をひと掴み掴み取った。

「こんだけおくれよ、ね？」

女は顔を上げ、八郎を見て頷いた。

「もっと沢山、持っていってもよろしいのよ」

「よろしいのよ」に関西訛なまりがあった。それが八郎と女が口を利いた最初である。

「これ、夜までとっとくんたい」

八郎はぶっきらぼうにいった。

「これをバターで炒めて、塩ふっておくんたい。夜になったハラ減るだろ？」

女の目の中に微笑が浮き上ってきた。

「そのとき、チャカに一銭で売ってやるんだ」

睦みはった目の中の微笑がひろがった。

「その一銭で食パンのミニ、買ってくるんだ。それにバターつけてカリカリに焼くんだ。うめえ

ぞ才」

微笑はひろがって、大きな目の少きつい輪郭がやわらかく変化した。

「それをチャカに二銭で売る——」

女は笑った。八郎をじっと見て、さもおかしそうにクツクツ笑った。何がそんなにおかしいのか八郎にはわからないが、

——この女が笑った……。

と八郎は思った。

春日町から伝通院でんつういんに向って富坂とみさかを上って行くと、右手の高台は下富坂、中富坂、上富坂の三つの町に分れる。一番上が伝通院のある上富坂町、次の横丁を入ると中富坂町があって、目の下に春日町の商店街が開けている。

真田さなだいねのことを「富坂」と呼ぶのは、その中富坂に住んでいるからで、そこが治六がいねのために借りた妾宅である。家は四間ばかりの小ぢんまりした平屋だが、庭は比較的広い。庭の先は崖になっているので、遠くまで下町が見渡せる。

真田いねと治六の仲は、いねが芸者をしていた頃に始まって、もう八年になる。いねは色の浅黒いやせぎすのイキな女で、治六よりも八つ年下の三十四歳である。芸者時代は「たけくらべ」などを暗誦して文学芸者といわれ、話題が豊富で話術が巧みなので人気があった。気っぶがいいので治六とウマが合う。治六がソノ道の猛者もくさなら、いねもそれに負けない好者すきもので、だから、二人はいうなら金庫の鍵穴と鍵のように、二つとない相棒同士として固く結ばれているのだと周囲の

者たちはいつている。

治六はハルにはいわないことをいねにはいう。相談ごとはいねにはする。いねは呑み込みがよく、太っ腹で何ごとにも話が早い。ハルはやきもちやきだが、いねは治六の浮気沙汰を知っても平気で、

「先生、末広のお茶子を口説いたんですって？ いやですねえ。あんなホッペタの頼あかい子、どこがいいんです？」

とからかうだけだ。治六の女出入りのたびにやきもちをやいて口を利かなくなるハルも、いねの存在だけはもう諦めていて、治六が富坂へ行くのを黙認しているのである。

治六は問わず語りに、横田シナのことをいねに話した。新日本劇は看板女優に困っていたが、漸くいい女優を見つけ、これから育てようと思っている。関西で多少舞台の経験はあるらしいが、まだ一人前ではない。言葉に大阪訛があつて歯切れが悪い。垢ぬけしていない。しかしあの女は育てようによっては須磨子を凌ぐ大物になるだろう。

「で、器量はいいんですか？」

「うん、悪くない。不器用だが頭も悪くない。じっくり考えて呑み込んでいく方だな。とにかく一所懸命なのがいいんだよ。しゃれっ気もなければ男に目もくれない。芝居一筋だ」

「おやおや」

いねはからかうようにいった。

「先生でも駄目？」

世話好きのいねは何度も横田シナの話の聞いているうちに、「一度、連れていっしょしゃいな」といわずにはいらなくなる。その女に好奇心も湧く。

「そつだなあ。ここで江戸前の女を見せるのも悪くないな。勉強になるだろう。いろんな女が入りしてるから」

「そつですよ。下町のおちゃっぴいならいくらでもいるわ。言葉を憶えるなら出歩かなくちゃ。

茗荷谷にいて先生相手に台詞の勉強したってしようがないでしょう。大阪訛はとれても東北訛を憶えたら却って困りましょう」

「何をいうか」

いねは快活に笑う。こういう会話はハルが相手では交せない。

「先生、自分の劇団の女優だけには手を出しちゃいけませんよ。よござんすか」

そついっていねは笑っていた。

新日本劇はその年の秋に東京座で紅緑原作の「鳩の家」をかけた後、次の興行はまだ決っていなかったのだが、ここへきて来年の二月に甲府から名古屋にかけての巡業の話が入ってきた。件の点で治六は二の足を踏んでいたのだが、その一方で横田シナの実力をこの巡業で験してみようかという考えも浮かんでいる。しかしその案は団員や座長格の川村花菱の反発を食うだろうことは想像がつく。それを押し切るかどうかは、横田シナの精進にかかっているのだ。

横田シナがいねの家に出入するようになったのは、そんないきさつからである。シナは治六にいわれていねの所へ行き、寄席や芝居に連れ出された。いねは袋物屋、呉服屋、小間物屋、おしる屋、小料理屋と、めまぐるしいばかりに連れ歩き、

「この人はあたしの妹分なの、よろしくね。でも勤ちがいしないでちょうだい。色里の人じゃあないの。今に一流の女優になる人なんだから」

とシナを立てた。いねはおとなしくいうなりになるシナが気に入ったのである。

「横田さんと歩くと人がみなふり返るんですよ。晴れがましくってねえ」

と治六に報告した。

「まったく、なんていい女なの……。なんにもしないで、こうして坐ってるだけで色気がこぼれてるんだもの……」

惚れ惚れとシナを眺める。東京弁のイントネーションを憶えるにはお湯屋が一番いいのよ、と
いってシナを銭湯に誘い、そのあとで治六にいった。

「横田さんの裸って、そりゃもう、まっ白。お餅のようって言うのかしら、雪のようって言うのかしら……小説家ならうまいこというんでしょうけどねえ。そりゃあもう、シミひとつないの。

あたしは自分がこんなに黒いから、よけいそう思うのかもしれないけれど、お湯屋でもみんな見
てますよ。するとねえ、あの人、恥ずかしがって、ろくに洗わないで出ちまうんですよ」

そんな言葉が男を刺激することを知らないわけではないが、それでも思ったことは口に出さず
にはられない性分である。

「うちの先生はねえ。二十だか二十五だかの時に女千人斬りの悲願を立てたんですってさ」

いねはシナにもあけすけな話をした。

「先生はお道具が『傲慢なのよ。それだけじゃなくて、アッチもねえ、そりゃあ強い。それも
『傲慢でねえ……』」

「はあ」

としかシナは答えられない。

「驚いてるの？ そんなことに驚いてちゃ幕内になんかいられやしないわ」

「そつでしようか……」

「そうとう。芝居者ってそりゃあしょうがないのが揃ってるのよ。男も女もすれっからし。暇さえあればお花ひいてるか、猥談してるか、女の品定めしてるか、口説いてるか……。今の今まで悪口いってた女を、五分後には口説いてるんだから……驚いた？ でも「こういうことも勉強のうちよ。覚えておいたほうがいいわ」

いねはすっかりシナに心を許していた。シナが気に入っているだけでなく、治六の役に立ちたいと思っていた。驚いても驚かなくても「はあ」「はあ」としかいえないこの従順で不器用な若い女のために、やがて煮え湯を飲まされる時が来るかもしれないとは、この時、いねは夢にも思わなかったのである。

二

もしも元安豊の口から、三浦敏夫と横田シナは兄妹ではないらしいということを知ることが出来れば、治六のシナへの気持はまた違ったものになっていたのかもしれない。

はじめてシナが三浦の後ろから書齋に入ってきた時、一目で治六はシナに惹き寄せられるのを感じていた。しかしその時は女としての魅力のほかに、女優としての可能性を評価する余裕があったといえる。だが元安がやってきて、

「この前の土曜日、三浦と横田さんと三人で神楽坂を歩いたんです。ところが横田さんとぼくが並ぶと、三浦の奴がその間に割り込んでくるんです。試しにまた並んでみるとまた割り込んでくる。どうもねえ、ありゃあ兄妹じゃないですよ……」

といった時、治六の胸には突然、怒りとも口惜しさともつかぬ強烈な渦巻が噴き上ったのだ。
った。

「ありそうなことだな」

辛うじてそういつてみせたが、その後、暫く治六は虚ろになった。

——三浦敏夫……あんな奴の女だったのか……。

殆ど侮辱を受けたような気持だった。失望と怒りという形をとって欲望が頭を擡げたのはその時からである。シナを女優として大成させたいという気持と、男としての欲望と、どちらが多いのか治六にはもうわからなくなっていた。シナの不器用な台詞まわし、関西訛、無表情に治六は手古摺った。横田シナという女はいったい何を考えているのか、それもわからない。三浦を愛しているのか、いないのか。兄弟だということにしようといひ出したのはシナの方にちがいない。いかにも彼女のいいそうなことだとは思うが、なぜそういふことをいったのかがわからない。彼女にはどんなことが喜びで、何が悲しみなのかも掴めない。こんなに正体のわからない女に治六は初めて出会ったのである。

しかし彼女は軽薄な女ではなかった。沈着で深くものごとを考える女だった。あるいは彼女の反応の遅さはよく考えるための遅さかもしれない。簡単にわかったつもりにならないところが、大物になるゆえんかもしれない。治六はああ思いこつ思ひして、掴みどころのない彼女に引きずられていったのである。

治六の頭からはシナのこと離れなくなった。階下のハルの部屋にシナがいるということだけで治六の心は乱れた。朝も夜もこの家にいる限り、神経は階下に集中している。あの日、元安の言葉によって惹き起された異様な渦は、日ましに強く激しくなって殆どめまいを覚えるほどで

ある。

——あんな男の女だったのか！

日に幾度となくそう思った。三浦への嫉妬は憎悪になった。二人がこの家へ来てからもう二か月になる。二人はどこかで逢引をしているにちがいない。三浦があ部屋へ忍んで行っているのかもしれない。そう思い至ると治六は無をいわず三浦を引き据えて面罵し、思うさま殴りつけたくなる。シナの声がして、玄関を出て行く下駄の音が聞えると反射的に疑惑が閃いた。

——どこかで三浦と会うんじゃないか？

治六は立ち上がり、階段を駆け降りる。

「三浦くん……いるかね、三浦くん」

「はい」

玄関脇の部屋から間の抜けた返事が聞えてくると治六の緊張はみるみる解けて、その場に坐り込んでしまいたくなるほどだ。

「なんですか？」

目鼻立ちは整っていて色白で品も悪くないのだが、いかにも気魄きはくのない、生れてからまだ一度も悩んだり考えたりしたことがないというような顔が唐紙を開けて出て来る。

「君、すまないが……」

治六はとつさに用事を考える。

「丸善まで行って……」

何かの本を買ってこさせるつもりだったが、今この男を外へ出せば、万が一、どこかでシナと会わぬとも限らないという心配から、

「ああ、もついいい……思い出したよ。福士ふくしが買ったのを届けてくれることになっていた。いいよ、うう……」

「そうですか。けど、どうせ暇ですから、行ってきますけど」

「ういよ、うう」

ポカンと立っている三浦を尻目に急いで二階へ上った。

——あああの男！ 何という面めんだ！

そう思うと今しがた鎮まった胸の底から、またしても沸々と毒の泡が立ちのぼってくるのである。

三浦も憎いがシナも憎い。

いまだどんな男も愛さず、寄せつけず、世間を知らず、愛の悩みも肉体の喜びも知らないと思っていたあの女が既に何もかも知っていたのだと思うと、治六は煮えたぎる鍋の中にほうり込まれたような気がした。嫉妬が欲情を膨張させた。富坂のいねとのどんな狂態も、この欲望をなだめることは出来ない。

もう間もなくハルが帰ってくる——。

そう思うとじっとしていられなくなった。ハルが帰ってきたら、横田シナがこの家に住む部屋がなくなるのである。その時はシナはどこかへ出て行くつもりをしている。出て行けば当然三浦とひとつ家に住む——。

「——何とかしなければ」

治六はいらいらと声に出していった。仕事が手につかなくなった。原稿は一行も書けない。この現状を打破するにはただ一つのことしかない。それを決行するだけだった。

あと数日で正月が来るといふ日の深更、原稿用紙を広げた机に向って万年筆を握ったまま、一字も書けずに凝然と数刻を過していた治六は、ふいに立ち上って階段を降りた。家中が寝静まっている廊下を通り、シナの寝ている部屋の前に立った。声もかけずに唐紙を開けた。家の者の誰かが起きるかもしれないという心配はもはや頭のどこにもなかった。暗い部屋に向って、

「横田くん」

一言静かに呼んだ。部屋に入って後ろ手に唐紙を閉めた。出窓の上の欄間から射し込む星明りの中で、シナが身じろぎして起き上る心配がした。

「横田くん、ぼくは頭が割れそうだ……」

シナは黙っている。慌てた気配もなく、心配そうでもなく布団の上に坐っている。

「眠っていたの？ 起きていた？」

治六の言葉に、

「はう……ういえ」

低いいつもの曖昧さで答えた。

「ぼくは眠れない……頭が割れそうに痛くて……ぼくは」

治六はシナに近づいた。

「このままじゃあ、ぼくは気が狂う……」

そついうと治六はシナの上にかぶさっていった。

気がつくくと、あの女がいなくなっていた。

どこへ行ってしまったのか、誰かに訊いたらわかるだろうけれど、特に知りたいとも思わないから八郎は訊かない。いなくなったものはいなくなればいい。いろんな人間がこの家へ来ては、そのうちどこかへ去って行くことに八郎は馴れてしまった。

あの男は書生部屋にいる。あの男とあの女は兄妹だと誰かがいっていたが、兄貴だけが残ったんだな、と思った。

正月がくるので、家の中はまるでとげ抜き地蔵の縁日みたいにガヤガヤしている。男たちは尻はしよりをして、汚いモモヒキの脚を出して、手拭いで頭を縛ったり口を蔽おほったりして煤払いを始めた。おそわ伯母さんは窓ガラスのヒビワレに梅型の紙を貼ったり、障子の張り替えをしたり、ご飯を食べる間もなくタスキがけをしたままだ。

お餅は買うよりもうちで搗いた方が安上りだ。叔母さんはそういつている。なにしろこの家ときたら、大所帯の上に、遠慮も何もあつたもんじゃない、動けなくなるまで食う奴がいるからねえとノロセがいった。居候三杯目にはそつと出し、なんてこの家では通用しないのよ、とはなやがいうと、まったくだ、とノロセは賛成した。ノロセは大飯食いではないが酒呑みだ。

「ノロセさん、大飯食いと酒呑みと、どっちが上だい？」

と訊くとノロセは忙しそうにふりをして向うへ行ってしまった。

ノロセは書生なのか、居候なのか、よくわからない。自分ではこの家の三太夫だといっている。きつとはじめは居候だったのが書生になり、あんまり長くなったので三太夫になったのだらう。

酒屋が四斗樽を届けてきた。父さんは酒を飲まないが、飲んでも飲まなくても正月だから四斗樽だ。

門の外には門松が立った。三本の青竹の先が怖ろしいようにななめにサッと切れていて、あれでハラを刺したらさげえだろうなアと思う。竹の下に松。その足もとをキリキリと白縄が巻いている。

「オレン家の門松だ。見ろよ！」

とチャカは友達に自慢している。自分に自慢出来るものが何もないものだから、門松を自慢している。情けない奴だな、お前は、というと、

「およし。晦日に喧嘩は許さないよ！」

と伯母さんがいった。

正月がくるので、母さんが茅ヶ崎から帰ってくる。あの女のメリンスの牡丹の花がとんでいる座布団があったところに、懐かしい母さんの座布団が置いてある。それには色んな色の古毛糸を継ぎ足して作ったカバーが掛っている。あの女の座布団はどこへ行ったんだろう？ 八郎は母の部屋の押入れを開けたが、メリンスの座布団はどこにもなかった。

大晦日の夕方、母さんとワタルとおらずと喜美子姉さんが帰ってきた。母さんはすぐ炬燵に入った。つた。

「八郎も節もいい子していたかえ」

にこにこしていった。母さんはお客さんみたいだ。明日は正月だといっても何もしないで炬燵で「主婦之友」を見ている。にこにこしたのは家に入ってきた時だけで、晩飯の時は疲れたと行って茶の間には出てこなかった。

「先生がいらないから」機嫌が悪いのさ

と居候のコンチャンがいった。

いつの間に帰ってきたのか、元旦には父さんがいた。奥の座敷で「おめでとつ」をいった。父さんは袴を穿き上機嫌で、「やあ、おめでとつ、やあ、おめでとつ」とみんなに答えていた。母さんは父さんの隣にちんまりと坐って、「皆、今年も病気をしないで元気に過せるといいね」といった。

伯母さんはタスキを外して、折目のついた着物を着て、よその人のようだった。喜美子姉さんと優子姉さんと修子姉さんはきれいな晴着を着てすましておちよぼ口でおとそを飲んだ。なにも正月だからって、おちよぼ口になることはねえだろう、といたかったが、正月だからと思ってやめた。

八郎はお重の中の栗きんとんと卵焼きばかり食べた。チャカが真似をするので喧嘩になった。

「そんなにきんとんばかり食うなよ」

とこうと、

「自分だって食ってるじゃないか」

とといったので、

「オレは全甲だぞ」

といつてやるよ、

「なんでイ」

といつて元気がなくなった。

「お願いだから、正月そつそつ喧嘩しないでおくれ」

と母さんが泣き出しそんな顔をした。父さんは何もいわなかった。父さんが癩癩をおこさいのは珍しい。きつと正月だからだ。

二日は朝から雨だった。雨の中を年賀の客が次々に来た。毎年、正月二日は新年宴会の日と決っている。

「どうかお前たち、今日一日おとなしくしておくれ。何もしないでいたら五銭ずつあげるからね」

と伯母さんがいった。

姉たちはすこ六をし、母さんは炬燵でそれを見ていた。すこ六に飽きると福笑いをしていた。福笑いなんて、何が面白いんだろう。目がサカサマになったり、口が顎の下に出たからってキャアキャア笑える気持がわからない。あの連中は正月は笑うものだと思っているんだ。正月だから喧嘩をしてはいけない。正月に泣くと一年中、泣くことになるんだよ、と真面目な顔をしている。雨が降っているので表へ行けない。それで八郎は退屈して身体がムズムズしてきた。二階から父さんの大声やどつと笑う声や歌や手拍子が聞えてくる。書生部屋の連中は袴を穿いて総出で酒や料理を運んでいる。

八郎は家の中をうろろと歩き廻った。動物園の熊か虎になったような気持だった。玄関の方へ行くこうとすると、伯母さんが、

「五銭だよ、五銭」

といった。仕方なく廊下でチャカを相手にメンコをしていると、

「おや、横田さん」

という声が玄関の方でした。

「あけましておめでとつございます」

八郎は久しぶりにあの女の声を聞いた。おめでとつございます、のあと、何かムニヤムニヤと

口の中でいっている。八郎が広瀬中佐で乃木將軍をひっくり返したとき、廊下の角に横田さんが出てきた。横田さんはいつかの紫と鼠色の矢絰のおついを着ていた。これが横田さんのイッチョウウラなんだな。横田さんは八郎を見て、にいと笑った。

「おめでよっ」

といったので、八郎は少しテシながら、

「おめでよっ」

といった。横田さんはそのまま二階へ上っていった。滅多に笑わない横田さんがにいと笑ったのは、正月だからだ、と思った。

正月はみんながいつもと違う人になる。

八郎は口から出まかせの歌を歌った。

「正月はめでたいよー

正月はうれしいよー

なぜかというとねー

みんないい人になるからだよー」

三が日は過ぎた。

八郎は三時のあべ川餅を食べながら、父と母が喧嘩をするのを見ていた。正月三が日くらいは家にいて下さいよ、と母さんがいっている。父さんは二日の夜、新年宴会に来た連中と一緒に夜中に出かけたまま、今日の昼すぎに帰ってきた。母さんの窪んだ目が朝からつり上っていたのはそのためだ。父さんが帰ってくるまで母さんはノロセを相手に小さな声でグチャグチャと父さん

の悪口をいつづけていた。わたしのことをみんなでやきもちやきだといってるそうだけど、こんなあつかいをされて黙っていられると思ってる？ いや、誰もそんなことをいってませんよ。奥さんは辛抱強い方だとみんな褒めてます。富坂のことだって、ちゃんと認めておられるんだし、なかなかこっちは出来ません……。

グチャグチャいうのをやめてくれ。子供の身にもなってくれ。梅雨どきの雨漏りみたいに、絶間なく愚痴をこぼす小さな声を聞いていると、八郎はいらいらしてくる。いや、まったくです、おっしやる通りです、といっているノロセのハゲ頭を目がけて、新聞紙を噛んで丸めたやつを弾にして。パチンコで撃った。ペチャッと頭に当たった。

「イタッー！」

とノロセが手をやる。そんなもの、痛いわけねえじゃないか。

「およし。そんなことおやめ」

母さんはそういうだけだから、次は消しゴムを弾にした。ノロセの頭に当たってはね返った。ノロセは笑って当たったところを撫でている。

「いけません。およしなさい……」

と母さんはいう。どうしてそんな小さな声で叱るのだ、と八郎はまたいらいらする。か細い声で泣くようにいわれると、父さんに怒鳴られるよりもイヤな気持だ。

なぜもっと一所懸命に怒らないんだ。八郎は暴れなくなる。

そんなところへ父さんが帰ってきて、グチャグチャはノロセから父さんの方に向いた。父さんは黙って煙草を吸っている。片っほの眉毛がピクピク動いて、母さんのグチャグチャを聞いている。

八郎は玄関へ走って行って、金屏風の前に飾ってある花台の上の、銅の花器に活けた松と葉牡丹と菊を引き抜いて投げた。はなやが見つけて金切声を上げ、書生部屋からどやどやと男たちが出てきた。それを見ると、もう暴れるのをやめるわけにはいかない。凶暴な力が腹の底から突き上げてきて、何もかも叩き壊したくなった。バットを取りに子供部屋に走って行き、打つ構えで戻ってきた。暴れるのは人の見ているところじゃないと暴れ甲斐がない。バットを見てはなやがまた悲鳴を上げた。居候のコンチャンがバットを取り上げにきた。コンチャンは中腰になって両手を前に突き出し、指を熊手のように曲げて歯をくいしばって隙を狙っている。どこからかチャナが現れて、後ろから箒でもって脚もとを搔っ払った。八郎はひっくり返る。バットが飛んだ。す早くコンチャンが拾った。八郎はチャカを追いかける。チャカは逃げる。廊下から部屋へ、部屋から廊下へ、ぐるぐる走り廻った。二人で父さんと母さんのまわりをぐるぐる廻った。

「んんんー」

雷が落ちた。そしてそのまま父さんはまた外へ出ていってしまった。

「どっどっしてお前たちは、そっなの」

顛瀾こめかきを押えて母さんがいった。聞えないくらいこめかきの小さな声だった。その小さな声が八郎を凶暴にする。暴れ廻る手足を押さえることが出来ない。

誰か押えてくれ。だが誰も押えられない。仕方なく八郎は暴れる。

茅ヶ崎からハルが帰ってくるので、押し詰ってからシナは、富坂のいねの家に寄食することになった。そのことをいいたしたのはいねである。

そうしてくれるか、と治六はほっとしたようにいった。妻の家に身体の関係をつけてしまった女を預けることに後ろめたさはあったが、それよりもいねの所に預けておけば、三浦が近寄るのを防げるという魂胆が勝った。

「おいねが暫くの間、うちへ来ていればいいというんだが、どうだろう。気が進まなければ無理に行くことはないんだよ」

そついうとシナは少し考えた後で、

「そつさせていただきます。厚かましいようですけど……」

と答えた。いねの所へ行けば、いくら治六でもこの間のように手籠ていぶ同然どうぜんに関係を強いるわけにはいかないだろう。二人の間はあの一夜の気の迷いとしてすませてしまえる。あるいは治六自身もそつ考えたのかもしれないと推量して、シナは承知したのだった。

治六はいねに、三浦という男が来ても絶対にシナには会わせないようにと頼んでいた。

「三浦は兄だといってるが本当はそうじゃないんだ。神戸時代からの男だよ」

「あらまあ……。じゃあ横田さんは別りたいのね、その男と」

「まあそつだ。手紙なんかも注意してくれ」

「合点、承知のすけ」

陽気におどけて胸を叩いてみせたのは、シナを気に入っているし、治六の役に立つことが嬉し
いからである。手をつけた女を妻のところへ奇食させるとは、さすがのいねも思い及ばなかつた
のだ。

シナは正月をいねの家で迎えた。いねの所には男の子が二人と少女が一人いる。上の子供は小
学校一年で行儀がよく学校の成績もいい、いねの自慢の長男で、下は六つで畳の上に絵草子を広

げては一日中、眺めているまっなおとなしい子供である。

「かんかんからすのまっくろじいじは、お山のお山のてっぺんへ、とんがり杉の枝を伐りにいき
ました……」

「この子は記憶力が抜群で、それはきつとうちの先生に似たんだわ、といねはいつている。

「おめでと〜い」

「おめでと〜い」

兄弟は畳に手をついて、きちんと挨拶をした。いねは子供のしつけを厳しくしているのである。

茗荷谷の子供たちとは何という違いだろうとシナは感心した。

「今日はお父さんがいらっしやるから、きちんと挨拶するんだよ。二人ともお行儀をよくして

ね

元日の朝、いねは子供たちにそういったが、治六は現れなかった。

二日、シナは茗荷谷へ年賀に行き、新年の宴席を手伝った後、最後の客にまじって茗荷谷の家
を出た。朝からの雨が漸く上って、冷え込みは強いが風のない穏やかな夜半である。富坂まで歩
いて行くつもりでぶらぶら歩き出すと、後ろから治六が来て、横田くん、富坂まで送ろう、とい
った。

曲がり角の俵宿を起して人力を頼み、シナを乗せた。これからおいねさんのところへ行くんだ
など皆、思っている。シナもそう思っていたが、俵は途中で方向を変えて着いたのは神楽坂の待
合だった。

シナが富坂へ帰ったのは翌三日の昼頃である。いねは何も疑わずに、シナの崩れた廂髪を直し
ながらいった。

「大丈夫よ。誰にもいわないから……」

いねは、シナが三浦と一夜を明かしたのだと推量したのである。

その午後、治六は富坂へやってきた。ハルと諍いざかいをした後の興奮の色を切れの長い目に残して、それが癖のせつちかな下駄の音を立てて玄関を入ってきた。

「あらまあ、お早にお越し……」

いいながらいねはいそいそと鏡台かけを撥ねて丸髻のあんばいをたしかめ、茶の間の長火鉢の前にあぐらをかいた治六に、改まって新年の挨拶をした。

「ああ、おめでとう……うん、ああ……」

いねの挨拶を受けるのも上の空で、治六はシナはどうしているかと気を散らしている。数時間前に別れたばかりの女がもう気にかかる。

「横田くんはどうした？」

そついわずにはいられない。治六が脱いだ袴をたたみにきた少女が、横田さんは与四男ちゃんを連れて凧揚げを見に行きました、と答えた。

「あらまあ、いつの間……」

いねは治六を見て、

「気を利かせたつもりなのかしら」

と笑った。

その夜、治六はいねに三味線を弾かせ、小唄を歌わせた。自分も下手な義太夫を唸ったり、いねに端唄を教わったりした。それから三人で花札をひいた。いねは賭くことが好きでまた強い。治六はうまくはないが好きな方である。シナはこの家でハチハチを覚えたばかりだった。勝負くこと

は好きでも嫌いでもないのだが花札は絵が面白いので札を合わせるのは楽しかった。

花札の散らばる座布団を真中に、三人は三角に坐っている。いねは熱中してくると片膝を立て、

治六はあぐら、シナは正座をしている。三人の目は一斉に真中の座布団の上の花札に注がれ、相手の手の内、札順、札の拾い方、捨て方、思うことはひとつである。

シナは三角の一端に身を置いて、その構図を夢のように感じていた。いつの間にか、誰かに運ばれて、気がつくところな所にいた。それがシナ自身の意志だったかとうとう、決してそうではなかった。目の前に花札が配られてくると手に取って揃えてしまうように、シナは気が進んでいないのにここまで来てしまった自分を思っ。

大阪から出て来たことも、治六の家に寄宿したことも、三浦を裏切って治六のものになり、そしてここに来ていることも、どれひとつシナが意思をもって選んだことではなかった。こんなことは本意ではないと思いついしながら、シナは流され運ばれてここまで来ている。

治六を頂点に三角形を作る二人の女。世間の目はこれを醜い光景と見るだろう。シナはぼんやりとそのことを思った。それから、いつものように、「けれどわたしのせいではない」と胸に呟いた。

明け方、花札に倦み疲れて三人は床に就いた。治六といねの寝部屋は茶の間につづく座敷である。シナは台所脇の四畳半を少女と共有し、子供たちは一番奥の部屋に寝ている。よく寝入っている少女の脇の木綿布団にシナが横になった時、廊下を隔てた座敷から鼻にかかったいねの声が聞えてきた。

「大丈夫。聞えないようにしますよ……」

耳を澄まさなくても座敷の気配は伝わってくる。故意か、無意識か、いねは乱れていく自分を

抑えようとしていない。あえて聞こうともせず、聞かまいともせず、シナは枕に頭を置いて暗闇を見ていた。シナの唇の両脇に、小バカにしたような笑い皺が寄った。シナは治六を軽蔑したのである。

甲府から名古屋にかけての二月の巡業の話が決った新日本劇では、松の内を過ぎて急遽メンバーの変更が発表された。公演の出し物は東京座公演で当たった「鳩の家」である。その時に準主役をやった渡瀬淳子は休み、その代りとして横田シナがふり当てられた。聚楽館女優養成所で演劇の素養を積み、多少の関西での舞台経験があるとはいえ、横田シナは海のものとも山のものともわからぬ無名女優に近い存在である。だがこの旅公演に当ってあえてシナを起用したのは、劇団の女優陣が貧困なためである――。

劇団員は川村花菱からそのような幹部の意図を説明された。これは横田シナ一人のためではない、新日本劇全体の浮沈を賭けているのである、と。

シナもまた治六から、そういう意図を告げられた。だがシナは、

「はあ」

と行って、口籠って、目を伏せただけである。

「これはいうなら、あなたの試金石だよ。うまくいけば次は東京の一流の小屋で本格的に売り出すつもりだからね」

「はあ……でも……」

シナはそついつと口を噤む。

「でも……何だね？」

「……わたし、それではあんまり……」

「あんまり？ 何だ？」

治六は焦れて眉をヒクヒク慄わせた。シナを喜ばせたい一心で、劇団幹部の思惑を無視し、川村花菱を説得してやっとここまで漕ぎつけたことである。しかしシナは嬉しそうな顔も見せず、不服そうに俯いたまま、

「あんまり、露骨で……おかしいと思われませんか？」

こみ上げてきた失望のために、治六は言葉を失った。

もしも治六とこんな仲になっているのではなかったら、この起用はどんなに嬉しいかしのれない——シナもそう思っているのだった。女優としての実力が認められたのではなく、治六の愛欲の対象になったためにこんなに早く役を貰ったのだ。

——わたしはなにも、役を貰いたくて先生とこうなったのではない……。

シナはそういいたかったのである。シナは何かを望んで治六に身を委せたわけではなかった。

シナはただ、治六の激しさに引きずられて負けただけだった。シナが唯一目ざしているものは確かに女優としての成功だった。しかし治六を受け容れたことによって女優の道が開けることに、

シナはむしろ侮辱を覚えるのである。

佐藤治六の狂気と苦悩は実にこの時から始まったといってもいいだろう。不服そうに目を伏せて困惑の表情を見せている女に治六はとまどい、失望した。失望が怒りになるのにそう時間はかからなかった。だが、治六はそれを抑えた。シナという女のわけのわからなさが、治六の怒りを不発にしたのである。

「誰もそんなこと、思やしないぞ」

治六は激昂を抑えて、シナをなだめにかかった。

「君は自分の実力を知らなさすぎるんだよ。もっと自信を持っていいんだよ」

しかしシナは自分に実力がないなどとは思っていなかった。シナは自信を持っていた。男の力を借りなくても今に一人立ち出来る自分だ、と確信していたのである。

甲府行きメンバーの中に三浦敏夫の名はなかった。稽古の時、彼は乳母の役をやらされて、控え目で穏やかな性格が案外役に嵌はまったと演出の川村花菱から褒められていたのだ。だが出発の前になって突然、彼は役を降ろされたのである。

巡業には治六が同行することになった。劇団の顧問が巡業について歩くことなど、今まで一度もなかったことである。治六が来れば宿屋にしても役者たちと同じ安宿というわけにはいかない。俵代、食事、すべてに金がかかるのである。だが治六は平気でいった。

「横田くとぼくは同じ宿だよ」

「鳩の家」の主役「篤子」は村田エイ子で、シナは準主役の「環」の役である。その環の役が稽古が進むに従って次第に変更され、見せ場の多いいい役になっていくのに役者たちは気がついた。

「ぼくたちは賭けたんだよ。ぼくは全身全霊をもって君に賭けたんだ。君はこの公演に賭ければいいじゃないか。それ以外に何も考えることはないよ。他人がどう思っかなんぞを考え出したら何のために生きているのかわからないじゃないか」

治六は座員の取沙汰を耳にして浮かぬ顔をしているシナにそういった。

甲府への出発の朝、シナは俵で富坂の家を出、集合場所である甲武線の飯田町駅へ向った。朝から粉雪がちらつく、風はないが底冷えの激しい朝だった。シナがビロードのコートにシヨールで口もとを包むようにして駅へ入って行くと、

「シナやん」

突然後ろから声をかけられた。ふり返ると緋の着物に毛糸の襟巻で顔を包んだ三浦が立っていた。

「見送りに来てん——」

三浦は馴れ馴れしい、懐かしそうな微笑を浮かべて近づいてきた。

「よかったなあ、環の役、もろてんなあ」

三浦はいった。

「うまいことやりや。この公演にあんたの運がかかっているのやさかいにな」

それから三浦は持っていた木綿の風呂敷包みをさし出した。

「これ、羽織下や。真綿で作ってあるさかい、羽織の下に着たら自立たへんしぬくいぞ。そう思て買ってきたんや」

シナは黙ったまま、手をさし出してそれを受け取った。

「甲府は寒いところやよって、氣伊つけてな」

三浦の白い面長の、いつも楽天的に見える顔にはどこにも変ったところがなかった。一行から除外されたことにながっかりしている様子もなく、浴衣とシナとの関係に気づいている氣配も見えなかった。

「ほな、氣伊つけて。元氣に行きなさい」

と三浦はいった。

「せいなら」

この時、三浦の耳にも座員の取沙汰が入っていたのである。三浦はすべてを知っていた。だが

それでも三浦は何も知らない顔をして、シナから離れようとは思わなかったのである。自分の置かれている立場の惨めさを三浦は思わなかった。シナが東京にいる限り、自分も東京にいつづけようと心に決めていた。たとえシナと浴六がどうなろうと、シナを手放すつもりはなかった。三浦の考えていることはそれだけだったのである。

馬糞を踏んだら背が高くなる。ザルをかぶると背が伸びなくなる、と伯母さんがいったので、八郎は荷馬車がやってくるのを待っていて、ボタバタバタッと一気に落ちて湯気が上っているホヤホヤのやつを跣で踏んづけた。ホヤホヤの馬糞はほかほかとあったかくて、頃合いに柔らかくて気持よくグニュッと土踏まずの下でつぶれる。

べつに背が高くなりたいと思って踏むわけではない。道を行くおとなや子供が驚いて見るのが面白いだけだった。気のせいかな荷馬車の馬の糞よりも、陸軍佐官の馬の糞の方が色艶がよくて踏み応えがある。

どうだ、口惜しかったら踏んでみる！

そんな気持だ。人が出来ないことをしてみせると気持がスーッとする。

ざまアみる！

出来るならいっそ、馬糞を食べてしまいたくなるくらいだ。

馬糞だらけの足で「ただいま」と入って行ったら、女どもは悲鳴を上げた。

「そんなこととして、ひよろひよろの電信柱になったらどうするつもりだい」

伯母さんがいったので、八郎はご飯の時、ザルをかぶって食べた。

「呆れたねえ」

「この子はまあ、なんて子だろう、というのが伯母さんの口癖だ。なんたってこの子は治六の血を引いてるよ、というのも口癖になっている。

治六の血を引いてるといわれると、八郎はそれで悪戯も乱暴もみんな許された気持ちになる。

「治六ときたら」と伯母さんは始める。それは父さんの悪口だが、伯母さんはその話をする時、楽しいお伽話でもするような顔になる。

——何しろ十一の時だよ、お城の天守閣に登ってそこから下へ向って小便をしたのは……と始まる。学校から帰ってくる時はいつも喧嘩して血だらけで帰ってきたこと。下駄なんか幾つ買ってもすぐなくしてしまう。叱られるものだからそのうち、下駄を懐に入れて跣で歩くようになってたこと。下駄を履く時と思ったら学校の前だけ。とにかく佐藤の倅せがれが当り前に歩いていると、ころを見たことがないと町の人みんながいていた。いつも喧嘩してるか、着物の胸をはだけて、袴を引きずって、草履を手に履いて走ってるか、町の人はそれを見ていったものだ。『また佐藤の倅が喧嘩に行く』——。中学校が火事になった時、誰よりも先に一番に走っていったので、あの悪たれ童子やわらしでも学校だけは大事に思ってるんだねといていたら、何のことはない、もっとよく燃えるように羽織を脱いで火を煽っていた……。伯母さんはそこいらへんで、言葉を切って溜息をつき、まったく困った悪たれ童子だったんだから………と喋って首をふり、もうやめるのかと思うとまたつぶける。数字が大嫌いで、数学の教科書を開くと頭痛が始まるといって、教科書に毒本と書いたカバーをかけたこと。大きくなったら志那へ渡って匪賊べいせきになるんだといていたこと。

目をつむると浮かんでくるのは血だらけか泥んこ姿ばかりだよ、と伯母さんはまた溜息をつ

く。たまに静かにしていると、何か悪いことをしようと思んでいるんだろうって、みんな心配したもんだよ。とにかく窮屈なのが我慢出来ないんだから。五つ六つの頃から着物の襟をきちんとかけると頭痛がするからいやだといって、寒いさ中も胸の中が見えるような着かたをしてね。帯で身体を縛るのもいやでグズグズに締めて、その上シャツのボタンをかけるのも嫌ったんだよ。一番上と二番目は何といってもかけたことがなかった。足袋を穿くとコハゼで足首を締めつけるからいやだといって穿かないし、学校の先生は窮屈なことを強いるから嫌いだっただろう。おじいさんは、厳しい人だった。だからおじいさんともうまくいってなかった。

彼、資性恬淡、寡欲正義を思うの念切にしていやしくも人の私利私曲を許さず、一切の風潮を罵倒してあえて顧慮するところなかりき。伯母さんはいつもそこへくると真面目な顔になってすらと暗誦してみせる。それは郷土史の中に書いてあるおじいさんについての文章だ。瘦身長軀眼光炯々として人を射る。ひとたび怒る時は猛獣も仆れたたおという坂上田村麻呂を思わせたってね。おじいさんは朝から晩まで怒ってる人だったけど、その半分は冷六のことだった。近所じゃ感心してね、よくまあ飽きもせず怒る方も、怒られてもちっとも直さない方も、両方ともたいしたもんだっていったものだよ。

「じゃあボクの方がよっぽどマシンだね」

八郎がいうと伯母さんは「まったく佐藤の家は……」と呟いて肩で溜息をついた。佐藤の家には先祖代々、荒ぶる血が流れているのだ。先祖を調べたらぎつと、代々同じような人が出てくるにちがいない、というのがいつも伯母さんの長い話の締めくくりだ。

「じゃあボクが悪いことをしても、ボクが悪いんじゃないね。先祖が悪いんだ。オイラのせいじゃないアいつつと……」

そついうと伯母さんは、

「だからそのことをよく弁^{わきま}えて、荒ぶる血を鎮めるように修行しなくてはいけないんだよ」

伯母さんはいつもクソ真面目だが、そついう時はいつそつ真面目な、殆ど怒っているような顔になった。

二月に入ると父さんは十日ほど旅に出るという。八郎はワセダ中学を受験することに決めた。

「父さん、ぼく、ワセダ中学へ行くよ」

という父さんは、それがいい、それがいい、あそこは野球部があるからな、といった。

「父さん、紀元節の日は試合だよ」

という父さんは「そうか」といい、「よし、それまでには帰ってくる」といったが、その日に間に合うように帰ってこなかった。茗荷谷クラブは父さんの作った野球チームなのに。

父さんはセカンドを守って九番を打ち、その上総監督だ。茗荷谷クラブの試合に父さんが顔を出さなかったことは一度もなかったのに。酒屋の御用聞きも原稿を取りにきた記者も、無理やり野球をやらされて下手クソだといって叱られていた。父さんがいると審判を怒鳴りつけてくれるので、負ける試合も勝つことが出来るのだ。

父さんがいないと野球をやっても面白くない。この前父さんははじめて三塁打を打ったが、少しも嬉しそうな顔をしないで、あのピッチャーはオレの眼光を怖れて打たせた、ああいう奴は出世せん、と喋って怒っていた。三振をとるととつたでまた怒る。打たせれば打たしたと怒る。どうしてあの男はすぐあんなに興奮するんだろう、とみんないつている。だが八郎はそんな父さんが好きだった。父さんがいると試合に活気が出て、チームが興奮状態に陥る。その気分が何ともいえない。わくわくする。

「父さん、紀元節には帰ってきてよね、ね、ね、ね」

八郎は何度も父さんにいったが父さんは「うん、うん」といっていながら帰ってきたのは二月も半ばを過ぎてからだった。

「父さん、七対八でうちが勝ったよ」

といったが、そうかそうかといっただけだった。

父さんは野球をしなくなった。

それから前みたいに怒らなくなった。

八郎はそう感じた。父の顛顛に青い太い筋が浮き上るのは父が怒鳴り出す前兆だが、見ていると浮き出た青筋は苦しそうに怒張したまま、濃い眉は黒々とうねったまま、父さんはビクともせず、銅像みたいに固まってしまっている。

「父さん、この頃、怒らないね、どうして？」

と訊いたら父さんはびっくりしたように八郎を見つめた。見つめたまま何もいわず、暫くして、そうかい？ そうかなア、じゃあ怒ろうか、といった。気が抜けてる声だった。

何を考えているのか、この頃父さんはポーツとしている。

甲府から名古屋への巡業の首尾はますますというところだった。どの町でも客の入りはよかった。佐藤洽六の新聞小説「鳩の家」の人気に負うところがあつたにしても、横田シナはひとまず試験に合格したのである。

巡業から帰ってくると、シナのために西五軒町の小ぢんまりした家が借りてあつた。洽六が野

呂瀬に命じて捜させておいたもので、ひと通りの家具も揃っている。シナはこの家に入ったこと
によって、治六の「世話を受ける女」になったのであった。

それはシナには不本意なことだった。シナは巡業から帰ったら富坂の家を出て、どこかに安い
貸し間でも見つけるつもりをしていたのである。舞台に立てれば若干の収入がある。質素に暮せ
ば一人暮しが出来ると考えていたのだ。だがそんな考えを口にする間もなく、シナは飯田町駅か
ら人力俵で西五軒町の家へ連れて行かれてしまった。巡業の間、シナの付き人だったチエ子とい
う若い娘が当分の間家事をやることも決っている。

「君が心配することは何もないんだよ。君は芝居のことだけ考えていればいいんだよ」
と治六はいった。

四月には愈々東京の本郷座に打って出ることになった。演し物は「虎公」だ。「虎公」は読売
新聞に連載されて人気が沸騰した小説だから、それを芝居にすれば客を呼べることは確実である。

シナには主人公、お八重の役が用意されている。

「村田エイ子や渡瀬淳子は面白くないかもしれないが、仕方がないさ。どんな世界でも実力のあ
る者が勝つんだからね」

治六にそっぴいされると、シナは自分の置かれた立場の苦々しさを噛みしめながら、

仕方ない……。

と思いつのだった。ここまできてしまった今は、このまま進むしかないのだった。世間はシナの
ことを策謀家だといっていた。あの女は第二の松井須磨子を狙って佐藤治六を籠絡した。須磨子
が島村抱月の愛人になったことで成功したように、治六を捉えて野心を遂げようとしている。富
坂の妻はともかく治六に惚れている。しかし横田シナは惚れてなんかいない。あの女には野心し

かないのだと。

そんな取沙汰は当然シナの耳に入ってきた。シナの胸は煮えくり返った。

——わたしは一度でも役がほしい、役を下さいと先生にいったことなんかなかった。お金がほしいとも家を借りてちょうだいともいったことはない。渡瀬淳子を押しつけて、甲府巡業に出たといったこともない。わたしは何もいっていない……。

しかしその思いはただ、陰気くさい膨れっ面になっただけである。

「わたしは先生のいう通りになっているだけなのに……」

シナが口に出して呟くことはそれだけだった。しかしシナは何もいわないことによって、その膨れっ面で治六を苦しめた。治六は元安を呼んでシナの陰口を叩いている者は誰だと詰問し、そういう奴は即刻クビだと怒鳴った。そうして治六が怒鳴ると、その分シナの悪口に勢がつくことに治六は気がつかなかった。

治六は夢中だった。シナを喜ばせることで治六の頭はいっぱいだった。シナに成功してほしいのは、そうなればシナが幸福になるからである。シナの喜ぶ顔を見るためならどんなことでもするつもりだった。人を殺せといわれればそうしたかもしれない。彼が新聞小説に熱を入れるのはシナのためだった。小説を書きながらそれをシナが演じる時のことを考えている。それで女主人公を偶像化する。女主人公は清纯で素直で、ふりかかる悲劇によっていやが上にも清らかになる。それは治六の理想の女だったのだ。

舞台稽古が始まるとシナはすべてを忘れた。稽古場の隅に三浦がいて、目を輝かせてシナの演技に見入っていることも、その三浦を治六が苦々しげに横目で見ていることも、他の役者たちの思惑や目交めまぜにも気がつかなかった。

舞台稽古でのシナの評判は悪くなかった。見に来た演劇記者も好意的だった。シナの美貌が話題になった。何も芝居をしなくても、登場しただけで視線を集める女優であると下馬評に書いた記者もいた。

「こついう女優にしみったれた役をやらせると、折角の素材を腐らせてしまふんだつよ。多少、演技は未熟でも主役を与えなければ駄目だ。これは生れもつての柄というものでね。そもそもが主演女優に生れついている女優は、そのように育てなければね、などと治六が上機嫌なのを、シナは目を伏せて聞いていた。その胸の奥でシナは、しかしこの芝居は嘘だらけじゃないのか、と思っているのだった。

「『虎公』は東京に於て新日本劇一派を始めとし全国各地の大小劇場に上演され、空前の大好評を博した『鳩の家』の続編ともいふべき大長篇小説なるが、本編は只好評を博せるのみに非ず、著者が最近に得たる芸術的収穫中、第一位を占むべき苦心の傑作なり。

小説を読む事を厳禁せる良家の家庭も此書に限り喜んで子女に愛読せしめたり。都下数十の女学校と婦人団体亦此の書を歓迎せり。

本篇は単に劣等なる涙を誘うの所謂家庭小説に非ず。此の書は人生を如何に幸福にすべきやに苦心せる著者の熱烈なる愛の叫びなり」

「虎公」についてのそんな広告記事を読むと、シナは自分が間違っているのだろうか、と反省したりする。しかしはっきりしていることは、シナがやりたいのはこんな芝居ではないということだった。こんな清純な美しい心の女がこの世にいるものか。清らかに、正しく生きているのに、これでもかこれでもかと降りかかってくる悲劇。お客は涙を絞るだろうが、シナは心から泣けない。もっと本当の人間、人間性の真実を抉り出すような芝居がしたいという気持は、治六の芝居

をすればするほど強まっていく。

いうまでもなく治六はそんなシナの思いを知らなかった。いや、知っていても念頭に置かなかった。治六の頭にあることは、シナを喜ばせたいというただ一つのことだけである。治六はシナの胸の、まるで底なしの沼のように暗い奥の方にあるものを掴みたかった。それを捉えるためにシナを喜ばせたかった。治六はシナを把握しようとして、その閉ざした心に引きずられた。引きずられているとは知らずに引きずられて、己れを見失っていった。そしてシナの方は治六の強引さに引きずられていると思い、そう思いながら治六を引きずっていたのである。

三月、八郎は小日向台町尋常小学校を卒業した。卒業式には伯母さんが来た。これまでも学校の行事に父さんや母さんが来たことはなかったから、卒業式に来なくても何とも思わない。

八郎は早稲田中学に入学出来た。

入学式には伯母さんが来た。伯母さんの小さな髪は、ほかの母さんたちがみんな若いせいか、へんに目立った。

「伯母さん、この次、学校へくる時は白粉つけてきてくれよ」

そついうと伯母さんは小さな顔をクシャクシャにして笑った。

父さんは入学祝いに万年筆を買ってくれた。廻すと鉛筆の芯が出てくるシャープペンシルも一緒だ。腕時計も買ってもらった。ここんと父さんはやけに気前がいい。あれがほしいというところをいいつけて何でもすぐに買ってくれる。ピアノがほしいと喜美子姉さんがいったら、ピアノか、よし、といった。

だが父さんは滅多に家にいない。四月の本郷座でお忙しいんだよ、と母さんがいつていた。

八郎は中学の野球部員としてユニホームを渡された。海老茶のWASEDAのローマ字を人さし指でなぞっていると、今までに感じたことなかった真面目な、新しい気持が湧いてくる。

「希望に満ちた」とか「希望に溢れる」という言葉はこんな気持のことなんだと思った。ユニホームを家中の者に見せた。父さんはいないから、父さんには見せられない。父さんは？ ということいつも誰かが「お出かけよ」という。

「おい、チャカ。これは何と読むか知ってるかい。ワ・セ・ダだ。どうだ、羨ましいだろう。読めねえだろ。丁ばかりじゃ中学へは入れねえよ」

そういつてポカンとチャカの頭を叩いてやった。チャカが怒って腹いせに赤ん坊のワタルを蹴ったのでワタルが泣いた。ワタルはこの頃、チャカを見ると泣きペソをかく。

「どうしてお前たちは……」

母さんの例のが始まった。

「およし。お願いだから静かにしておくれ」

そのか細い声を聞くとうんざりする。四月なのに母さんはまだ炬燵に入っている。八郎はいらいらいしてくる。

「ハラ減ったよう。なんかおくれよう」

と母さんの背中に乗りかかってゆさぶった。

「はなやにいつてお汁粉をあたたためておもらい。昨日、作ったのがまだ残っている筈よ」

はなやは「チャカ坊ちゃんが食べておしまいになりました」といった。

「母さん……チャカが食べちゃったんだよう。どうしてくれるんだよう……ハラが減って死に

そうだよう……」

べつに腹は減っていない。何が原因で怒りたい気持ちになっているのか、よくわからないが、んだん腹が立ってきた。

「じゃあ、おむずびでも作っておもらい。おかかを入れたの好きだろう？」

母さんはずっと前はよくドーナツを作ってくれたものだ。仙台にいた頃、シュナイダーさんというイギリス人に教わったんだ。

「ドーナツ作っておくれよう、シュナイダーさんのビスケット焼いておくれよう」

ビスケットの焼ける匂い、ドーナツを揚げる香ばしい匂いが懐かしい。母さんはお菓子を作るのがうまい。料理もやれば上手なのに（「ハルの取柄は料理がうまいことだけだ」といつだったか父さんがいつていた）何もしなくなった。

顛顛に片手を当てて暗い尖った目で怨めしそうに八郎を見る。まるで母さんの身体が弱いのは、八郎のせいみたいに。

「およし。お願いだから静かにしておくれ」

裏声で母さんの真似をした。母さんが何もいわないのでもう一度いった。急に暴れてやりたくなってきた。

「」の野郎」

と喚いて足もとの茶盆を蹴った。

「およし。八郎……いい子だから静かにして」

八郎はもつと暴れたくなる。これでもかこれでもか、と暴れる。伯母さんはなぜ止めにならないんだ。いい加減に暴れるのをやめたいが、母さんが怒らないからやめられない。

そんなんじゃないじゃないか……。

八郎は狂ったように暴れて、自分で自分がどうにもならなくなって泣く。

学校の帰り八郎は「富坂」へ行ってみようと思いついた。

「富坂」はメカケの家だ。

メカケは「妾」と書く。

「妾。目ヲ掛クル意。正妻ノ外ニ蓄フル妻。ヨンナメ、ツバメ、カケメ、テカケ、オモヒモノ、側室」

大言海を調べたらそう書いてあった。

富坂のメカケは父さんのメカケだ。メカケと父さんは何をするか。八郎にはほぼわかっている。いいことするのさ、とノロセがいった。楽しいことだよ、キモチよくてたまんねえことだよ、とコンチャンがいった。いっぺんこれやったら、ハッチャンなんぞは病みつきになるな、といった。だいたいのはわかっている。父さんも母さんもソレをやってるんだ。母さんとソレをやった上に、父さんは富坂でもやってるんだ。ソレをやると子供が生れる。富坂にもソレをやった証拠の子供がいる。

「富坂の上の子はよく出来るらしいんだ」

書生部屋でいっていた。

「しかし上の子は先生のタネじゃないんだろ」

「前の旦那のだ。しかし先生は太っ腹だよなア、私生児じゃ可哀想だからって認知してやったんだから」

タネって何だい、と伯母さんに訊いた。

「旦那のタネじゃないってどういふことだい？」

「何をいってるんだろう。この子供はまあ」

伯母さんはそういって、どこかへ行ってしまった。だが八郎はタネが何だか知っている。あの白いドロドロの中にタネがあるんだ。山下のケンゾーと飛ばしっこしたあの中に、タネがある。独りで出して調べてみたが、見つからなかった。きっと、オレがまだ子供だからタネは育ってないんだろう。

オレは父さんのタネから出来た子供だ。富坂にいる上の子供はオレと同じタネじゃないらしいが、そのタネが「よく出来る子」になったのは面白くなかった。下のタネはどうだろう？ 下のタネもよく出来る子になったらもっと面白くない、と八郎は思う。

富坂は荻荷谷と同じように坂の町だ。電車道の向うへ渡って伝通院へ向って歩いて行った。富坂はそこから春日町へ向って下り坂になっていく左手の町だ。横道へ入ると板塀や生垣やレンガ塀の家が並んでいる。二階屋もあるし平屋もある。電車の音が通り過ぎたあとは、人通りのないしーんと静かな住宅街だ。山茶花が板塀の上に咲いていて、ブチ猫が塀の上からこっちを見ている。八郎は小石を拾って投げた。猫はヒラリと塀の内側に消え、石が塀を越えて植込みにカサリと落ちる音が聞えた。小石を拾っては投げ、拾っては投げた。はじめると止らなくなる。手当り

次第、盲滅法投げた。

「じゅん」

後ろで太い男の声がした。

「何やってる。危いじゃないか……」

ふり返ると黒い二重廻しを着て、ラッコの帽子をかぶり、太いステッキを突いたじいさんが睨んでいた。

「なんだい」

八郎はいった。

「文句あるかい」

凄味を利かせたじいさんは取り合わず、

「道はさっさと真直に歩くものだ」

そついつて、手本を示そうとするように、さっさと通りを過ぎて行った。

八郎は坂を上ったり下ったり、同じところをぐるぐる歩いた。それから伝通院の境内へ入って石段に腰を下ろした。もしも父さんが通りかかったら、父さん、メカケのところへ行くのかい、と聞いてやろうと思っていた。桜の花びらが芝居みたいに八郎のまわりで舞っている。八郎は少し悲しくなる。何が悲しいのか、わけはよくわからないがなんだか涙が出るような出ないような。桜って寂しい花なんだなアと八郎は思う。

春木町本郷座に幟のぼりが立った。定紋は八榎車やちちに三笠万里子みかさまりこの名が藍に白く染め抜かれている。浴六は横田シナのために三笠万里子という名を考えたのである。

「虎公」は初日から立見が出るほどの大入である。新聞の劇評もよかった。それが佐藤紅緑への遠慮から出たものであったとしても、これで三笠万里子は女優の道を順調にすべり出したといえた。

その公演の中日、三浦敏夫は大阪へ向う汽車の三等車にいた。彼は治六から五十円の金を貰って、東京から生れ故郷の大阪へ帰って行くのである。彼は本郷座公演の数日前に座長の川村花菱からクビをいい渡されていた。劇団を整理するというのがその理由である。その時、三浦は素直にそれを承知した。才能のない者がただ好きだというだけで芝居の世界にいるのは、本人の将来のためによくないといわれると、仕方がない、オレは下手やさかい、と思うしかなかったのだ。

クビになった三浦は茗荷谷の治六の家を出た。しかし彼は人から借りた金で、茗荷谷へ行く前に、シナと二人で暮っていた東五軒町の布団屋の二階へ戻った。そうして彼は本郷座の楽屋に入しては、シナの鏡台前に座布団を運び込んだり、茶道具や化粧前を整えたりした。治六は苦り切った顔を見せたが、三浦は平気でシナの世話をやきつづける。クビにただけでは三浦をシナから遠ざけることは出来ない。改めて治六はそれを知らされた。かくなる上は三浦にはつきりと因果を含めて大阪へ帰すしかないと治六は考えた。野呂瀬はその命令を受けて三浦に談判に行った。

「けど、なんでぼくが三笠さんに近寄ったらいけませんねん。ぼくかて先生とのこと知ったからには、今更、あの人とどうこうするつもりはありませんがな。あの人の今度のことかて心から喜んで、成功してほしいと思ってます。そやからぼくに出来ること、何でもして応援してるんです。それだけですがな。それ以上のこと、何もしてません。それがなんでいかんのですか」

しかし治六はそれだけのことでも許すことが出来なかった。三浦という男は何という鈍感で図々しい奴なんだ、と治六は激昂して罵った。そして何も出来ずに帰ってきた野呂瀬を頭こなしに怒鳴りつけた。

「しかし先生、三笠さんだってもう、あの男を相手にする気持はないでしょう。ほっとけばその

うち、三浦の方でも自然に気持がほかへ向きますよ」

野呂瀬はそういって、いっそう治六を興奮させた。シナは人の真情に対して極めて冷淡な女であることを治六は知っている。シナにとって大事なことは舞台上に立つことと自尊心だけで、それが傷つけられたりさえしなければ、あとのことはどうだっていいという投げやりなところがある。自分から男を招くことはなくても、三浦が執拗にいい寄れば、一面倒くさくなって許してしまわないとも限らない。シナはそんな女だ。そんなことも知らないで、したり顔に状況分析をしてみせる野呂瀬が治六は許せない。治六は三浦がシナのまわりを当然のような顔をしてうろろろするだけでも、金蠅が飛び廻っているような耐え難い不快を覚える。その不愉快を治六はもうこれ以上、我慢出来ないのである。

野呂瀬は治六に叱られて、三十円の金を用意してまた説得に出かけた。だが三浦はいった。

「ぼくはもう新日本劇の人間やないんですから、どうしようもぼくの勝手やないですか」

野呂瀬は三十円を五十円に値上げした。汽車賃は別途にする。弁当もつける。とにかくにもひとまず、一応は大阪へ行ってくれと懇願した。

「困ったなあ……。けどなんでぼくが大阪へ行かないけませんねん。ぼくが何をしました？ 誰にも何も悪いことしてないやないですか」

確かに三浦は何もしていなかった。だがしていなくても、彼はシナの近くにいた。今となってはたとえ彼がシナの楽屋へは顔を出しませんと約束をしたとしても、彼がこの東京の地にいるとということだけで治六は安心することが出来ないのである。

「そんなムチャな……そんな話、ムチャクチャやがな……」

そついいながら、仕方なく三浦はあまりに執拗な野呂瀬の懇願に負けて、五十円を受け取った

のだった。

早速、野呂瀬は翌日の汽車の手配をした。ぐずぐずしていて逃げられては困るのである。朝早く布団屋まで迎えに行き、弁当を買って三浦を東京駅へ見送った。いいかね、汽車に乗るところまで見届け給えよ、と浴六にいわれた通り、三浦の乗った汽車がプラットホームを出外れて、煙を残して消えて行った後もまだ、いつまでも見送っていた。

その日、東京は朝から静かな雨が降っていた。シナは楽屋の鏡台の前で、チエ子に襟白粉を塗らせながら、雨樋を伝う静かな雨音を聞いていた。この雨で上野の桜もおしまいね、と呟いた。三浦が大阪に向っていることなど、シナは何も知らなかった。

そんなふうにして三浦は、宿命が彼に与えた役割を果して、シナの前から去って行ったのだ。その後、三浦がどうなったのか、誰も知らない。誰の耳にも三浦に関するどんな噂も聞えてこなかった。こうして三浦はシナと浴六を結びつけ、何も知らずに佐藤家の崩壊の端緒を作って、彼の宿命の中に消えたのである。

本郷座にはあの女がいる。三笠万里子という名前で主役をやっている。

八郎は学校をずる休みして、本郷座の前まで行ってみた。本郷座の前には三笠万里子の幟が春風にはためいていた。

桜の花びらが、はためいている幟にまといつくように舞っていた。砂埃が立つので、襟に本郷座と染め抜いた法被を着た男衆が水を打っていた。

あの女の大きな似顔が掲げられていた。それを八郎は見上げた。肩が煙ったようにぼうつと太

いだけは似ているが、ほかは少しも似ていない。ほんものの方がずっときれいだ、と思った。

この女が父さんのメカケになったのか、と思った。

三

母さんはカキみたいになった。

カキは「牡蠣」と書く。八郎は大言海を引いて、それを憶えた。

母さんは煮詰まった牡蠣だ。どて鍋の汁の中に、黄黒くなって縮まってしまった牡蠣だ。

「母さんは牡蠣だ、牡蠣みたいだ」

そっいったが、母さんは「そうかえ」と上の空だった。

母さんはなぜ牡蠣になったのか。おそわ伯母さんは、

「ツワリなんだよ」

といった。

ノロセとコンチヤンは、奥さんは「ユウキ」みたいになった、といっている。ユウキは「幽鬼」と書く。いつか絵草子の地獄絵で見たアレだ。腕と脚が金火箸みたいに細く長くて、浮き出た肋骨の下にぶっくり腹が突き出ている。目がギョロリとばかでかくて額が抜け上り、耳の上と頭の後ろに僅かな髪の毛がぼーっと伸びている。

母さんは食べないからそんなになってしまったのだ。「飯のたびに伯母さんがいっている。

「おハルさん、気持をしっかりと持たなくちゃ駄目。食べたくないからといって食べないでいたん

じゃあますます弱っちまう。食べたなくても努力して食べるとか、食べられそうなものを考え
るとか、少しは自分でいい方へもっていきうとしなくちゃ……」

食べることだけじゃないんだよ。あの人はなんだってああんだから。自分でもってどうかし
ようって気持ちがぜんぜんないんだから。まるで流しそうめんみたいな人だわ。黙って流れてて、

誰かの箸が引つかからなければそのままどこまでも流れていく気だから……。

伯母さんは蔭でつづきをやっている。

「あれじゃ治六だっていやになっちまうわ。まったく、家の中が陰気でしょうがない」

「でもツワリだから仕方ないわ」

喜美子姉さんは母さんを庇う。かば

「子供を五人も六人も産んで、今更ツワリだなんて、おかしいよ」

「そんなこといったって、気分が悪ければしょうがないわ」

「気を持ちようよ」

伯母さんはしつこい。

赤ん坊は秋に生れることになっている。伯母さんはそれを怒っているのだ。

「どっいうんだらう。仲が悪いのに子供だけは次から次から産むんだから……」

いいかけたらいつまでもブツブツというのが伯母さんの癖だ。

「秋に生れるとしたら仕込んだのは一月か二月だらう」

書生部屋でも加藤のコンチャンと高梨のリンさんがいっていた。

「横田さんとデキたころだらう」

「だから却かえって精を出したんだ」

「罪造りだなあ」

と岡田のボヤテキが真面目にいい、コンチャンとリンさんはどっと笑った。

あの女は黙っておとなしそうな顔をしているけれども、ハラの黒い功利的な女なのだと伯母さんはいった。すっかり鼻毛をよめましたね、とはなやがいった。ほんとにいい人だと思ってあ
たし、好きだったんだけど、黙ってる人って怖いねえ、何を考えてるかわからないから。男だっ
てそうだわ。黙ってる男は人物に見えますもの。治六は調子がよすぎるのよ。だからすぐハラの
中を見すかされてしまう……。

八郎は大きな声でいった。

「デイス イズ ア ドッグ。デイス イズ ア キャット」

そんな話は聞きたくない。

「イット イズ ア ペン……」

チャカがやってきたのでいった。

「ホワット イズ ユアー ネイム？」

「なんでイ」

答えられないのでチャカは唸る。チャカは兵児帯へこおびに父さんの使い古しのオノトを挿している。

ペン先の金がすり減って、二つに割れて書けなくなったから父さんがくれたのだ。チャカはそい
つを自慢にして、友達に見せびらかしている。

「ホワット タイム イズ イット ナウ？」

「なんでイ」

チャカは細い目をつい上げ、鼻の孔を膨らませ、口をモグモグさせている。

「アー ユー ア フーリッシュユマン？」

「イエース」

ヤケクソでチャカは答える。八郎はでんぐり返って笑った。チャカは怒って殴りかかってきた。

「フーシッシュユマン フーリッシュユマン」とからかって逃げた。チャカは「フーリッシュユマン」

が何なのか知らないが、真赤になって追いかけてくる。

父さんはどこにいるんだ！

家中の者が父さんの悪口をいっていた。父さんがいないことよりも、八郎はそれを聞く方がイヤだ。聞きたくないのに耳に入ってくる。寄るとさわると家中が父さんとあの女の悪口をいっている。

あんな人間じゃなかった。治六は気が狂ったんだ、狂わされたんだ、と伯母さんがいうと、いいえ、昔からよ、と母さんがいった。母さんは何も食べないのに、父さんの悪口をいう時だけ元気になる。

だいたい、節が生れたときだってあの人は家にいなかったのよ、伯母さんは知らないでしょうけど、と始まると八郎はうんざりする。喜久井町、市ヶ谷河原町、牛込薬王寺町……貧乏に追いかけられて、とうとう音羽^{おとわ}九丁目のドブ川のそばの六軒長屋まで落ちていったんだろ。父さんは大阪に新しく出来た新聞社から招かれていると行って出て行ったとき、出かけたのは寒い頃だったのに、帰ってきたのは六月だったんだろ。新聞社へ行ったけれど、気にいらなかったとあって俳句仲間のところを泊り歩いては俳句を作ってたんだろ。

気分がすぐれないのなら、そんなにしゃべらなければいい。その話はもうみんな知ってるんだ。

いってみろといわれたら、母さんの代りに全部しゃべれるくらいだ。なのに伯母さんははじめて

聞くような顔をして、ふーん、ふん、ふん、まあねえ、まったくねえ、しょうがないねえ、と頷いている。

母さんは父さんのいない間に節を産んだ。その上家賃を滞らせたというので、薬王寺町の家を出なければならなくなった。

「節をおんぶして、喜美ちゃんと八郎の手を引いて、音羽の長屋へ越した時の情けなさといったふ……」

八郎は母さんの声色で話を先取りする。

「そのうち、亀田とおぬいが駆落ちして、蚊帳を持っていつてしまったのよ……」

亀田は書生だ。ぬいは女中だ。そんなに貧乏していても書生と女中を置いているんだからねえ、まったく、とここで伯母さんが台詞を入れる。母さんは父さんに電報を打った。

「カメタニゲタ、ゲジヨモ」

その電報に「カヤモツテ」と書かなかったのかい、母さん、と八郎は茶々を入れるが、母さんは何もいわずに幽霊のように、何かを思い出そうとするように、うなだれている。

八郎がしゃべるのをやめると、また始める。

「そんなことになったというのも、高須賀淳平さんから、磐城いわきの久慈海岸は石炭の層で出来ている、そこを掘り起せば大儲け出来るって話を持ち込まれて、すっかりその気になってしまったものだから……。その儲けで新聞社を興そうとか、馬賊に資本を貸して志那に内乱を起させようとか……。本気でもう夢中。あちこちからお金を借りまわって一カのお兄さんのところまで行ったんだから。そのうちにいろんな山師が次から次からやってきて、そのお金でお酒を飲んだり、勝手に傳を呼んで乗り廻したり……。傳屋の勘定だけで伯母さん、月に百円にもなったんですよ……」

母さんはここでいつもひと息入れる。年中この話をしているので、講師師みたいに、息を入れるところが自然と決まったのだ。

「真山（青果）さんがこの家をこんなにメチャメチャにしたのが高須賀だといって、戸山ヶ原で決闘することになったんだけど、あれは丁度二百三高地が落ちた頃よ。とっても寒い夜。高須賀さんって痔がひどく悪い人だったの。あんまり寒いので痔が出てきて、それで決闘はとりやめになったんだけど……」

母さんの愚痴話の中で八郎が好きなのはこの件だけだ。だが母さんはこんな面白い話を笑いもせずという。聞く方の伯母さんもニコリともせず神妙に頷いている。二人は折角の面白い話を台なしにしている。

同じ話でも父さんが話すとこうなる。

「オレが表から帰ってくると女中が、真山さんと高須賀さんが戸山ヶ原へ毛布ケットを敷きにいきました、というんだな。わけがわからぬままに戸山ヶ原へ行くと、凍てつくような月が出ていて二つの影が向き合っているのが見えた。一つは細く長く、一つは小さく丸い。すると小さい方がいいった。『ちょっと待て。小生はウンコをやらかしたい』高須賀には草原を見るとウンコをしたくなるという妙な癖があつてね。クソをする間、ちょっと待ってくれといった。ところが高須賀は痔モチだね。寒さで痔が出たんだよ。草の蔭に入ったままいつまで経っても出て来ないものだから、真山が『おーい』と呼ぶと『おーい、うーん』と返事がくる。『おーい、まだか』『まだだ、うーん』『おーい』『うーん』『おーい』『うーん、アイタ、タ、タ』『おーい、まだか』『おーい、まだか』『おーい、まだか』『うーん、アイタ、タ、タ』『おーい、まだか』『うーん、アイタ、タ、タ』『おーい、まだか』『うーん、アイタ、タ、タ』

「これでみんなは笑い出す。これでどうなったんです、決闘は？」

「真山がバカバカしくなってね、やめよう、といって歩き出すと、高須賀はしゃがんだまま唸りながら、『こらッ、卑怯者、うーん……逃げる気か。うーん……負け犬め!』……」

父さんの口にかかる、泣いた話も笑い話になってしまふ、と母さんや伯母さんはいうが、話は何でも面白い方がいい。

父さんは人を愉快にさせるのが好きなんだ。母さんは人を悲しませるのが好きだ。だが人を悲しませて、何が楽しいんだろう。

「音羽の長屋は地面が低いものだから、大雨が降るとすぐ江戸川が溢れて出水騒ぎになったの。だからお家賃は安かったんだけど、夏はトブ川に蚊が湧いて、いくら窓を閉めておいても隙間から押し寄せてくるの。思い出すだけでもゾツとするわ。蚊帳は亀田が持って行ってしまったし、蚊いぶしをする薪もないし、仕方ないから飯台の足を削って火鉢にくべていたんだけど、飯台の脚がだんだん細くなってきて……」

うるせえ!

もういい!

もうわかった!

父さんは悪人だ!

悪人ならさっさと牢屋へ入れればいいじゃないか!

父さんの悪口をいう母さんが嫌いだ。

母さんに悪口をいわれる父さんも嫌いだ。

いきなりその辺のものを手当り次第投げつけたくなってきて、八郎は暴れた。

「まったく、八郎は今まで機嫌がよくしていたと思ったら、いきなりこっとなるんだから……」

伯母さんが歎き、母さんは

「父さんの血を引いてるのよ」

と溜息をついた。

あの女は「魔性の女」だと書生部屋でいっていた。どこが魔性かというと、第一にあの女は黙りこくってしゃべらない。あれがクセモノのクセモノたるところさ、とリンさんの声がいって
いた。

しゃべらないのが魔モノだとしたら、この家はおしゃべりが揃っているから魔モノはいないことになる。でも母さんはどうなんだ？ 母さんは普段は黙っているけれど、愚痴をこぼす時だけはよくしゃべるから、魔モノではないのだろう。

あの女は人の悪口もいわない。愚痴もこぼさない。それだけ聞くと立派な人間だといえるような気がする。だが自分の心を隠して、決して人に見せないところが、魔性たるゆえんさ、とコンチャンが教えてくれた。

父さんはあの女の魔性に囚われたのだ。

眉毛がぼーっと煙ったように太くて、目が大きく黒く、どこか憂鬱そうに光っているあの女の顔を、八郎は瞼に浮かべた。

あの女の魔性ってどんなものなんだろう？

父さんがそれほど夢中になっているものは何なんだ？

そのことを考えると八郎は身体が熱くなってくる。

その魔性とやらに、八郎も囚われてみたくなる。

どうすればシナが機嫌のいい顔をしてくれるか、治六の頭を占めていることは今はただそれだけである。

西五軒目のささやかな仕舞屋しもたやに聚楽館時代に親友だった看護婦上りの黒田民子を呼び寄せて家事一切を委せ、シナは治六の訪れを待つだけの生活になっていた。人中へ出ることを嫌うシナは、することもなく、朝から縁側寄りの座敷の柱に凭もたれて、陰気な顔を猫の額ほどの庭に向けて、まだそれほど暑くもないのにいつも団扇を使っている。治六が入っていくと懶もつげにふり仰いで、「いらっしやい」という。低い声だ。治六の訪れを待っているふうではなく、そうかといっていやがっているわけでもなかった。億劫おっくうそうに立ち上ると、茶の間になっている四畳半の長火鉢の前に座を移す。治六によってここに連れてこられたこの運命を仕方なく無抵抗に受け入れていくという様子である。しかしその無表情の下に、ゆるやかだが執拗に渦を巻いている憂鬱が治六には見るまいとしても見えた。

四月の本郷座のまずまずの成功の後、新日本劇は五月、大阪の浪花座をふり出しに神戸、岡山、広島と廻った。大阪、神戸は入りがよかったものの、岡山あたりから目に見えて客脚が落ちた。新日本劇は役者の魅力よりも治六の新聞小説の人気で客を呼んでいたのだが、岡山、広島あたりに行くとき治六の新聞小説の読者は殆どいない。そのため客の入りもない。最後の名古屋では散々の不入りで座長格の武田正憲が若手役者を連れて姿を晦くまし、ついに新日本劇は解散したのである。

仕方なく、東京へ帰った時からシナの憂鬱は始まっている。

「少しは茗荷谷にいてあげて下さいな」

シナは目を伏せ低い声でいう。

「オレがいるのがいやなのかい」

「そんな……」

例によって語尾を曖昧に口の中に含み、

「わたしはただ……」

「何だね？」

「わたしも、わたしの立場というものがありませんもの……」

立場とは何だ。こみ上げる失望は忽ち怒りに変るが、その怒りを浴六はシナにぶつけるわけにはいかない。それをぶつければ事態はますます悪化することがわかっているからである。

「——わたしのこと世間では三呼んで呼んでるんですって」

そついう時、シナの唇の両端が下り、そこを嘲るような皺が包む。訴えるわけでもなければ愚痴でもなく、まるで他人のことをいうような冷たいいい方の中に、自嘲を装った浴六への非難が籠っている。

——わたしはなりやうつうなってるわけやないのに。

その皺はそついついている。

——そんなにいわれてまで「つうしてたいとは思わへん。

皺はそつもいつている。

——先生がついていなくなったら女優が出来ないというわけやし……。

怒りを抑えるために浴六はたてつづけにタバコをふかす。パツパと煙を吐いては捨て、次の夕

バコに火をつける。みるみる火鉢の中には長いままの吸殻が立ち並ぶ。シナは黙りこくってそれを見つめている。一旦沈黙するとシナは殻を閉ざした貝になってしまふ。陽性の治六にはシナの沈黙は何にも勝る責苦だ。

治六は生れてはじめて、我慢というものをした。自分が耐えているこの苦痛を訴えれば、シナは「ううに決っていた。

「わたしのためにそんな苦勞をかけているのだったら、いっそ別れた方がいいんじゃないかしら……」

佐藤家の内証は火の車だった。茗荷谷の八人の家族、書生に居候。富坂のいね一家の生活。それに加えてシナの暮しが治六一人の肩に懸っているのである。そのうち秋がくれば子供が一人増える。寒さがくれば質屋の蔵から家族の冬物を出さなければならぬ。そんな中で喜美子がほしがっているピアノを治六は買った。喜美子は微熱がつづいて医者はなるべくなら女学校を休んだ方がいいといっている。だが学校の好きな喜美子は休むのはいやだといって泣く。

「それなら俵で送り迎えをさせるー」

治六はそついい捨てて茗荷谷を出てきた。ピアノの支払いの上に俵屋の月末の支払いがいくらくらいになるか、その金額は頭がない。

治六は毎日この家へ来ていた。ここへ来ても愛する女が自分の辛さを理解してくれるという慰めが得られるわけではなかった。それでも治六は一日に一度はシナの顔を見なければならぬ。

シナの機嫌が悪ければ直るまで帰ることが出来ず、機嫌がよければよいで楽しくて帰れない。

茗荷谷からはハルにいいつけられた野呂瀬が三日にあげず迎えにきた。ハルは身重の妻の本能で、夫のシナへの傾斜に、今までの浮気沙汰にはなかった危険を感じ取ったのである。ただでさ

え瘦せて小柄なハルは、そこだけ瑞々しくはり切ってつき出た腹に片手を預けて、野呂瀬にかきくどいた。産月が近づくとつれて額が抜け上ってきて、暗い眼窩の奥に涙の溜った小さな目が、まるですべては野呂瀬の責任だともいうかのようにいらいらと光って野呂瀬を凝視する。その顔を見ると、野呂瀬は怒鳴りつけられるのを覚悟して西五軒町へ向わずにはいられない。おそろおそろ格子戸を開けて、

「いらっしやいますか」

という声は既に怒鳴られることを思っただけで力が抜けている。

「何だ、野呂瀬か……」

奥からの声は予想通り怒気を含んで、

「上げー」

「はー」

覚悟を決めて下駄を脱ぐ。用件をいうまでもなく、お互いに承知の上であるから、野呂瀬は黙って治六の前に膝を揃える。治六は苦虫を噛みつぶしたような顔を横に向け、気忙しくタバコをふかし、無言である。

「すみません」

何もいわぬうちから野呂瀬は謝った。

「八郎さんがひどく暴れて、お書斎の端溪の硯を庭に向けて投げつけて割ってしまいました……それから弥さんの下痢が止らないのでもしかしたら赤痢じゃないかと奥さんが心配で……」

顔を庭の方に向けたまま、怒鳴るきっかけを待っていた治六は、

「何だ、君はそんなことをいいにわざわざやって来たのかね……」

とはじめて野呂瀨に強い視線を当てる。

「いや、一番の問題は喜美子さんのことでした……昨日、血が混じった痰が出ました。今朝も少し……」

治六の眉がピクピク動く。二人の女兒を赤子のうちに死なせた治六には、喜美子は大切なただ一人の女の子である。女の子の好きな治六はどの子よりも喜美子を溺愛し、喜美子もまた母親よりも父が好きである。こうして愛する女のところへ来ていても、治六の胸は残してきた病弱の喜美子を思っただけ痛みつつけていることを野呂瀨は知っている。眉をピクピクさせたまま、何もいわない治六に、おっかなびっくりだが、追い打ちをかけるように野呂瀨はいった。

「喜美子さんは心細いんでしょうか。お父さんはまだ？ お父さんはまだ？ ってちよっちゅういわれるもので……」

「医者は何と知っている？」

「とにかく滋養のあるものを食べて静養するのが一番だと……」

「そんなことは医者でなくてもわかっている。ヤブ医者め。ほかにもっといい医者はいないのか」

「しかし、香月先生は喜美子さんが小学校の頃からのかかりつけの先生ですから、替えるわけにはいかないと奥さんがおっしゃっています。それに何ととっても親切な先生ですし」

「あの髭を見る。チヨビ髭なんか生やしてる医者にろくなやつはいない。おまけに縁なしメガネなんかかけおって」

席を外していたシナが、隣室からいった。

「先生、お帰りになったら？ ねえ、お帰りになって下さいよ。喜美ちゃんが悪いのに帰らないと……ねえ、わたしが帰さないように思われるじゃありませんか」

そのシナの言葉で、揺らいでいた気持ちが忽ちこわばる。治六は野呂瀬を睨みつけ、

「おハルは何をしているんだ！ 母親が気をつけてやらないから、弥が下痢をしたり、喜美子の病気もよくなるんだ。だいたいあの女は頭を使うということがない。怖ろしいほど鈍感だ。

八郎の中耳炎の時もそうだよ。子供が泳ぎに行くといったら、どんな母親でも耳の中に綿を詰めることを教えるものだよ。それもしないで、しかも耳ダシを出しているのに気もつかない。見ろ。

手遅れになったじゃないか。子供の病気は母親の責任だ」

シナは冷やかに口を噤んでいる。なにもこんなところで妻を悪しざまにいわなくても、と思っている。妻を咎める資格が自分にあると思ってしまうことが不思議だとシナは思う。もしも治六がシナの思惑を考えて妻を罵ってみせているとしたら、片腹痛い、とシナは思う。

「ちょっとだけでも顔も見せて下されば」

シナの言葉に力づけられたように野呂瀬はいった。

「なにしろ喜美子さんはお父さんっ子ですから……」

治六はしびしび腰を上げ、

「それじゃあ喜美子の顔だけでも見てこようか」

弁解がましくいうのを聞くと、シナは冷たい顔になって頷く。治六が茗荷谷へ行くのはかまわない。だが、弁解がましいのがシナには面白くない。

シナは治六を愛していない。

治六はそれを知っていた。知っているために尚のことシナに囚われた。シナが笑えば治六は幸福を感じる。しかしそれを知っているのにシナは滅多に笑わない。シナから愛されないことに治六は耐えることが出来る。だがシナが不幸な顔をしていることには耐えられなかった。シナの眉

に懸かっている暗い雲を霽らすためならどんな無理なことでも彼はしたかった。

だが厄介なことにシナという女は、着物にも宝石にも安逸にも価値を置いていなかった。金は食べるだけあればいいと思っていた。誰の庇護も求めず、自分一人で貧しさに耐えて生きていくことを苦痛に思わずにやれる女だった。そんなシナに幸福を与えることの難しさに治六は苦しんだ。

治六はいねと別れることを考えた。いねとは仲違いをしたわけではない。九年もつづいた仲で気心も知れていて、それなりに相和してきたといえた。いねには何の罪もない。面倒を見たシナから裏切られるような結果になっても、治六に向って怨み言をいったこともなかった。それはいねの気質でもあり、彼女の誇からでもあった。しかし治六はシナを「三号」から引き上げるために、まずいねから整理を始めることを決心したのである。

野呂瀬が別れ話の使者に立った。野呂瀬から話を切り出されたいねは、やや陰のある切長の目に皮肉な微笑を見せていった。

「よいごんす。わかりましたよ。それならそうしましょう」

一呼吸置いて、いねはいった。

「先生にいったいて下さいな。そんなに一所懸命になっても、今にきくと三笠さんに捨てられますよ、って、あたしがそういってたっていったいて下さな」

五百円の手切金でいねは治六との縁を切った。その春、三浦敏夫が五十円の金を与えられて大阪へ消えて行ったように、いねもまた治六との間に積み上げてきた九年間の愛情を断たれて、二人の子供と共に去って行った。

治六がいねと手を切ったことを聞いた時、シナはただ、

「そうですか」

といただけだった。治六がいねと手を切ったからといって、シナの立場がよくなるというものではないとシナは思ったのだ。三号が二号になったただけだった。面白半分の世間の取沙汰がまたひとつ増え、シナがいつそう悪女にされるだけのことだった。シナが満足する顔を見たかった治六は、また新しい失望に耐えなければならなかった。

父さんが暴れた。

八郎が学校から帰ってくると、家の中は嵐が通ったあとようになっていた。

母さんの部屋へ行ったが、母さんは庭の方に身体を向けたままじっと動かなかった。

「ただいま」

と叫ぶが黙ってふり返りもしない。

「母さん、ただいま」

ともう一度叫ぶが、蚊の鳴くような声が何かあったただけだった。

——母さん、どうしたんだよう……母さんたら母さん……。

そついおうと思ったがやめた。後ろからどっと飛びついて、前によくやったように力まかせに揺さぶって、思いきりゲンコで背中を叩きたかったが、やめた。

「なんでイ」

そついって足もとの箱枕を思いつき蹴って、部屋を出た。

座敷へ行くと加藤のコンチャンが外れた唐紙を敷居に嵌めていた。唐紙の枠が歪んでしまった

のでうまく嵌らない。茶の間へ行くとはなやがひっくり返った火鉢の灰を、茶殻にまぶして手箒で塵取りに取っていた。

「怖かったんですよ」

八郎を見てはなやはいった。

「先生が台所へ走って来られたと思ったら、出刃包丁を取って、福士さんに突き出して、さあ、オレを殺せって……」

「はなや」

伯母さんがどこからともなく出て来た。

「そこはわたしがするから、お前は向うへお行き」

伯母さんは塩を持ってきて畳の上に撒いて、黙ったまま畳の目に入った灰をトントンと叩き出している。

「父さんはっ」

と訊くと、見向きもせずに、

「お二階」

とだけいった。

八郎は階段の下に立って上を見上げた。高い急な階段だ。黒光りがしている。上から仄明りが射ってきている。二階は人がいないみたいに静かだ。怖ろしいように静かだ。

「父さん」

と呼んでみたが返事はない。伯母さんのところに戻って、

「父さん、いないじゃないか」

と行った。

「そんな筈はないよ」

突っけんどんに伯母さんは答え、灰と塩で山になった塵取りを持って台所へ行ってしまった。

父さんは死んでるんじゃないのか？

もう一度、階段の下から「父さん」と呼んでみた。

出刃包丁で殺せと行ったんだ。誰も殺さなかったから、自分で自分を殺したんじゃないのか？

心臓がドキンドキンと打ちはじめた。怖ろしくて階段を上れない。

「伯母さん……伯母さん……」

と呼んだ。

伯母さん！

台所へ走っていった。どこへ行ったのか、伯母さんの姿はない。

「伯母さん……伯母さん……伯母さんたらア……」

どこにいるんだよう……いても立つてもいられなくて地団太を踏んで絶叫した。無人の世界に

たった一人、八郎は投げ出されていた。家の中は大勢の人間がいる筈なのに、シーンとしている。

夢か？ 夢じゃない。ちゃんと生きてる。爪つめると痛い。生身のオレだ。

「チャカ！」

と叫んだ。

「チャカ、こいよ……チャカ……」

誰か出てこい。早く出てこないと、オレも暴れるぞ。いいか、暴れるぞ。暴れたくないけれど、

暴れるぞ。暴れてもいいのか。

その時ひょっこり、岡田のボヤテキが現れた。割れた花瓶のカケラを団扇の上に載せてのそのそと向うから歩いてきた。

「岡田ア……」

ほっとした。これで暴れなくてすむ。涙が溢れそうになった。岡田のボヤテキが今日ほど懐かしいことはなかった。

「やっぱり、先生はハッチャンの父さんだけあるなア」

ボヤテキは暢気にいった。

「先生のは二百二十日だ。ハッチャンの嵐とは規模が違うなア」

ボヤテキの声が暢気なのが八郎には嬉しかった。

父さんが暴れたのはあの女のことの原因だった。

「だから福士さんが行かなければよかったのよ」

伯母さんとノロセがひそひそ話していた。

「福士さんって人は、ほんとに余計なことをするわ。治六の気性を解っていたら、こんな騒ぎになる」とくらい、わかりそうなものじゃないの」

「しかし福士さんとしては考えに考えた揚句のことでしょう。福士さんなりに何とかしなくちゃと思ったんでしょう」

「福士さんがへたに何か考えるとロクなことにならないわ。結局、火に油を注いだじゃないの」

「三笠さんがあっさり承知したのだから……。三笠さんが四の五のいえば、先生だってこうはならなかったでしょうがね」

「あのひとつて、ほんとに憎らしい。『わたしはべつに、どうだっていいんです』っていったん

だって。『先生さえ承知すればいつでも別れますから、承知させて下さいな』って。なんて冷たい女だろう」

「別れ金の話は出したんですか？ 福士さんは」

「冗談じゃありませんよ、っていったんだって。わたしをそんな女だと思っていらっしやるのって。その時だけは気色ばんだっていう。ほんとに憎らしい……」

「あのひとならいっしょでしようなあ……」

八郎は立ち聞きするのをやめて門の外に出た。今は暴れたいという気分ではなかった。ぼーっとして門柱に凭れて道の向うを見ると、チャカがやってきた。よれよれの兵児帯に、父さんのオノトをいつものように挿しこんで、バナナを食べながら近づいてきた。

「知ってるかい？」

遠くからそういって、細い目を光らせて、生き生きしている。小鼻をふくらませていった。

「父さんが福士さんを殴ったんだ。伯母さんが止めに入ったらね、ふっ飛んで縁側から転げ落ちたんだ。すっかったぞオ……」

「そのバナナ、どうしたんだい」

「佐久間さんのところへ行って、父さんが暴れてるって泣いたら、おばあさんがくれた。行ってみな。まだ三本はあったよ」

「いらねえや、そんなもの」

捨て鉢にいったが、急に悲しくなった。いつも喧嘩をしている弟が、なぜか懐かしく身近に感じられた。平気でバナナを食べているチャカ。何も感じないチャカ。チャカはバカだから何も知らない。この家はいつもゴタゴタしている家だから、チャカはそれに馴れて何が起っても感じな

いのだ。チャカは口の横にハタケを作っている。安ものの手焼煎餅みたいにまだらに日焼した平べったい丸顔の、その暢気な感じがたまらなくいとしく悲しい。

「兄ちゃん、この皮どっかに置いとこっか。誰かがすべって転ぶよつに。ど」が「い」？」

「知らねえやい……」

つっけんどんにいつて背中を向けた。

「ねえ、ど」が「い」？」

「知らねえよう……」

これ以上しつこくすると殴るぞ、ホントに殴るぞ、そう思いながら鼻の奥がヒリヒリクシヤクシヤするのを我慢していた。

校長先生はバンザイをバンジヤイという。「ぜんぜん」を「じえんじえん」という。

「天皇陛下バンジヤイ、大日本帝国バンジヤイ、早稲田中学バンジヤイ」

校長の声色をやると、皆が喝采した。学校への道すがら、どうやって組中を笑わせようかと考えながら行く。学校の門をくぐると、うちのことはきれいに忘れてしまっから学校はいい。

皆が嫌いな漢文教師のエントツは催眠術をかけるのが好きだ。エントツに授業をさせないためには、催眠術について質問するに限るのだ。そんなら佐藤、ひとつお前にかけてやろうとエントツはいう。そうなればしめたものだ。組中の目が八郎を見つめているから、どうしても何かしてみせなければならぬ。

エントツは「こ」は海だ、大海原だ、君はボートを漕いでいる、という。八郎がボートを漕ぐ真似を始めると、あっ、ボートが転覆した、とエントツはいった。君は泳ぐ、抜手を切って泳ぐ。

今度は平泳ぎだ。背泳ぎだ。あつ、大波がきた。君は溺れる……エントツは八郎がかかったフリをしているのか、本当にかかったのか、考えないらしい。のりによって次々と忙しく状況を変化させる。君は溺れ死んでしまったよ。魂が天へ上って行って、君は蝶々になった。ひらひら飛んでいる揚羽だ……。

八郎は笑いに包まれている。八郎の手ぶり身ぶりについて、次から次から笑いが湧いてくる。見渡す限り菜の花島だ。君は花から花へと飛び廻る。菜の花に止って蜜を吸う……。八郎はエントツの長いズボンの裾にしゃがんだ。膝のあたりを掴んでブルブルと痙攣してみせながら、次に何をするかを考える。君はもう蝶々じゃないよ。君は蛇になった……。八郎は身体をくねらせながら腕を伸ばし、エントツの股間のをグイと掴んだ。笑いが弾けた。教室が割れそうに揺れる。その爆笑が八郎を陶醉させる。

暑くなったので体操をさぼって八郎は、二宮のカップと右京ヶ原のポンド池で泳いだ。翌日は女子大下で泳いだ。その翌日は関口の大滝で泳いだ。八郎は小学生の時の厩橋うまやばしの水連場で小堀流泳法を教わっている。自己流の泳ぎしか出来ないカップはそれで八郎を尊敬している。講談本の知識で、「甲賀流水遁の術」というのをでたらめにやってみせるとカップはひどく感心した。

二人ともサルマタが濡れて学校へ行けないので、素裸で泳いでいる。

「おい、潜水艦だぞ、見る」

背泳の形で水に沈み、水面につき出した一物を見せてやって以来、カップは八郎に一目置いている。

学校の帰り、八郎はよく相良のモッチンの家へ寄る。モッチンは大隈伯爵の親類の中の、一番ダメな親類のハシクシなので、大隈伯の屋敷の中に住んでいる。広い庭園に温室があって、そこ

に入るとムツとして怪しい臭いが淀んでいた。こいつはデンドロビームっていうんだ、こっちはポインセチアだ、とモッチンは聞いたこともない、見たこともなかった花を見せてくれた。花だけじゃない。絵もを見せてくれた。その絵は春画。枕絵、笑い絵ともいう。(八郎は大言海でそれを引いた)

春画の殿さまは英語教師のヒゲ杓子に似ている。殿さまの下敷きになっている腰元は眉をひそめて苦しそうだ。二人の頭の上に書いてある台詞を読もうとして、モッチンと二人で苦労した。台詞はくずし字でとても小さく、しかも古いものなので文字が薄れている。

「アレエ〜〜」

だけ読めたが後はダメだった。モッチンが虫メガネを持ってきたが、それでもダメだった。モッチンは汗びっしょりになって、

「ヒゲ杓子の奴もサイとこんなことしてんのか」

といった。ヒゲ杓子は女房のことを「妻さい」という。

八郎とモッチンは春画を見てでかくなったヤツを見せっこした。

「八郎のはすげえなア。でっけえなア」

モッチンはしげしげと眺めてはほとほと感心する。だが絵の中のモノのでかさにはかなわない。

八郎とモッチンはデンドロビームの花を目がけて飛ばしっこをした。モッチンの鼻の頭から、汗がポタポタとアレの上にしたたっていた。

福士幸次郎が洽六の家に寄寓するようになったのは、明治四十一年、洽六が音羽九丁目のドブ川の傍の棟割長屋から、茗荷谷に移ろうとしていた頃のことだった。

それは洽六が高須賀淳平の口車に乗って久慈海岸の石炭採掘事業に失敗した後、貧乏のどん底を十句三十銭で俳句の添削指導の通信教授をして凌いでいた時代から、二年余り経った春である。

その二年余りの間に洽六は「俠艶録」と題する新派の脚本を書いて成功し、劇作家として脚光を浴びていた。当時彼は読売新聞の演芸欄に演劇記者として劇評を書いていたが、そのうち、この程度のものならオレでも書ける、と一晩で「俠艶録」を書いた。それは女優と名家の息子の悲恋を柱にひそかにその女優を想っているあんまの切ない恋心を描いたものである。それが新派で上演されると忽ち人氣が沸騰し、余勢を駆って小説を書く、それも評価されて自然主義文学の担い手の一人と見なされるようになっていた。長い年月、捌け口を見つけかねて鬱勃としていたエネルギーがやっと場所を得てどっと噴出してきたという趣だった。彼はまさに得意の絶頂であった。暑くなると禪ひとつで暮していた（着物は質屋の蔵に入ったままなので）棟割長屋の住人が、鼻下に髭を蓄え、ぞろりとお召しの上下を着流すようになっていたのである。洽六が夏御召に紹縮緬の羽織りを着て、白足袋を履いて人力俵でやって来たのを見て、夏目漱石は彼一流の皮肉な調子でいった。

「俺も一生に一度ぐらい、出来ればああいうことをしてみたいものだ」

治六三十五歳、幸次郎二十歳。共に弘前の出身である。幸次郎は弘前の中学を(教師と衝突して)退学し、上京すると暁星フランス語専修学校でフランス語を学び、短歌を作ることから早稲田大学の学生だった秋田雨雀と知り合った。治六家に出入していた雨雀は治六が創作活動のための助手を捜していることを知って幸次郎を紹介したのである。

幸次郎はフランス語を学んだことから、治六のためにフランスの小説を読み、その梗概を翻訳して創作の手助けをした。短歌と俳句もたしなんでいたので、治六が選者を引き受けていた新聞の投稿句の下選りも出来た。口述筆記もした。極めて真面目で純朴な青年だったから、治六に気に入られて芝居の本読みや稽古場にも連れて行かれた。治六は彼を他の書生や居候とは区別して、彼を呼ぶ時は必ず「福士君」と君をつけて呼んだ。

郷里の後輩だということばかりでなく、治六は幸次郎が好きだった。幸次郎の純真さや生真面目さや、そのための不器用さは治六にはないものだった。幸次郎は屢々常識では考えられないような失敗を招いたが、治六は怒りながらもその失敗を愛したのである。

しかし約一年が経った時、突然幸次郎は治六に置手紙を残して姿を消した。

「人生に生きるべき意義を失い、一切に絶望し、一切を虚無と見流し、詩作も無意味と感じた」後年、幸次郎はそう記述している。彼は茗荷谷の暮しの中で、ある日「自由詩社」のパンフレットを読んで詩に興味を抱き、その時から俳句も短歌も捨てて詩作を始めていたのだが詩作にも絶望して彼は治六の家を去り、放浪の旅に出た。後に彼はそのことを「自然主義文学の影響を受けたことによる魂の彷徨だった」と書いている。

だが、幸次郎の絶望の中には、ただならぬ治六一家の暮しぶりへの失望があったにちがいない。

幸次郎は十三歳で父親と死別したが、貧しい中にも兄の民蔵と母はるの素朴で濃やかな情愛に包

まれ、人の裏面や悪意やあからさまな感情の露出を知らずに育った。彼は優しく、美しいものを愛する感じ易い魂の持主だった。その彼がこの家で見えたものは、かつて見たことも聞いたこともなかった醜怪さだった。陽気さと下品。赤裸な笑いと泣き喚く声。怒鳴り声。人として口に出すのを憚らねばならぬようなことが大声でしゃべり散らされ、平気で傷つけたり傷つけられたり、我儘は許容され、抑制は無視される。あえて美点を挙げるとしたら、見栄をはずすありのままに正直に生きているということくらいだった。

幸次郎は性欲の衝動にも原罪を思っ苦むような青年だった。ある夜彼は欲望に負けて町をさまよひ、遊郭へ入るか入るまいかに悩んだ挙句に、明け方近くなって友人の加藤武雄の家の前まで来た。門を叩こうとして夜更であることを思い。とりあえず塀に上ってそこに跨った。跨ったまま更に悩み、考えた。考えているうちに巡査の靴音が聞えてきて泥棒と間違えられそうになったので、ついに加藤の名を呼んだ。

「加藤くん、加藤くん、すまないが起きてくれないか……」

加藤が玄関を開けると、塀の上に幸次郎がいた。そんなところで何をしているのかというと、彼はいった。

「内側へ下りるべきか、外側へ下りるべきか。大いに懊惱おつらしているところだ。どうか加藤君、どちらにするべきか教えてくれ給え」

幸次郎は逸話の多い男である。その大方は彼の生真面目さが惹き起す現実とのズレがもとであった。彼は冗談がわからなかったし、わかっても嫌いだだった。

彼は絶えず考えに耽っていたので、そのため風呂を焚くと、風呂の湯が沸騰してもまだ焚いていた。庭に穴を掘ると、穴の中にその長身が隠れてしまってもまだ掘っていた。浴衣を除いて、

この家の者たちには、彼はただの愚か者としか見えなかった。彼らの軽蔑に幸次郎がどう対処すればいいのかわからない。

郷土の輝かしい先輩として、漠然とだが抱いていた治六への敬意が、目を追って崩れていくのを彼はどうすることも出来なかった。治六の生き方に対する懷疑が頭を擡げてきた。そんな自分を反省し、信頼を失っていく自分を責めたが、答は何も出てこない。信じるものも、仰ぐべきものもなくなった。希望はどこにもなかった。

いったい人間が生きることの意味は何なのか、どう生きるのがよいのか。なぜ美しく生きられないのか。彼が考えつづけているそのことは、佐藤家の誰にも（治六にも）わからなかったのである。

それは穏やかに晴れた日のつづく十二月だった。幸次郎は庭隅に花壇の堆肥を作るための穴を掘っていたが、ふと顔を上げると穴の外にシャベルを投げ出した。自分が何をしようとしているのかもよく考えず、彼は穴から出て歩きはじめた。作業用の汚れたズボンに手拭いで頬かぶりをし、ゴム長靴を履いたまま、門を出て行った。あてがあるわけではなかったが、彼の足は真直に歩き出していた。床屋の角を曲り、俵屋を左に折れて、風のない暖かな昼下りの光の中、彼は服部坂を下って行った。

そのまま甲府まで歩き、甲府から長野県に入って伊那から飯田に出た。そこから木曾山脈を横断して中仙道を名古屋へ下った。名古屋の波止場で築港作業をしている労務者の群と行き合い、その仲間に入って働いた。しかし間もなく彼は脚気を患って重症となり、夏の終り、垢にまみれ、よれよれの単衣を着た格好で神田末広町の兄民蔵の家に辿りついたのだった。

梨の花が真っ白に咲いたのに、

今日もまた降る雪まじりの雨。

濁り水は早口に鍛冶屋の桶へをどり込み、

まつ裸な柳は手放しで青い若葉をぬらしてゐる。

ここの息子のポカンさん、

とんてんかんと泣く相槌に、

苺の初生はつせいが食べたいと、

金礎台かなしきだいをたたくとき、

手をあつあつとほてらして叩くとき。

ああ、夢ならばさめておくれ、

ポカンさん、

この世のなかに多いものは、

秘蔵息子のやもめ暮らし。

時計の針のさきのやうに、

気の狂みれやすい生娘暮らし。

この年月の暑寒なつやむいの往来に、

わたしの胸は潤ほしんだ花の皺ばかり、

わたしの胸はとりとまりない時候はづれな食気ばかり。

民蔵の家で幸次郎は、もの悲しい虚無的な気持でポカンさんに自分を重ね合せた。放浪の果に得たものはなかった。自分の無力をつくづく知ただけだった。何を目ざしてどう生きればいいのかわからなかった。考えの果てはいつも自分はなんて愚鈍な人間なのだろうという思いに巡りつく。

ああ私はど「へゆく」

ただ一人打萎れて歩むプラットフォオム。

鎖した嘆きは何時までもほどけず、

ただ一人萎れて歩むプラットフォオム。

その頃、治六は何の懷疑も悩みも持たず、慕進する急行列車のように元気よく、毎日のようにやってくる来客の対応をし、得意の絶頂の高笑いを広い家の中に響かせていた。

演劇界では在来の芝居に対抗して坪内島村逍遙しやうと島村抱月が「文芸協会」を作り、その第一回公演に「ハムレット」が上演された頃である。治六は客を相手に松井須磨子のオフィリヤを嘲笑し、小山内薫の「自由劇場」の「ホルクマン」の台詞の生硬さを罵倒し、歌舞伎の大時代な型の芝居を嘆き、新派調の家庭悲劇の単純さを馬鹿にした。寄るとさわると理想の演劇とは何かという議論が戦わされた。演劇の理想を実現しようとして雨後の筍のように小さな劇団が生れては潰れていく時代である。

「歌舞伎も新劇も新派も、人間というものを忘れているよ。人間がいるからドラマが生れるんだ。しかし今の芝居はどれもドラマがあつてそこに人間が嵌め込まれているんじゃないか。悲劇がやつてきて人間が動かされるんじゃないんだよ。人間が悲劇を呼ぶのさ。作るのさ。すべて人間、この不可解なものがもとなんだ。それを忘れちゃあいけない」

しかし治六のその理想は、二年と経たぬうちに「客を呼ぶため」に善玉悪玉が作り出す型に嵌つた悲劇に落ちてしまったのである。

幸次郎が再び治六の前に現れた時、彼は「発生」という詩を書いていた。幸次郎は二十四歳、明治は去って大正が来た年の秋である。

「発生」

女よ、爾なんじの罪は赦されたり。

——馬太伝——
マタイ

僕は別な空気をすふ、
別な力を感じる。
僕自身はもう草だ、
新しい発生だ。
突きあたりつきあたり、
そして突き破り、突き破り、

吾等の行く先の魂をつかみたい。

途轍もない世界の果てに、

真実な産声を上げて、

底力ある目玉をでんぐりかへしたい。

苦しんだ末に彼は、人道主義の中に救いを見つけた。彼を蔽っていた虚無の殻は少しずつ破れ、一筋の光明が射し込んできて、今まで知らなかった世界への道が見えてきた。

「実にふしぎでした。今まで見えなかったものが見えてきた。生きているということは素晴らしいことだということに、はっと気がついたんです。これを私は奇蹟だと思います。微妙な、しかし強い力がこの富士の中に隠れていたことを知りました。それから、人は誰もみな、その力を持っているということも思いました。美しいものも醜いものも、これからはそっくりそのまま受け容れられると思います。容認するということは、これは当たり前という愛ですが、私は力だと思いません。かつての富士は力が足りませんでした……」

治六は幸次郎の虚無の正体がわからなかったから、俄かに饒舌にわになった幸次郎に気圧けおされた。

幸次郎は前とは違う幸次郎、明るく強い確信を持った男になって再び治六のもとに来たのである。幸次郎が戦っていた懊惱が何であったかを理解しないままに、治六はとにかく幸次郎の血色のいい頬、元気な高い声が喜ばしかった。再び幸次郎が彼のもとに来るようになったことが嬉しかった。

「私は太陽の子である」

私は太陽の子である、

未だ燃えるだけ燃えたことのない太陽の子である。

今口火をつけられてゐる、

そろそろ燻^{くす}ぶりかけてゐる。

ああこの煙^{けむり}りが焰^ほになる、

私はまつびるまのあかるい幻想にせめられて止まないのだ。

明るい白光^{ちやうめい}の原^{はら}っぱである、

ひかり充ちた都会のまんなかである、

嶺^{たかね}にはづかしそくに純白な雪が輝く山脈である。

私はこの幻想にせめられて

今燻^{くす}ぶりつつあるのだ、

黒いむせぼつたい重い煙りを吐きつつあるのだ。

あああひかりある世界よ、

ひかりある世界中、

ああひかりある人間よ、

総身眼のごとき人よ、

総身象牙彫のごとき人よ、

伶俐リコウで健康で力あふるる人よ。

私は暗い水ぼつたいじめじめした所から産声をあげたけれども

私は太陽の子である、

燃える事を懂れてやまない太陽の子である。

幸次郎の自作の朗誦は治六には退屈だった。その詩も感激が先立って、洗練がない。

「なんだい、面白くないな」

治六はつけつけといった。しかし幸次郎にとってそれは彷徨の末に漸く掴んだ歓喜だったから、

彼は治六に向ってただ愉快そうに高笑いしただけだった。

二学期から席順が変った。

八郎の席は前から三列目になった。

成績順に、ビリから前の方に坐ることになったのだ。

モッチンは二列目で、カップと並んでいる。最前列のトップは長期欠席の有馬だから、いつも

空席だ。

「オレ、ビリケツから数えた方が早いくらいだよ」

八郎はいった。

「そんなこと自慢にならないわ」

と喜美子姉さんがいった。

「野球のやりすぎだよ」

伯母さんがいった。

「二学期は野球を少し控えれば成績なんかすぐ上るよ。ハッチャンは頭がいいんだから」

母さんは何もいわない。

「よう、母さん……オレ、前から三列目になっちゃったんだ……」

「そうかえ」

母さんはそういっただけだ。

「いいのかよう、母さん……オレの成績、ビリの方なんだぞ」

「困ったねえ」

母さんは顛顛こめかみに梅干を貼りながら気のない声でいった。

「勉強おし」

チャカが聞きつけて、わざわざ訊きに来た。

「兄ちゃん、学校の成績、ビリになったのかい」

「はいはい」

と、いって頭を殴ってやった。

「ビリじゃないやい……」

小学校の時は一年から六年まで、ずーっと一番だった。一番なのに級長にならなかったのは操行だけ丙だったからだ。だが父さんは、

「操行丙か。あつはつはつはア……」

と笑っただけだった。

席順が前から三列目になったことを、早く父さんにいたかった。父さんがあつはつはつはアと笑えばこの病氣は霽れるのだ。

父さんはどこへ行ってるんだ。いつになったら帰るんだ。誰も何もいわない。訊いてはいけな
いといわれているわけじゃないが、訊くのがイヤだ。

「おい、父さんはちつとも帰ってこないなあ……どこへ行ってるんだろっ?」

それとなくチャカにいつてみた。そうすればチャカが伯母さんか母さんに訊き出すかと思った
のだ。だけどチャカは、

「いねえ方が叱られないからいいよ」

といった。

やっと父さんが帰ってきた。

「久しぶりだね、父さん」

と八郎はいった。どこへ行ってたの、とは訊かない。前なら何とも思わずに訊けたことが訊け
なくなっている。

「どうだい、学校は?」

父さんは機嫌よくいった。

「面白い友達がいるかね？」

勉強しているか、勉強しろよ、と父さんがいったことは一度もない。(モッチンの親父はお早うといっても、ただいまといっても、おやすみといっても、いつも)「勉強しろよ」しかいわいというが)

「父さん、ぼく、席順、前から三列目だよ」

「そうか、丁度いい場所だな。先生に近すぎもせず遠すぎもしないのがいい」

「あのね、一学期の成績の悪い奴から順番に前に坐るんだよ。モッチンはぼくの前だ。前から二列目」

「アッハッハッハア」

と父さんは天井に向かって高笑いを吹き上げる。

「モッチンが二列目か。最前列は誰だい」

「身体が弱くて長期欠席の奴」

アッハッハッハアと父さんは嬉しそうだ。なぜこんなことを面白がるのかわからないが、胸に詰っていたものがスーツと溶けて消えた。父さんは「炭酸胸スカシ」みたいだ。

「野球はどうだ、やってるかい？」

「うん。グラウンドは穴八幡の下の広っぱなんだよ。藪の中の小川が流れてるもんだからね、ボールが飛んだら一年生が網で掬うの。だからオレたち、いつも虫取網を持ってるんだ。面白くないよ。ちゃんとした野球をやりたいよ」

アッハッハッハアと父さんは天井を向き、

「何」とも修行だ。今度からは網で空中受け止めの術を体得することだな」

父さんがいると家の中は灯が点ったようになる。車に心棒が入って動き出す。

「お父さん、ハッチャンは床屋のセッターをつかまえて、バリカンで毛を刈っちゃったのよ」

喜美子姉さんが告げ口をしたら、父さんはいった。

「あのセッターの毛がなくなると、床屋のかみさんに似てやしないかい？」

父さんが帰ってきててもむっつりしていた母さんが、ほんのポツチリ笑った。

だが父さんはまたいなくなってしまった。夜遅く八郎が眠ってから帰ってきて、朝、八郎が学校へ行く時はまだ寝ていることがよくあったから、もしかしたら二階にいるのかもしれないとこっそり見に行ったが、父さんの書きもの机の上には原稿用紙も万年筆もなかった。インキ壺と文鎮があるだけだった。

父さんがいないので、家の中はだらけてゼンマイの切れた時計みたいになった。山奥の沼の底みたいになった。

喜美ちゃんは結核じゃないのかね、と加藤のコンチャンとはなやがいつていた。八郎は廁にしゃがんでその話を聞いた。廁の外でコンチャンが薪を割り、はなやが庇の下にそれを積み上げている。

「加藤さん、わたし、この頃考えてるんだけど、この家ってよくないのよね。奥さんはあんなふうだし、先生もあんなになっちゃってるし、喜美子さんまで結核だとしたら」

「うん、子供たちもみな、普通じゃないしね」

「知ってる？ 加藤さん。この家、前から近所で幽霊屋敷っていわれてたんだって」

「知ってるよ。なんでも浅草の方で人殺しのあったそば屋の、その建物をそっくりここへ移したっていうんだろ？」

「女中がお客に出刃でやられたんだって？ 柱に血が染み込んでいるのを洗って使ってるんだってね。いやだわねえ。考えてみるとろくなことないんだもの……。先生は知ってるのかしら？」

「知ってるさ。これだけの家で家賃が三十五円なんて、べらぼうに安いだろう。幽霊屋敷だから安いんだって、先生は自慢してたもの」

八郎は忽々に厠を出て、はなやのところへ行った。

「はなや、この家、幽霊屋敷だってほんとかい？」

「あら、聞いてたんですか。どこで？」

「ねえ、ホントなの？」

「ホントなら怖いかい？」

コンチャンがいったので、

「怖くないやい」

といった。

「ホントならいっぺん会ってみたいと思ってる」

「そうか。じゃあ暗くなったら便所へ行って窓の外を見てごらん。月がある夜なら立ってるよ。八つ手の後ろでじーっと窓の方を見るから」

「ウソだい！」

「ウソなもんか。ウソだと思っなら今度見てごらん、窓を開けておくから」

「ウソだい……ウソだい……欺たまそうたってそっはいかねえよ……」

いい捨てて家の中に入った。急に家の中が広く、薄暗くなったような気がした。

「チャカ……チャカ……」

大声で呼んだ。

「チャカ……どこだ、チャカったらア……」

母さんの部屋を覗いた。

「母さん、チャカは？」

「知らないけど……」

か細い声だった。脇息に凭れて庭の方を向いたまま、少し横顔を見せている。ぱさはさに髪は乱れて、くびれた単衣物に細帯を巻きつけた後ろ姿はゾツとするほど痩せている。もしかしたら、この母さんは幽霊じゃないのか？ 母さんは死んで幽霊が母さんになっている。だから父さんはあの女のところへ行って帰ってこないんじゃないのか？

八郎は部屋を走り出た。必死でチャカを捜した。味方はチャカしかいない。いつになく家の中が静かなのが不気味だった。階段の下へ行行って、

「父さんー！」

と呼んだ。父さんはいないのだから返事をするわけがない。だが八郎は声を限りに、

「父さん……父さん」

と呼んだ。寂しくて怖くてじっとしていられなくなった。

「チャカ！ チャカ！ どこにいるんだ。出てこいよ、チャカ！」

気が狂ったように呼んだ。

「何だい、兄ちゃん」

いきなり後ろで声が出た。チャカが顔ほどもある煎餅を持って立っていた。顎に疥はたけの出来ている褐色の平べったい顔が、暢気そうに「何だい？」というのを聞くと、ほっとして、

「お前……」

といい、それからなぜチャカを呼んだのかわからなくなってしまった。

「その煎餅、どうしたんだ」

「もらったんだよ。川西さんのおばさんに。毛糸巻くの手伝ったらお礼にくれたんだ」

チャカは煎餅を後ろへ隠した。

「やらないよ」

「いらねえや、そんなもの……」

煎餅どころではない。

「チャカ、知ってるかい。ここの家、幽霊屋敷なんだぞ。知らねえだろ」

「ウソだい」

「ウソじゃない。この家はな、もと浅草の方のそば屋だったんだ。人殺しがあって柱に血が染み込んでるのを、そのまま持ってきて使ってるんだ」

「どの柱だいっ」

「そんなことわかりやしないよ。とにかく幽霊が出るらしいんだ」

「誰が見たの??」

チャカは煎餅をしげしげと眺め、どこから食べようかと迷っている。

「お前、怖くないのかい」

「だっていっぺんも見たことないんだもん」

「月夜の晩、便所の窓の外をみたことあるかい？」

「ないよ、いつも閉ってるもん」

「開けてみる、立ってるんだ。八つ手の向うに」

「ほんとかい？」

チャカは目を瞠って八郎を見つめたまま煎餅を齧っている。

「よし、須藤に教えてやろう……」

そついうとあつという間に走って行ってしまった。

昼間なのに庭は小暗い。小暗いのは夏の間植木屋の手が入らなかった楠や山桃や梅や鼠モチが
繁り放題に繁っているからだ。へちま棚のへちまの葉が黄色く枯れて、汚らしく重なり合ってい
る中からだらりと実が下っている。

何ともいえない寂しさが、じわじわと締めつけてきた。呼吸が苦しい。見えない壁がとり囲ん
でいる。いても立つてもいられない。どうしたらいいのかわからない。わっと泣けばらくになる
のだろうが、涙も出ない。

「父さんの、バカヤロウ……」

いおうとしたが、声が出なかった。

幸次郎は奥座敷の縁側寄りに、長い胴を二つに折り曲げ、膝に肘を突いた両手で頭を抱え込ん
でいた。それは幸次郎が懊悩している時の、いつか癖になった格好である。

治六は九人目の赤ん坊を産んだハルの枕許に、腕組みをしたまま動かない、彼は信州から帰っ

たばかりだった。シナのために作った日本座と一緒に彼は信州の巡業に出ていた。その留守中に、ハルは出産したのである。

幸次郎の懇願で治六はそこに坐っていた。シナと離れてここにいることがどんなに苦痛であるかを幸次郎は知っている。しかし幸次郎はそれを承知で治六に懇願した。ハルの額は怖ろしいまでに抜け上がり、眉は薄くなり、その下に落ち窪んだ眼が、乾いた貝のように頑なに閉じている。そのハルには治六の優しい情なごみいがどうしても必要なのである。

「どうか……先生……。奥さんになにか……」

口もとまで出かかっている言葉を幸次郎は忖しのえた。一言でいい、ハルに情なごみいの言葉をかけてほしいと思うが、黙然と腕を組んだまま身じろぎもしない治六を見ると、その余計な自分の一言が事態を悪化させるかもしれないという不安が湧いていい兼ねる。

——先生、我慢して下さい。どうか、我慢して下さい……。

胸の中で祈るようにそっくり返すばかりである。

「何か食べたいものはないかい？ 食べたくなくてもなるべく努力して食べた方がいいよ」

幸次郎の願いが通じたのか、とってつけたようではあるが、ふと治六がいった。幸次郎はほっとして顔を上げ、有難うございます、先生、と礼をいいたい気持ちでいっぱいになる。先生が折角せつかくそういつてくれたのだから、ハルの方も眼を開けて何かしら答えてくれればいいが、と願うがハルは微動だにしない。

言葉には出さないが治六の中にはハルへの同情かじやくと呵責かじやくが渦巻いている。それを幸次郎は知っている。それと同時に治六が今、渾身の力で抑えているシナへの恋情もわかっている。

——おハルはオシの我儘勝手を辛抱して、結婚以来九人の子供を産んだんだ。ぼくはおハルを

可哀そうだと思うよ。欠点はあっても、悪いのはぼくの方だよ。しかしいくらそのことを思っても、すまないと思っただけで愛することは出来ないんだよ、福士君。わかるかね。同情と愛とは別ものなんだよ。

治六は仙台の河北新報に主筆として勤めていた時、社主の一力健治郎から妻の妹を貰わないかといわれて、よく考えもせずに承知した。治六が二十三歳でハルが十九歳の時である。ハルはあの男のところへ嫁げといわれたから嫁いだ。治六は貰えといわれて貰った。二人とも結婚について、その程度の考えしか持っていなかった。愛情なんてものは一緒に生活すれば自然に生れ育つものだと思っていた。

だがいつまで経っても、愛情は醸成されなかった。才気煥発の治六にはハルはあまりに愚鈍だった。お嬢さん育ちとはいうものの家事能力があまりにもなさすぎた。経済観念はゼロで、金があれば黙って使い、なくなると途方に暮れて治六に訴えるだけだった。夫婦の間に会話はなく、あるのは性交渉だけになった。性交渉はハルの孤独をなだめた。それによってハルは治六と繋り、僅かに心のやすらぎを得ていたのだ。

治六は幸次郎に述懐した。

「どんなに貧乏していてもうちには女中が必要だった。おハルが何もできない女だからだよ。客が来ても人前には出られない。お茶も出せない。掃除も満足に出来ない。女中がいなければ子供だって育てられないんだから」

四人の女の子が幼児のうちに死亡したのは、おハルのせいだと治六は思い決めている。八郎が三つの時、煮え立った味噌汁の鍋の鉸（こ）に足を引っかけて腰から下を大火傷した。腰から尻にかけての肉が落ち、治るまでに一年半もかかった。それもおハルの落度だと治六は思い決めている。

「しかし先生。奥さまはそんな方かもしれませんが、その代り先生は自由奔放にしたいことをしてこられたじゃありませんか。奥さまは誰にも出来ない辛抱をしてこられました」

「そつだ、確かにぼくはおハルに辛抱させてきたよ。だがぼくの方もおハルに辛抱した、お互いに無意味な辛抱だった。いくら辛抱しても何も生れてこなかったんだ。この辛抱はどちらかが死ぬまでつづく辛抱なんだよ、君……」

治六はいった。

「誰かおハルを引き受けて幸せにしてくれる男はいないものだろうか。もしいたら、その男に頭を下げて頼みたい。そのためにぼくに出来ることがあれば何でもする。ぼくは今、心からそつ思うよ……」

幸次郎は言葉を失い、「先生、そんな」といったきり後がつづかない。

「ぼくに出来るものならおハルの苦しみを取り除いてやりたい。心からそつ思うよ。君たちにはどう見えているか知らんが、ぼくは心からおハルの幸せを願ってるんだ」

「それならば先生」

「しかしそつしてやりたいが、出来ないんだ……。ぼくには不可能なんだよ……」

治六は頭を抱え、絞りだすような声でいった。

「——君はぼくのこの気持を勝手な分だと思っかね？」

「思いません……わかります……福士にはわかります」

「いってくれ。ぼくは大悪人かね？」

「先生は大悪人じゃありません。先生は……正直なだけです……」

頭を垂れている幸次郎の耳に治六の歎歎きよきが聞えた。

ハルの枕許にくくりつけられたように坐った治六の上に、八日の日が経った。

九日目、演出家の倉橋仙太郎が茗荷谷へ治六を訪ねてきた。倉橋はシナの聚楽館時代からの友人である。倉橋は治六に会うと、何もいわずに封筒をさし出した。シナからの手紙だった。手紙を読む治六の手がブルブル慄え出し、みるみる顔面に朱が注ぐ。その治六に倉橋はいった。

「三笠さんも苦しんでいるんです。本当に苦しんで痩せてしまっています。ぼくは呼ばれて相談を受けたんですが……それでぼくはいいました。あなたがそんなに苦しんで、考えて、そうして決心したことなら……それならば僕は賛成すると……それで三笠さんはその手紙を書いて……」

いきなり治六は立ち上った。

「俤だ！ 俤を呼んでくれ！」

と叫んだ。

「先生、まあ、坐って下さい。それではぼくがここへ来た意味がありません……」
思わず立ち上って阻止しようとする倉橋の手を治六は払った。

「何をしてるんだ、早く、俤だ。福士君、一緒に来てくれ……」

倉橋は声をふり絞った。

「駄目です、先生。西五軒町にはあの人はもういません！」

一瞬治六はふり返って倉橋を睨みすえた。

「いったい、あの女はこのオレを……」

絞り出すようにいって、駆けつけた幸次郎の腕の中に彼は卒倒した。

どこで見たのか知らない、

わたしは遠い旅でそれを見た。

寒ざらしの風が地をドツと吹いてゆく。

低い雲は野天を覆つてゐる。

その時火のつくやうな赤ん坊の泣き声が聞え、

さんばら髪の女が窓から顔を出した。

ああ眼を真赤に泣きはらしたその形相、

手にぶらさげたその赤児、

赤児は寒い風に吹きつけられて、

ひいひい泣く。

女は金切り声をふりあげて、ぴしやぴしや尻をひつ叩く。

死んでしまへとひつ叩く。

風に露かれて裸の赤児は、

身も世も消えよとよよと泣く。

雪降り真中に雪も降らない此の寒国の

見る眼も寒い朝景色、

暗い下界の地に添乳して、

氷の胸をはだけた天、

冬はおどろに荒れ狂ふ。

ああ野中の端の一軒家、

涙も凍るこの寒空に、

風は悲鳴をあげて行く棟のうへ、

ああこの残酷はどこから来る、

ああこの残酷はどこから来る、

またしてもがうと吹く風、

またしてもよよと泣く声。

苦しんでいるのは治六だけではなかった。幸次郎もまた苦しんでいた。幸次郎の目にうつるこの家の残酷は彼我の区別なく幸次郎の胸を抉るのである。人は治六を狂気の男だといった。彼が放つ毒の焰は、近づく人間を悉く焼き尽す。愛する者まで焼き尽す。そして治六もまた我と我が火焰に灼かれて苦悶しているのだった。

幸次郎はそんな治六が憐れでならず、嫉妬がますます夫を遠ざけることになるのに、それに身を委せるハルも憐だった。そして何も知らずに嵐の中に踏んばって、わるさをしている子供たちも可哀そうでならない。

誰が悪いと責めたところで、何の足しにもならないのだった。吹きすさぶ列風の中に、我を忘れて叫喚しているこの一家の者たち。その怖ろしい赤裸な姿、これが生きようとする力なのか？これが人間というものを凝縮した鏡なのか？

幸次郎は風の中の彼らを両腕に抱え込んで、何ものとも知れぬ力に向って一緒に祈りたかった。そうして佐藤家に群れたすべての人が去って行った後も、幸次郎はひとり治六のもとに踏み止まったのである。

赤ん坊の名前を久ひさという。ヒサシなんて面倒くさいからキユウにしよう、と八郎はいった。キユウはワタルが使っていたシヨンベン臭い布団に寝ている。ミョウミョウと子猫みたいに泣いている。それがだんだん狂ったヤギみたいになってくる。

「やかましいッ」

八郎が怒鳴るとチャカも、

「やかましいッ」

と怒鳴る。

いくら泣いたって誰も何もしてくれやしねえんだぞ。

キユウを見ていると踏んづけてやりたくなる。

「おい、チャカ、見ろ」

片っぽの足の裏を丸の顔の上に持ってきて、ぶらぶら動かした。

「踏んづけてやるっか?」

チャカは八郎の真似をしてキユウの胸の上に足を上げ、

「踏んづけてやるっか?」

と真似をする。

「踏んづけてやるうか？」

「踏んづけてやるうか？」

といい合った。

「お前、先にやれよ」

「兄ちゃん、やれよ」

八郎の汚い足の下で、キュウは眠っている。瞼の間からポツチリ涙がはみ出ている。

「いいか？ やるぞ」

「うん、やるう」

チャカは何を考えているのか八郎にはわからない。平気で「やるう」といつている。

「いいか？ いいか？ほんとにやるぞ？」

チャカはいった。

「一緒にやるう。イチチニのサンで」

こいつは本気なのか、本気のフリをしているのかよくわからない。チャカはバカだから、フリなんか出来ない。バカだから平気でホントにやる気だ。後に退けない。どうなるんだ。どうすればいいんだ。足の先が勝手にゆらゆら揺れはじめた。立っている方の膝が、急にガクツと折れ曲りそつだ。

「お前たち、なにしてるの！」

伯母さんの金切声が飛んできて、八郎は横に突き飛ばされた。転がりながら、ほっとしながら、

「なんでイ」といった。キュウがびっくりして泣き出した。

「冗談がホントになるってことがあるんだよ。ほんとにまあ、なんて子供たちだろう。今度こん

なことをすると、ただじゃおかないからね」

チャカが伯母さんに向かってへっぴり腰の尻をつき出し、ポンポンポンと三つ叩いて逃げている。
った。

ワタルは三つなのにまだろくに歩けない。

歩けないのはおでこが大きくて重いからだ。ワタルは福助だ。歩くとすぐ転ぶ。

「うーっ、ワタルー！」

とうとうと、下からじっと見上げて「うー」と唸るところは、酒屋の中風のじいさんにそっくりだ。いつも縁側に坐らされている。学校に行く前に坐っていた場所に、帰ってきてもまだ坐っている。通りすがりに頭を叩くと、

「エーン」

と泣く。面白いので何度もやった。チャカも真似をして叩く。ワタルは、

「エーン」

と泣く。エーンと泣くが、すぐ泣きやむ。

ワタルは年中、黒い上っぴりを着せられている。これは毛けしゅす繻子すといって、コウモリ傘を作る生地だ、とはなやがいていた。ワタルは洩はなみすや涎よだれを垂らすので、それを着せられているのだ。これなら丈夫でいいといって伯母さんは喜んで縫っていた。丸い襟はワタルの細い首まわりにきっちり喰い込んでいる。上っぴりの胸の前は食物の汁や涎や涙でいつもテカテカ光っている。袖口のところはゴムが入っているので、ワタルの細い手首にはゴムの跡が赤くついている。

ワタルはのろまな声で「オカダア」と呼んだ。岡田はワタルの子守役だ。いつもぼーっとしているの、

「岡田のボヤテキ」と呼ばれている。ボヤテキのくせにご飯だけは一人前以上食べる

んだから、もう……とはなやがいつていたが、八郎はボヤテキだから一人前以上食べるのさ、と
思っている。

ワタルが縁側で、

「オカダのボヤテキィ……」

と呼んだ。岡田の低い声が、

「岡田さんといいなさる」

と叱っていた。

ああ、イヤだ。何もかも。

この家は腐っていくリンゴみたいだな。ほっとけばどんどん腐っていく。

喜美子姉さんはいつも熱を出している。

母さんは朝が頭痛がしている。

「いったいお正月はどうする気なのかしら」

福士さんの顔を見るとそういっている。福士さんは黙って膝に両腕を突っばらせて目をかたく
閉じている。

「むえ、どうなるかしら、お正月は」

母さんはじじい。

「暮の支払いはじじいなるのっ」

うるせえ。福士さんにいったってしょうがないじゃないか。チャカに、

「正月、父さんはうちにいると強つかいっ」

とこいたら、

「知らねえ」

といいながら後ろ手に何か隠した。台所から小銭をくすねたことはわかっている。だがそれを取り上げる気が今日はしない。

「父さんはもう帰って来ないかもしれないんだぞ」

といったが、

「ふーん。どうしてだい？」

と行って向うへ行ってしまった。

つまらないのでワタルの黒い毛織子の上っぱりの、テカテカ光っている胸のところにサイダー瓶の王冠で勲章をつけてやった。

「どうだ、ワタル。勲章だぞ、いいだろう」

といったが、ワタルは怨めしそうな目でジーンと八郎を見ただけだ。

シナは今更のように、自分がどうあがいても脱けられない道に踏み入ってしまったことを知った。西五軒町の家を黒田民子と一緒に出て、とりあえず借りた借家を野呂瀬に見つけられたと思ったら、逃げる間もなく治六が現れた。ガラガラピシャンと格子戸が開いて治六のつり上って充血した目が射るように自分を見つめているのを見た時、作ったばかりの砂の城に浪が打ち寄せ、忽ち崩れて跡形もなくもとの砂浜に戻ってしまう時の、その砂になったような空しい虚脱感に襲われた

治六は何もいわずに懐から短刀を出して畳に置いた。短刀でシナを殺すというのではない。こ

れで自分が死ぬという威おどしだ。

それがいつもの治六の手だ。いつもの、とシナは思う。そう思いながらも、しかしこの男は我を忘れると本当に短刀で自分の心臓を突きかねない。その恐れが胸底むねかまに蟠わだかまっている。ただの脅し
が本気になる――。そこが治六の怖いところなのだ。

シナは再び治六の元に戻り、失意にうちのめされながら治六にかき抱かれた。

「芝居をやろう。太夫元を捜そう」

謔言うたげのようにシナの耳もとでくり返した。それが愛の口説の代りだった。「愛している」とい
う言葉はシナを居心地悪くさせるだけのことであることを、漸く治六は理解したのである。

十一月、日本座の大阪中座の公演が決った。目下大阪朝日新聞に連載中の「裾野」をまだ連載
中にもかかわらず脚色して上演する。それならば小説の結末を知りたい読者が集るだろうとい
うことで、漸く中座が乗ったのである。

大阪公演の次は九州の巡業が決った。シナの目は黒々と大きく瞳みはられ、久しぶりで輝いている。
西五軒町にしごけんまちの家に役者が集ってきて本読みが始まり、立稽古たてがまに入った。狭い家の中に活気みなぎが漲る。

活気はシナの幸福から発散されている。その幸福の余波を受けてみんなが情熱的で陽気な愛すべ
き人間になっている。

治六は安心し、落着いた。滅多に見られなかったシナの笑顔は治六に幸福を運んでくる。この
幸福を逃がさないためには、万難を排して日本座を持続させなければならぬと改めて決心する
のである。

シナの幸福を完成させるために治六はハルとの離婚を考えた。西下さいかの日が近づくにつれ、その
決心は固まっていた。東京を離れて旅に出る今こそ、ハルと別れるチャンスだった。

治六は幸次郎を呼んでその決心を打ち明けた。自分の口から切り出せばハルを逆上させるばかりだから、君に説得してもらいたいのだった。ハルは幸次郎を信頼している。野呂瀬とハルは仲がいいが、野呂瀬は気が弱いからこういう役は向かない。

幸次郎は黙って俯いて治六のことを聞いていた。治六が話し終ってもいつまでも苦しうに黙っている。返事を促されて漸くいった。

「子供さん達はどうなるんですか……」

治六がたじろぐのを感じて、幸次郎は俄かに雄弁になった。

「喜美子さんは胸を病み、久ちゃんは生れたばかりです。奥さまは病弱、その上はなやさんは今年いっぱい暇を取りたい気持のようです。それだけじゃありません。先生がここで離婚なされば、世間から人格を問われることになりましょう。これから先のお仕事にも差支えが生じます。先生、いけません。それだけはいけません。考えれば考えるほど怖ろしいことです。してはならないことです」

幸次郎は畳に両手を突いた。

「福士、一生のお願いです。どうか先生、お辛いでしょうが思い止まって下さい……」

幸次郎はいった。

「福士は先生にこれ以上、苦しんでほしくないんです……」

腕組みをしたまま凝然と聞いていた治六は、幸次郎の言葉が終ると、一言いった。

「ぼくはともかく、大阪へ行くよ」

暫く沈黙した後で治六はいった。

「大阪の後は九州だ。その後、正月は名古屋の末広座が入っている。いずれにしても当分ぼくは

帰らない。それを君からおハルに伝えてくれ給え」

相談ではない。これは結論だというように幸次郎を凝視した。

「それはお伝えしましょう。しかし、あくまで、当分お帰りになれないということだけを申しませう。離婚の件はもう一度、旅先で十分お考えになって下さい」

そうはいったがもう絶対に治六の決心は翻ひるがえらないことを幸次郎は知っていた。

父さんの向う側をチャカが歩いていった。

八郎はこっち側にいた。

三人で月を見ながら、服部坂を降りていった。

服部坂の真正面に月が懸っていた。半弦の月というやつだ。そこにうつすり、一筋の黒い雲が流れている。小日向の町は家並が光ったり、翳ったり、水底に沈んだ町みたいに見えたりする。

「八郎は大きくなったら何になるんだい？」

と父さんがいった。

「ぼくはえらい人になるよ」

「えらい人って何だ。陸軍大臣か」

「そんなんじゃないやい。父さんみたいになりたい」

「父さんみたいか……。父さんはえらいかい？」

「だって威張ってるもの。父さんは負けたことがないだらう？」

父さんは笑った。

「節はどつだ」

「ぼくはカネモチになりたい」

「どんなカネモチだ。カネモチにもいろいろあるぞ」

「働かなくてもいいカネモチだ。庭にオモチヤや菓子が生る木とか金が生る木を持てればいいな」

「金が生る木は勉強して、働いて、植えるもんだろ。はじめっからそんなものがあるのは面白くない」

「面白いよっ」

「面白くないんだ」

「面白いよ。面白いよなあ、兄ちゃん」

チャカは浮き浮きしている。楽しいなあ、と八郎は思う。父さんと手をつなぐのは久しぶりだ。話をするのも久しぶりだ。父さんの手のひらは女みたいに柔らかい。掌丘というところが父さんみたいに桃色に盛り上っているのは、えらくなる手相なんだよ、とずっと以前、母さんがいつかいたことを思い出した。

「八郎は頭がいい。節は丈夫で勇気がある。父さんはお前たちがおとなになるのが楽しみだよ。二人ともどんな人間になっていくんだろうなあ。父さんの子供だから、きっと何か大きなことをするよ」

「父さん、わかるの？」

「わかるさ。父さんには何だっかわかるのよ」

父さんとこうして真面目な話をしながら歩くのははじめてのような気がした。わくわくするよ

うな幸福感が八郎の胸いっぱい膨らんでいる。

「八郎はカツとなると自分を抑えられなくなるだろう？ 父さんも子供の時からそうだったからよくわかるんだよ。それをこれから修行することだ。父さんも一所懸命修行したが、なかなかむつかしい。八郎は懶口だから、それさえ修行すれば立派な人になれるよ」

「わかった。修行するよ」

父さんのしみじみした口調が嬉しかった。

「節は努力だ。節は勇敢だからその上に努力が加われば百人力だ。通信簿が悪いのは、努力が足りないんだよ。努力さえすれば節も立派な男になる。まず朝、眠くても起きる努力だ。いやでも宿題をする努力だ。そこから始めていけば、努力することがだんだん楽しくなっていくよ」

チャカはきつぱりした大きな声でいった。

「うん、ぼく、努力するよ」

「そうか」

父さんも嬉しそうだった。それから父さんはいった。

「父さんは明日から大阪へ行く。暫くの間、家へ帰れないんだよ。だが父さんはどこにいても前たちのことを心の目で見ているからね。二人で力を合せて弥や丸を守っておくれ。喜美子も母さんも身体が弱いから気をつけてやっておくれ。喧嘩はしてもいいが、芯のところでは仲のいい兄妹でいてくれ」

父さんはいった。

「いいかい？ わかったかい？」

父さんはいった。

「父さんはお前たちふたりを信頼しているよ」

わかった、という印に八郎は強く父さんの手を握った。

八郎は父さんが帰ってきたら一番に訊こうと思っていたことを思い出した。

「父さん、ぼくらの家、幽霊屋敷だってほんとう？」

父さんはこともなげにいった。

「ああ、そういう噂があるようだな」

「幽霊出たことあるの？」

「誰も見た者はいやしないさ。出たところでどうせ、そば屋の幽霊だ。おかめかきつねだろう」

父さんのこんなところが好きだ。こんなふうにいわれると、怖いものは何もなくなる。

「おかめの幽霊って見てみてえな」

と試みてみた。

父さんは立ち止った。

服部坂を降りきってしまつと、月は新しい雲の流れの中に隠れてしまった。父さんは立ち止った。

「さあ、もういい、ここからお帰り」

握っていた手を放していった。

「さあお行き。ここで見ているからね」

父さんは八郎の頭に手を置いた。

「八郎、頼むよ。お前は長男だからね」

海の底から熱い勇気が沸き上ってくるのを感じた。それは幸福感とひとつになって八郎を涙ぐ

ましい気持ちにさせた。

「チャカ、行こう」

元気よくいうと、

「うん、行こう」

チャカも元気いっぱいに行った。

父さん、さよなら………といえはいいのが、行ってらっしゃい、というのか、一瞬迷ったが、八

郎の口は、

「行ってらっしゃい」

といていた。

「父さん、行ってらっしゃい」

チャカもそういった。

父さんは頷いて、

「お行き」

といった。

気がつくとも八郎とチャカはしっかり手をつなぎ合っていた。つないだ手からチャカの心が流れてきて、八郎の心とひとつになった。

「チャカ、がんばろうな」

「うん、がんばろうな」

握り合った手を大きく振って服部坂を上っていった。後ろで父さんが見ていると思うと、二人の足どりはひとりでに活発になった。

茗荷谷の書生部屋は静かになった。元安豊をはじめ、役者の居候たちは日本座の巡業に加わって出発し、残った書生の何人かは治六がいなくなったのを機にどこへ行くともなく出て行った。

今は岡田のボヤテキと出て行くにも行く当てのない二人の書生がいるだけで、はなやも間もなく暇をとるようになっていた。野呂瀬は結婚して所帯を持ち、人力俵で女子大へ通っていたそわの長女優子は岩手の素封家に嫁いで行った。秋が深まって行くにつれて家屋の古さが目立ってきて、

主あひの抜けた叔あひ實がこの家を蔽おほっている。

「先生は今頃は九州のどのあたり？」

幸次郎を見るたびにハルは同じことを訊ねる。

「富士さんのところに便りはあつて？」

「はう」

幸次郎は畏まって答えるが、言葉がつづかない。大阪中座を打ち上げた後、日本座は引きつづき九州巡業に出ている。今頃は熊本あたりにいる筈だった。だがその一行の中に治六とシナはいない。中座の公演中にシナは異常出血を見て、妊娠をしていることが判明した。流産の気配を応急処置で止め、医師がつきつきりで中座だけはどうか打ち上げたが、九州巡業は断念せざるを得なくなった。日本座は今、シナの代役に久松喜代子を立てて九州を廻っている。治六とシナは大阪南の高津黒門筋で仮住いに入った。シナは来年の六月に出産の予定である。

何も知らないハルは、九州の打ち上げはいつかと訊く。

「は、九州の打ち上げは、あれは……」

幸次郎は当惑した時に癖で、正座すると長さの目立つ痩せた腿をやたらに撫で廻しながら、

「うーん」

と考え込み、

「地方巡業というものは、そのう……何やかやと……」

いいかけて、気を変えたように、

「九州といえども、もはや……」

とあって、何をいおうとしたのかわからなくなり、額に手を当てて途方に暮れる。

「暮にはお帰りになるんでしょうね？ いくらなんでも」

膝に突っぱった両腕に力が入る。両肩の間に垂れていた頭を上げ、漸く決心して、

「奥さま」

と叫んだ。

「あるいは、先生は……年内にお帰りになることは……これは、あくまで、福士の推量でありませんが、無理かと……」

「無理？ どうして……そういつてきてるんですか？ 先生から」

「いや、はっきりそうといて「おられるわけじゃありませんが……」

「何なの、福士さん。はっきりおっしゃいよ」

「はい……ただそのう、福士はです、福士はこの際、先生が暫くの間、家を離れて、どこかで一人になって、静かにお考えになる時間が必要ではないかと、そう考えております。「うーん時は、

お互いに心を静めて、冷静に客観的に全体を見渡すことが必要ではないかと……」

ハルの凝視を避けようとして、幸次郎は顎を上げて天井を睨んだ。

「はっきり申し上げると、この際、事態をよりよい方へ運ぶために、冷却期間というものを設けた方がよろしいと思つんであります、これはあくまで福士個人の考えでありますけれども、あるいは治六先生ご自身もそのようにお考えになっておられるかもしれませんが、つまりお互いに感情が波立っていると話の筋道が見えなくなってしまいます。何ことにも平静ということが大切です……」

再び幸次郎は自分がいおうとしていることがわからなくなり、突然絶句して、困惑の極みとなる。

治六からはハルとの離婚話を早くつけよとせつついてきている。来年、シナが産む子供のためにもどうしても離婚しなければならぬと治六はいつている。生れてくる子供に父親が必要だという気持はわかる。しかし、それならば真田いねが産んだ与四男はどうなるのか。これから、父親がいなくなる喜美子や八郎や節や弥や久のことはどう考えるのか。幸次郎はその疑問を率直に手紙に書くが、治六の手紙はそれを黙殺して、ただ一方的に離婚話をつけられない幸次郎の怠慢を責めてくるのである。

「奥さま。福士、衷心より申し上げるのですが、このあたりでひとつ、生活の立て直しを図られてはいかがでしょう。治六先生に落着いて仕事をしていただくために、負担を軽くしてさしあげたい。書生や女中の数を減らし、家も小さいところに移り、出費を抑えましょう。先生は金のために濫作をしておられます。何よりもまず、この濫作をやめて、落着いた生活に入っていないだけでいい。先生が落着いて質素になれば、ご自分がどんな状態に陥っているかが先生の目にも

見えてまいりましょう。奥さまの方も、こう申し上げてはいかがかと思いますが、今までのように人寄せの暮し方ではなく、「自分が先頭に立って家事をとりしきり、子供さんたちを教育しようとする姿勢をおとりになれば、事態も変ってまいりましょう。先生も奥さまも、ここが大事な転機のように思われます。思いきって、暫くの間、別れ別れにお住みになって、今後のことを静かにお考えになる時ではないでしょうか」

幸次郎の話の半分も、ハルの耳には入らない。ハルの頭の中は怨みと不安でいっぱいになっていて、それらは僅かでも隙があればどっと流れ出ようと押し寄せてきている泥土のようである。幸次郎がひと息入れるのを見るとすかさず、

「先生は普通じゃない……狂った血が流れてるんだわ」

ハルの声は透き通ってきれいなソプラノだ。子供たちのためにアニー・ローリーやマイ・ボニーなどを歌う声が聞えてくると、書生たちは、

「歌だけ聞いているとどんな佳人かと思うんだがなあ」

といい合ったものだ。

今、産後の窶れがまだ取れぬままに、深い眼窩の奥で本来丸い目を猛禽類のように尖らせたハルが、声だけはあどけないような透明なソプラノで、

「仙台の一家の家じゃあ、治六は日本人じゃない。ダットン人だといってるのよー！」

というのを聞くと、幸次郎は気の毒を通り越して無惨を感じる。

「じゃあ福士さんは当分、先生は帰ってこないっていうの？」

「はあ……当分は……。ですから、奥さまも、別居なさるといっ心づもりをお持ち下さった方

が」

「当分っていつまで？」

ハルはふと素直になった。

「いつまで別居すればいいのか、それをはっきりしてくれなければ……別居して、それっきりになつてしまつんじや、承服出来ないわ」

「もつともです」

幸次郎は肩を落す。それ以上いえることは幸次郎にはもう何もないのだった。

「先生

お手紙拝見しました。それとなく奥様に当分、別居せざるを得ざるべきこと、小生や野呂瀬君の手にて、奥様はじめ皆さんをお世話すべきことを申上置き候事とて、もはや先生のお言葉次第にて、一家移転の上、静かに暮す心組み、奥様にも、出来申候。

前述の先生のお言葉とは、先生が奥様にお手紙を下さる事に候。奥様も先生よりお言葉なき限りは、如何に小生らより申したりとてお動きなさらさらず候。先生から直じかに手紙でも来て、一年なり二年なり帰京せぬからという確たる事でもいつて下されば、そのようにするのだが、と
いふことを申され居候。

この言葉をおくみ取りの上、今回の先生の出京が、先生自身のものとしてやむにやまれぬものなるを説明なされ、もつと小さい家に住み、一家を切りつめて生活し、子を育ててくれよ。

自分は今後真面目に勉強して、今後の一生の新しい運命を立派に切り開く考えなり。失敗の終局か、成功の終局か、とにかくその終局のことを握りたる暁には、今まで通りの不真面目なるものにてなく（然り、小生はそう考え居り候、先生は奥様を心底から憐れまなければならなか

ったのです。併し先生にはそれが見えませんでした。あつたとしても間隙がありました。真面に目、真に心と心の面接する機を得んという程度にて、やわらかに申下さ度候。

先生のお手紙の内容まで立入るは如何かと存じ候えども、これは奥様にどれぐらいまでのことを申してよろしいやら、その程度をお伝えるためにて候。同時に又、この趣意の手紙は先生の目下のご胸中をいつわるものにも無之事と存候。離れたりとて奥様は先生の最も親しき友中の友にてござ候。永久に離れて終るべき事は人間としてむしろ先生の幸福といわんより不幸にて候べしと存じ候。なお三笠さんもむしろその方を喜ばるべしと存じ候。とにかく先日のお手紙にてこれだけの事を申し上げる程度まで漕ぎつけ申候。奥様に対してあの手紙はかねて来、小生の幾度となく、先生は当分長いこと帰りません、ということに裏書きする如き結果となりしにて候。——この永く帰らぬという事を切り出し候にも、どれ位苦慮を要せしか御案じお願申上候……」

幸次郎は不器用に、くどくどと状況を報告した。後のことは一切、君に委せると簡単にいって治六は大阪へ行ってしまったが、（そして承知しました、と幸次郎も簡単に引き受けたもの）幸次郎の性格は二うい話を一方的に押し切ってしまうのには向いていないのである。

「——小生のやり方、ただ緩慢の一語にて候。知っているものを知らざるふりする辛さを心の中に含みて、平然として処し居申居候。先生のなさるべき事もこれにあるべきかと存候。急激は断じて悪しく候。奥様は強い事を申しながらも、私も思いきった事をするかもしれぬと申居られ候事もあり、右お含みの上、ひとえにお願申上候……」

幸次郎の手紙はいつも治六を怒らせた。読み終えた手紙をそのままほつり出し、

「何をやらせてもダメな奴だ……」

吐き出すようにいって、鼻の奥を性急にクンクンいわせる。少年時代から腹が立つと治六は鼻の奥が詰るのである。君には相手を説得しようという情熱が欠けている、と治六は手紙で説教した。君はそのための強い意志を持っていない。こういふことは一気呵成に押ししていかなければ、いちいち相手の気持ちになっては成功しないのだ。なぜはっきり、愛のない者が夫婦であることの無意味を説かないのだ。ハルが頑張れば頑張るほど治六のハルへの気持は悪化する。今は愛のなくなったこと、ハルを不幸にすることの呵責や同情が治六にはある。しかしこのままでいくとその最後の僅かな愛すらも憎しみに変わってしまうだろうと、なぜそうハッキリいわないのだ……。

治六は自分の身勝手を忘れて、不満をあらわにした。

「君はぼくがそれをいえないかと思っっているだろう。しかし考えてみ給え。ぼくの口から聞かされることと、君の口から聞くのと、どっちがハルにとって残酷だろうか？」

治六とシナの仮住居は大阪南・高津黒門筋の賑わいから逸れたところの、同じような板塀が四、五軒並んでいる一角である。上三間、下三間の二階家で、十坪余りの庭に突き出した厠を隠すように植えられた数本の孟宗竹の葉が、冬に向って頻りに枯れ落ちていた。二階の廊下に立つと広い冬空の南西の方向に遠く住吉神社の高灯籠が見える。

過去をどいまでさかのほっても、治六がこんな静かな時間の中に身を置いたことは一度もなかった。愛するシナはいつも彼の傍にいる。家事は黒田民子がとりしきり、シナの付き人のチエ子が使い走りをする。子供たちの喧嘩の声も廊下を走り廻る音も物の壊れる音、赤ん坊の泣き声、何も無い。夕暮になると豆腐屋が鈴を鳴らして通って行く。やがて塀ねぐらに帰る鳥の呼び交す声が聞

えてきて、住吉神社の高灯籠に静かに灯が入る。

それは、一見して幸福と呼んでもいいような落ち着いた平和な日々のようにだったが、治六の気持は片時も休まらなかった。彼の前には問題が山積していた。ひとつは妊娠を知って以来、不機嫌を剥き出しにしているシナであり、シナの妊娠によっていつそう離婚を急がねばならなくなったことであり、それに伴う子供たちの身のふり方、そのための金の必要。その一方で九州巡業を終えて帰ってくる日本座の座員たちの去就問題があった。

「何も心配することはないよ。希望はなくなってやしないんだ。六月に子供を産んだら、秋まで身体を休めながら芝居の準備をする。そして十月を舞台復帰の月としよう。あせることはないよ。

これは決して挫折なんかじゃないんだからね」

何よりもまずしなければならぬことはシナを元気づけることだったから、治六は胸の中に詰っている幾つもの気がかりを押し退けて無理に朗らかな声を出すのである。

「さて、演し物は何かいいかなあ。『裾野』はケチがついたし、かといって今更『虎公』でもないし……。いっそ、松井須磨子の向うを張ってハムレットでも演やるか？」

と笑ってみせる。翻訳劇を学生芝居と称して嫌っている治六がそういうのは、黙もくりこくっているシナを元気づけ、口を開かせるためである。

「ハムレットは元安だな。日足重亮は墓掘りと王の二役か」

シナの唇の両脇に微かに嘲るような皺しわが寄り、低い声が、

「サカラッキョのハムレットにシラミの將軍の王？」

と呟く。日足重亮は日本座に欠くことのできない芸達者の脇役だが、実年齢よりも十も老けて見え、身なりをかまわぬむさくるしい男なので治六が「シラミの將軍」という渾名をつけた。

「日本座がシェークスピアやったんじゃ喜劇になってしまっただけだわ」

まるで何かの仕返しでもするような痛烈な返事が、ぼそぼそと陰気に返ってくる。

「コブつきオフィリヤ？」

自嘲的に笑うと、急にこみ上げてくるものに身を預けてしまったように、高い大声になった。

「世間がまた何やかや、取沙汰するわ。面白おかしく……」

「世間のいうことなんか気にしていたら何も出来ないさ」

「コブつき女優なんて、誰も見にこないわ」

「それを見に来させるのが、ぼくらの力じゃないか。女優は舞台を見せるものだ。私生活は関係ないよ」

「こっちでそう思っている、世間は通用させてくれないのよ」

そして話題はハムレットから逸れて、いつもの失意の苛立ちと愚痴に入っていくのである。

「女はね、子供を一人産んだあたりが一番きれいになるんだよ。子供も産まないで器量たのだけを特みにしてきた女優が年をとると、遣手ばばあしかやれなくなる。だいたい女優が男知らずのような顔をしていなくちゃならないところが日本の演劇の遅れているところだね」

「先生はわたしがこれから、女優として成功していけるとほんとうに思ってるの？ ほんとう

に？ 一時の慰めはいやですよ」

「そう思っているからこそ、こっちでいるんじゃないか」

うんざりする気持を抑えて、治六は努力して笑ってみせる。

シナの再出発の時を治六は来年の十月に置いていた。しかし日本座の座員たちを今から十月まで仕事のないままに拘束しておくわけにはいかなかった。彼らの大半は貧乏で、生活も定まらな

い旅鳥だ。日本座の興行がないとなれば、どこか他の劇団を捜して身体を預けるしかない。ただでさえ売れない日本座から三笠万里子が抜けては、興行主がつく望みはないのである。

そうになると、折角集まった座員は四散して、来年の秋の公演に頭数が揃うかどうかわからなかった。思い屈しているシナの様子を見ると、治六は是が非でも何とかしなければならぬと思う。

座員を四散させないためには、座員に小遣いを与え、食と住を保証する以外に方法はない。

そのことに思いが及ぶと、治六は若荷谷の家族に金がかかり過ぎることを負担に思わずにいられない。あの家では儉約しようと考える者など一人もないのだ。幸次郎だけが治六から送られてくる金が湯水のように消えていくのに胆をつぶしているが、そうかといって彼にはいくら考えても儉約の方策がつかない。

だいたい、女と子供だけであんな大きな家に住んでいることに問題があるのだ、と治六は考える。家が大きい上にハルが無能だから女中や書生が必要になってくる。喜美子のために看護婦がついているのも、ハルが看病も満足に出来ないためだ。いったいあの女は今の事態をどう考えているのか。何も考えずのんびらりと毎日を過していれば金が送られてくる。金が送られてくればそれでいいと思っている。こうなつたのは何もかも夫が悪いと思っている。自分には何の落度もないと思いいいこんでいる。

——オレがどんな思いをして金を稼いでいるか。富士を督励して仕事先を捜させ、金を取るこ
とだけを目ざして夜も昼も机に向っている。それに対する犒ごういの気持きもちが奴らに一片でもるのか
……。

懊悩の余り彼は自分の身勝手を忘れた。

「喜美子さんの卒業祝いの着物はやはり先生のお見立がほしいそうです。それ位に思うことはよくよくのことです。どうぞこのお願いお聞き届け願います。

着物の表の図案と色は先生の考案がほしいのだそうです。なるべくハイカラな華やかなもので、胸のところまでその模様がくるものと申します。どうぞよろしくお願い申します。つまり先生にお願いする分はその図案と色と京都の染めと、それからこれは是非お願いするのですが帯です。着物は表だけあればよろしいのです。図案は野蠻人の裸踊りでもよいという喜び方です。よろしくお願い申します。先生はもの見立が上手ですし、お父様好きな喜美子さんは先生の声がかりを何よりの楽しみとされているでしょう。その先生の一度目の通った着物が着たいいでしょう」

治六は懽然として怒りを鎮め、喜美子の着物は作ってやらねばなるまいと思つたのだ。

治六が洩らす愚痴をシナは黙って聞き、内心で「そんな勝手な」と思っていた。シナはどんな時でも冷静な目を失わない女である。この騒動の当事者でありながら、彼女は常に対岸にいる批評家だった。

——先生におハルさんを非難する資格はないわ。

口には出さず、そう思っていた。ハルに対する嫉妬や敵意は何もなかった。そうかといってすまないとも思わなければ同情もなかった。ハルも自分も同じように、治六という暴君の犠牲者だと感じているだけだった。

年も押し詰ってから、幸次郎の何通目かの手紙が届いた。

「先生

先日來、小生は下女仕事を致居候。奥様のあのお身体にてはと思ひ、専心相勤め申候。目下の世間の好景氣にて下女^{ふつてい}払底致候うて女中を得がたく、ただただ奥様にもしものことありせばと思ひ、水仕事など引受けて致せしにて候。「飯食べる時しか、夜の十時頃まで坐らぬ事、間々^{これあり}有之候いし。奥様は衷心より小生に氣の毒と申され候。八郎さんや節さんまでこのことありて以來、いう事をどこか聞くようになられ候傾きあり、小生も内心喜び居候……」

手紙に目を走らせているうちに、治六の顛顛は怒張してきた。治六は年内にどうでも離婚話をつけて、新しい氣持で正月を迎えたいのだった。その治六の期待に手紙は何も答えていない。それのみならずその手紙は彼が捨ててきた家の、氣の滅入るような悲慘を描いているのだ。

「これじゃあ何もわからんじゃないか！ 離婚話はどうなってるんだ。ハルは何といってるんだ。必要なことはいわないで、余計なことはかりいつてくる奴だ。あれが福士の一大欠点だ……」

——福士さんは詩人だもの。福士さんにそついうことをさせる方が間違ってるわ……。

治六の罵倒を聞きながらシナはそつ思っていた。

——なんという人だろう。自分を何さまだと思ってるんだろう。福士さんの真情を何と思ってるんだろう。

罵るだけ罵ると治六は静かになった。興奮の涙が彼の目に残っていた。彼は罵倒することによってしか、幸次郎の手紙が突き刺した胸の傷から流れる血を止められなかったのである。

「おい、八郎、飲め！」

キャプテンの五木ライオンにいわれて、八郎は湯呑茶碗に注がれた酒をスツと飲んだ。

「おっ、飲めるのか」

五木ライオンがまた注いだので、またスツと飲んだ。

「水みてえに飲むね」

「参吉」の親爺がいった。

「同じ飲むなら、味わって飲んでもらいてえな」

味わいながら飲もうとしたが、またスツと飲んでいた。

七杯飲んだら、ライオンはもう飲めとはいわなくなった。

酒を飲めば愉快になるというものでもなかった。といって気持が悪くなるというものでもない。

うまいとも思わないが、まずいとも思わない。ただどんどん飲めば皆が驚いて騒ぐのが面白かった。

「ひとつ出たホイのよさホイのホイ」

皆と一緒に歌った。

「ひとつも羨む東京の ホイ

ワセダ中学 新入生

ホイのホイ」

「ふたつ出たホイのよさホイのホイ」

五木ライオンはキャッチャー特有の胴間声だ。

「ふたり娘とやるときにや ホイ

娘の方からせにやならぬ ホイのホイ」

「みつつ出たホイのよさホイのホイ」

とシヨートの山岸がつづけた。

「三浦環とやるときにゃ ホイ

バッタフライでやるがよい ホイのホイ

四つ出たホイのよさホイのホイ

与謝野晶子とやるときにゃ ホイ

短冊片手にやるがよい ホイのホイ」

手拍子をとりながら八郎は声をはり上げた。

「五つ出たホイのよさホイのホイ

五木ライオンとやるときにゃ ホイ

上下バットでやるがよい ホイのホイ」

どつときた。

「ライオンのモノはバット並みかい」

「参吉」の親爺がいった。

「太かないけどネ、長いんだよ」

「面白い子だな。名はなんというんだ」

「オレかい。オレはサトウだ。サトウのハッチャンだよ」

「ハッチャンてえと八郎か。わかった。八番目の倅だろ。だから八郎だ」

「ちがうよ。じいさんの八番目の孫だよ」

「じゃじいさんがつけたのかい」

「そつだよ。けどあとでよく勘定したら九番目だったんだ」

「参吉」の親爺は夕立に遭った山羊みたいだ。シヨボたれた白い顎ヒゲを嬉しそうに慄わせた。

「気に入った。飲みな」

湯呑にドクドクと酒を注いでくれたやつを、またスイと飲んだ。

「ぼくのイトコにキネって名前の女がいるんだ。その女の子のおふくろ、ぼくの父親の妹だけど、それが太ってるのなんのって、臼みたいな女なんだ。それで生れた子が杵だ。臼に杵はつきものだってね。それもじいさんがつけたんだよ」

「ふざけたじいさんだな。芸人かい？」

「ちがうよ。津軽藩の武士だったんだよ。蘭学を勉強して殿さまに蘭書ナポレオン戦記を講義した人だよ。勝安房かつあわの築地の海軍所に入って勉強したんだ。山鹿流の兵法も学んでいる」

「ほんとかい。眉ツバもんだな」

「ほんとだってば。頼むべからず六つの心得ってのが遺言だよ」

「何だい頼むべからずってのは」

「神仏衆生、法理、官位、智識、富貴、宗教は世を欺あやむく空言のみ。移り易きは人の心なり。法理は愚人を束縛する道具なり。真素面で世は渡られず、官位は僥倖の人。釈教智識は己を誤るもとなり。富貴は順番、卑賤は廻り持ち、依頼心ある時は中正を失うものなり。独立自主もって天爵を全うせよ」

「何だい、それは」

「何だかよくわからないよ。とにかく覚えろって父さんにいわれたの」

「それにしても、よく憶えたもんだな。そんなわけのわかんないことを」

「オレ、記憶力抜群なの」

「そのわりに勉強できねえな」

福山がいった。知らねえな。オレはホントは頭がいいんだ。その気になったら、何でもすぐ憶える。問題はその気になるかならないかだ。

皆が笑ってる。何でもいい、どつとくる笑い声は楽しい。自分のいったことがもとで笑いが起る時は、もっと楽しい。「憂さを忘れる」とはこのことだ。

「チータカター チータカター」

チータカター チータカター」

八郎は弾んで箸で皿を叩いた。

「せがれどこ行く青筋立てて」

チータカター チータカター

チータカター チータカター

生れ故郷の赤門さして

チータカター チータカター

チータカター チータカター……」

「どうも呆れたね。いろんなことを知ってやがる、この野郎は」

こんな歌なら書生部屋で子守歌代りに聞いてきたから、小学校の時から歌っている。八郎は声をはり上げた。

「きんたまよ

ゆづべのところへ行くこうじゃないか

わたしや行くのは よいけれど

中に入れる身ではなし

裏門叩いて待つ辛さ……」

これはノロセの得意中の得意だ。酒に酔ったノロセが、禿頭はげあたまのてっぺんまで赤くなって、この歌を歌う時はこれ以上の幸せはないという顔だった。だがもう長くノロセはこれを歌っていないなあ。

「いつ……わかって歌ってるのかい」

とヤギ親爺がいった。

「わかってるさ。それくらい……」

わざとエヘへと下卑げひて笑ってみせた。

「十四でわかってるのか。もっともオレが筆下ろしたのは九つだったからなあ。駄菓子屋のばあさんにやられたんだ。駄賃だよってなにくれたと思う。豆板とみじん棒だ……」

ばあさんでも何でもいい、一度女とやってみたかった。女の股ぐらの奥にはどんなものがあるのか、それをとっくり見たいのだ。

「男どちがってフクザツらしいなあ」

とモッチンも熱い吐息を吐いていた。

「こんなところに、どうしてアレが入るんだ？」

と絵を見ていつていた。

「それより赤ん坊が出てくるってのが信じられねえ」

「女もノビチジミが利くんだな」

「やりたくなかったら開くのかな」

そっぴい合ったことを思い出すだけでアイツがムクムクしてくる。ズボンの中に突っばって、ズキズキして、ちがう生物せいぶつがいるみたいだ。そいつがバクハツしそつだ。

「校長校長といばるな校長

コリヤコリヤ」

みんなが歌っていた。

「校長、生徒のなれのはて

ヨーイヨーイ デツカンシヨ」

バクハツしそつなアイツを上から押えて、八郎はヤケクソの声をはり上げた。

「息子息子といばるな息子

コリヤコリヤ

息子、おやじのひと乗へま

ヨーイヨーイ デツカンシヨ」

もうすぐ正月がくる。

正月なんかこない方がいいが、やってくる。

お父さんはお忙しくしてお正月には帰ってこられませんか、と福士さんはいった。

けれどもお年玉を奮発して下さるそつだから、それで我慢しようね、といった。

「おやじおやじといばるなおやや

コリヤコリヤ

おやじ、息子のぬけのから

ヨーイヨーイ デッカンシヨ」

お年玉なんか、ドブに叩きこんでやり……たいが、やっぱり貰うことにしよう。

長いトンネルをやつと抜けて日の光の中に出たと思つたら、不意打ちの懲罰が待っていた……

シナはそう思っていた。こんな無理な出発が祝福されるわけがないのだ。進もうとして足を前へ踏み出しても、地面は後へ退^しっていく。踏み出しても踏み出しても同じところにいる悪い夢の中にいるようだった。

それというのも、あの人に掴まってしまったためだ、とシナは思う。考えが行きつくところはいつもその一点である。

「先生も悪いかしらんだけど、あんたかて、はっきりせんのがいかんわ」

と黒田民子はいった。それは民子だけでなく、大方の意見であることをシナは知っている。胸に抗弁が渦巻くが、無力感を憶えて口を嚙み、沈黙の中に閉じ籠る。

——そんなにいうならあんた、いっぺん、わたしの立場にたつて「らん。あんたのいうように出来るもんかどうか、してみて「らん……」。

何かいうとしても口下手なシナには、せいぜいその程度のことしかいえない。たとえシナがはっきり意志を示したとしても、相手が治六では結果は同じなのである。シナはそういいたい。何をいっても治六の鋼鉄の鎧は撥ね返してしまつのだ。シナは猛獣の爪の下の兎だ。シナは絶望して治六に従い、自分の貝の蓋を閉じる。治六は貝の蓋をこじ開けて中からシナを引っ張り出そう

と機嫌をとる。そうしてシナは妊娠してしまった。

「あんた、赤ちゃんが生まれること、嬉しくないの？」

民子に訊かれてシナは口籠った。それから思い切っていった。

「嬉しゅうないわ……」

言葉に出していうと、この数か月、心の奥底に抑えつけてきたことが俄かにあらわになった。

「口惜しいわ」

重ねていった。そういうと口惜しさがどっと広がった。夢が碎けて出発点に戻ったのならばまだいい、と思った。妊娠したシナはもう「もとのシナ」ではないのだ。もとには戻れない。前にも進めない。だがこのことばかりは洽六に当るわけにもいかなかった。愚痴もこぼせない。三浦と同様時代も含めて、シナはかつて妊娠の気配もなかったのだ。妊娠など他の女が関わることで、自分には無縁のことだと思っていた。何よりも口惜しいことは、これでもう「先生がいなくてもわたしは一人でやっていけるんです」とはいえなくなってしまうことだ。シナの運命の軌道は舞台への道へは向わず、どこまでも洽六とのよじれ合う生活に向って伸びているようだった。

「あんたはほんまに冷たい人やねえ」

民子はシナに向かってつくづくいった。

「わたしはこの頃、先生が気の毒になってきたわ。はじめの頃は、なんやムチャクチャな人やなあと思てたけど、この頃は先生見てたら、可哀そうでたまらんわ。あんたかて先生が好きなんですよ。好きやから「そ、こ」までできたんでしょ。それやのにあんた見てると、まるでいやこにいてるみたいやわ。何もかも先生のせいにしてからに、山賊の頭目の強奪されてきたお

姫さんみたいな顔してからに。あんた、文句はいうけど、先生に感謝したことないでしょう？先生の苦勞、おも思たことないでしょう？先生は好きで苦勞してるんやから、しかたないて……そんな、まるっきり、あんた、自分らのことやのに、他人ひとことみたいに^ひてるだけやないの。あんたかてきつと、先生のこと愛してるんやわ。そつでしよう？ねえそつでしよう？」

「愛している」という言葉は、いつもシナを当惑させる。それをシナは虚空に懸っている月か星のように感じている。それはあることはわかるが、シナには掴むことの出来ない、あくまでも漫然とした抽象的なものだった。「愛する」とはどんな気持のものかシナにはわからない。三浦敏夫はシナを愛したか？いや、あれは「愛」ではない。ただの情欲であり執着だったとシナは思いつめる。なぜ人は「愛している」などと無造作に口にするのだろう。シナはその言葉を口にした時から、「愛」の風化が始まるような気がするのだ。それは簡単には口にする言葉ではない。簡単に口に出れるのは、それだけ「愛」というものを簡単に考えている証拠ではないか――。

——先生は二言目には愛してる愛してるというけれど、わたしの気持を少しもわかってほしい。それが愛だろうか？愛してる^{こと}が本当なら、もっとわたしの気持をわかってほしい。わかって努力するべきではないのか？

だがたとえシナがそついったとしても治六は、

「ぼくがわかってないと思つのか――」

と怒るだけだ。だからシナは黙っている。

「ここまでできた以上、前に進むんだよ！それしかないじゃないか――」

自分は今、幸福を目ざしているのか、不幸を目ざしているのか、それもわからないで治六はうつ。

自分の愛がシナにとって幸福でないとしても、治六はシナを愛しつづけるしかないのだった。今に自分を愛するようにさせてみせると思っているわけでもなかった。そんなことは考えもしなかった。何もの力か、まるで目に見えない怖ろしい意志が、治六を掴んで引きずっているようだった。治六はその力の意のままに草木をなぎ倒して進む壊れた洗車だった。踏み止まろう踏み止まろうとしながらシナは、その戦車に引きずられていくのをどうすることも出来ない。

ある朝、治六の高い声がシナを呼びつつ廊下を近づいていた。

「万里さん、ここに平塚らいてうの訪問記が出ているよ」

シナが髪を結っている鏡台の後ろに治六は新聞を持って立った。シナは十九の時、奈良で平塚らいてうの女性解放運動の噂を聞き、それ以来らいてうを尊敬してきた。女優としての自立の道を選んだのも、らいてうに触発されたためであることを治六は知っている。治六は新聞を開いて、声高に読みあげた。

「茅ヶ崎の停留所で降りて、平塚さんのお宅はと聞くと、漁夫らしい男なんこいんが南湖院と白く記してある電柱を指して、この一本線をどこまでも辿って行けばひとりで行かれると教えてくれました

……。ああ、らいてうももう三十になるんだなあ。奥村と一緒に何年になるだろう……」

「とらいてうがどっかしたんですか？」

とシナは先を促す。

「うん、先を読むよ。玄関で先ず目についたは大きな乳母車で、取次の女中さんに抱かれてアア、アアいいながら出ていらしたのは、くりくり肥った可愛らしい囃生さんでした。『ほんとこの子は父さま似でして、ちっとも私に似ていないのですもの。何だか張合のないような気もいたします』とらいてうさんは愛の籠る瞳をじっと囃生さんのお顔に向ける。『もう大分この頃は親馬鹿

になりかけまして、なんですか、そりゃあ自分の子が一番よく見えて仕方がないんです。原稿なんか書いていても次の部屋に子供がいたりするとどうも気になって仕方ありません。ですから真の自分という気分になれる時は子供の熟睡している間だけでございますの。子供が出来ない前までは私はそりゃあ神経質でして、人とお話するにもその座敷に子供が這っていたりするとなんか落ち着かないような気がいたしました。今では全くそんなことは考えられなくなりました。子供が出来ない以前の恋というものを考えてみますと、それは浮わついた派手な色彩のものでしたけれど、子供ってという楔が出来ると質素な真面目なものに変わってきます』

治六が何をいおうとして、それを読んでいるのかシナにはわかってきた。それでシナは露骨に面白くない顔になって目を伏せている。

「恋人に対する愛と、子供に対する愛と、それは全然性質の異ったもので、どっちを強い深いというわけにはまいりません。しかし失われたということを考える時、それは子供が失われたのよりも恋人が失われた方がより深い空虚を感じるだろうと思われれます。もうこの頃の私の生活は大部分、子供のために費されているのですよ、らいてうさんはこうおっしゃって静かに微笑まれた。次の室で何か物を打ちつけるような強い音がすると思ったら、それはお父さまに抱っこされた曙生さんのお悪戯いたでした……」

治六は新聞を畳みながら鏡の中のシナを見た。

「面白いなあ、新しき女がこういふことをいうようになったんだよ。男のマントを着て吉原へ繰り込んでいたらいてうがだよ。やっぱり女は子供を産まなければなあ……」

上機嫌に治六はいった。

「これからはらいてうのいうことも信用出来るだろう……」

治六の高笑いをシナはニコリともせず聞いていた。

——らいてうもたいした女じゃなかった、と思っていた。恋が何だろう、子供が何だろう。シナは鏡の中の治六の笑い顔を見ながら思った。らいてうは普通の女だった。けれどわたしは普通の女じゃない。普通の女が幸せに思うことなんか、わたしには一文の値うちもないわ！

口を結んだままシナは昂然とそう思っていたのである。

暮も押し詰ってから九州巡業の一行が帰ってきた。正月を控えて行き場のない彼らは、治六とシナの仮住居の中になだれ込んできたまま、階下の三間に十数人が木賃宿さながら寝起きし始めた。

民子は食費を抑えるために豆腐汁とヒジキに油揚げの煮つけばかり食膳に出し、役者たちから「豆腐屋の廻し者」と呼ばれている。彼らは退屈しのぎに花札をいじったり、猥談をしたり、猥歌を歌って気らくに日を送っている。昼間は寝ていて、夜になると元気が出て芸術や演劇論を戦わせ、やがて掴み合いの喧嘩になる者もいる。

シナは目に見えて活気が出てきた。眠たがりやのシナが徹夜の演劇論に朝まで耳を傾け、人が変わったような大声で、幼稚だが真剣な質問をし、意見を述べ、気の張った笑い声を立てている。

その声を聞きながら治六は二階で机に向っていた。いったい先生は何が楽しくて朝から晩までこんな連中のために仕事をしているのだろう、と民子が齒がゆく思うほど、眠る間も惜しんで仕事をしている。治六はシナの機嫌がいいことが何よりも嬉しいのである。ほくはね、万里さんが元気のいい顔を見せてくれさえすれば、どんな苦勞も苦勞と思わないんだよ、と肩を揉む民子にいった。

ある日、治六は、トタトタと音を立てて勢いよく二階から降りてきた。

「おい、隣りを借りよう！」

と治六は叫んだ。

「隣の雨戸に大家が家賃札を貼っていた。あれを借りよう！」

治六の顔はいいことを思いついた子供のように晴々としている。

「この狭いところに、これ以上みんなで暮すわけにはいかんだろう……」

「隣に住ませるんですか、あの人たちを……」

思わず民子は口を出した。

「お金はどうするんですか。ただでさえもの入りなのに……」

「稼ぐよ、ぼくが」

すぐ治六はいった。

「富士にいったら、連載の口を二つ三つ捜させる……」

シナは何もいわず、大きく睜った目を治六に向けていた。呆れたように、嬉しそうに、その濃

い黒目が光っているのが、民子には憎らしいほど美しく見えた。

八郎はもう一度、早稲田中学一年生をやることになった。

モッチンは八郎よりも成績が悪い。なのにモッチンは二年に進級して、八郎は落第した。

落第したのは勉強の成績のためばかりでない。無断欠席に遅刻、無断早退、つまり「平素の心

がけ」が悪かったからだと言った焦こげダルマがいった。

だけど、落第したからといって、急に心かげがよくなるというもんじゃない。落第した奴は、たいてい前よりも心かげが悪くなる。そこんとところが教師にはわからないんだ、と八郎は思う。

「オレ、落第だぜ」

家に帰ると八郎は威張って行ってやった。

「まさか」

と伯母さんはいい、本気にしない。伯母さんは八郎のことを頭のいい要領のいい子供だと思っていた。勉強しなくても、いざとなると要領でやってのける子だと信じていたのだ。

だが八郎はもう「要領よくやってのけよう」とは思わなくなったのだ。なるようになれ、と思っ
っている。

八郎は悪びれずに落第を受け止めることにした。悪びれたり恥かしがったりすると、他人はそこにつけ込んでくる。こともなげに振舞っていればいい。面白がってるふりをすればいい。いっそ威張った方がいい。

「口惜しけりゃ落第してみろよー」

そつえばいい。「落第する勇氣もねえくせに、でかい面すんなよ！」と。

けれどもモッチンのいない教室はつまらなかった。新しい一年生はつまらない奴ばかりだった。どいつもこいつもパリパリの制服を着て真面目くさっている。垢じんでヨレヨレの八郎の制服はとびぬけて目立つ。

八郎は隣の席の沼田に「ダブダブ」という渾名をつけてやった。制服が大きすぎて、肩が落ち、手の甲が半分隠れている。詰襟から細い白い首がニョロニョロと出ている。

ダブダブのニョロニョロの弁当にうまそうな卵焼きが入っていたから、くれよ、といったら、

イヤだよ、といった。オレのタラコと取っ替えっし「しよう」といったら、タラコなんて下等なものは食わないよといった。

ダブニヨロは英語がよく出来る。叔父に外交官がいて、子供の時からそいつに英語を習ったんだぞうだ。

ダブニヨロはばあさんのことを「グランマア」という。

ダブニヨロはろくな奴じゃない。

学校はつまらない。

今日もまたダブニヨロと並んで坐るかと思つと泣きたくなり、暴れたくなる。

学校へ行きたくない。

肩に鞆を掛けたまま、伝通院の石段に腰かけてぼんやりしていたら、隣の杉浦の鉄若さんが通りかかった。

「よう、ハッチャンじゃないか。何してるの、こんなところで」

といった。

「見ればわかるだろ」

といったら、

「サボってるのかい、学校」

と云って鉄若さんは並んで腰を下ろした。

鉄若さんの父さんは杉浦重剛と云って、なんだか知らないがむやみに偉い人だということだった。なんでも皇太子殿下の「教育係りだ」ということだが、皇太子の教育に熱を入れる余り、自分の息子の教育は手ヌキになっているらしい。いつも黒い憂鬱そうな顔をして、（伯母さんは鉄若

さんって、暗闇から牛を引っぱり出したような人だねえ、とよくいつている。くたびれた小倉の袴を穿いて、足袋の親指のところが破れて黒い爪が出ている。爪が黒いのは、墨を塗って、足袋の破れを「ま化かしているからだ。

鉄若さんの父さんは偉い人かもしれないが、若鉄さんはどう見ても偉くなりそうにない。ひと頃鉄若さんは毎日遊びにきていた。だがこの頃はあまり来なくなった。

「喜美ちゃんはどっしてゐる？」

と鉄若さんはいった。

「だんだん悪くなってるよ」

と八郎はいった。鉄若さんは、「そっか」とだけいつて暫く黙っていつてから、

「メキシコへ行くことにしたよ」

といつた。いきなりメキシコといわれてもどのあたりかよくわからない。とにかく外国だ。

「いつ帰ってくるの？」

と訊いた。

「一年か、二年か、三年か……行つてみなければわからんよ」

怒つたようにいつた。

鉄若さんと喜美子姉さんは、好き合つていつた筈だ。去年の夏の頃、喜美子姉さんと鉄若さんは出窓に並んで坐つて、手を握り合つていつた。大阪へ行く前、父さんは母さんに、喜美子のことには鉄若君によく頼んでおく、といつていつた。父さんの留守に二人で二階へ上つたきり、なかなか降りてこないこともあつた。二人はコーニンだからね、と岡田のボヤテキがいつていつた。

公認なのに鉄若さんはメキシコへ行く。行つたら帰つてこないかもしれない。(帰つてこない

ような気が八郎はする。鉄若さんは喜美子さんが肺病になったから逃げるんだ。父さんがいなくなったことも、逃げる理由に入っているのかもしれない。

「鉄若さん、逃げるのかい？」

と試みてみた。鉄若さんは腕組みの手先を脇の下であたためる格好のまま、暫く黙っていたが、「そつだ」

根性を据えたように、ふてくされたように野太い声でいった。

「メッキが剥げそつだからね、このままじゃあ……」

「メッキって、何だい？」

「語学校を卒業したっていったって、所詮はメッキさ。このままじゃ兵隊に取られる。兵隊に行けばメッキが剥げる。だから……その通りだ……逃げ出す……」

いかつい、地黒の、ザラザラした鉄若さんの顔が、洗い晒した習字の雑巾みたいに白茶けていた。

「メキシコへ行ってなにするの？」

鉄若さんは答えない。答えないのは、何をするのか自分でもわかっていないからだろう。

「メキシコで世間というものを勉強してさ。一人前になって……帰ってきたらそれによって食っていけるというものを身につけてきたい」

暫く考えてから仕方なさそうに鉄若さんはいった。

「それによって食ってけるものって何だい」

「それは……行ってみなけりゃわからんよ」

鉄若さんは立ち上って、サヨナラともいわないでぶらぶらと歩いて行ってしまった。

みんな行ってしまおう。

はなやも、コンチャンも、阿部も行ってしまった。どこへ行ったんだろう。

行く先のある奴はいいなあ。

父さんも行ったぎりだ。

屋前の境内は犬の子一匹通らない。午前中はみんな何やかやして、忙しいのだ。おもらいだっ
て、人中出现て、もの乞いするのに忙しい。

桜が咲いている。

ジワッと寂しさがやってきた。いつかもここに坐って満開の桜が散るのを眺めたことがあっ
た。あの時もこんな気分だった。あれはいつだったろう？　ずーっと昔のことのような気がする
が、よく考えてみるとあれは去年のことだ。たった一年前のことだ。桜って寂しい花だ。そう思
ったことを思い出した。

いったいオレはどうなるんだ？　と思った。

「おいらは知らねえよ、どうなったって」

声に出していった。

父さんに向かっていった。

六

徹夜明けの昼寝布団に横たわって、うつらうつらしている治六の上を、生ぬるい晩春の微風が

裏庭へ抜けていく。微風は懐かしいような下肥の臭いを運んでくる。どこかの菜園で下肥を撒いているのにちがいない、そう思いながら、治六は半睡半醒のくつろぎに身を委せている。

「この柄、見れば見るほど可愛らしいわ。あっちの梅のんよりも、これに決めてよかったし」

民子の声がいっている。

「でんでん太鼓に犬はりこ。何やしらん野暮ったいように思たけど、こうして見たらほん可愛らしいねえ。色もええし」

シナの声は素直だ。

「あっちのより、安かったし」

「あんたは安うてええもん見つけるの、ほんまに上手やわ」

民子と話すのでシナは大阪弁を丸出しにしている。それはシナがくつろいでいる時だ。語尾の不明瞭な大阪弁を常々治六は嫌っているが、こんな穏やかな微風の中でうつらうつら聞えてくる

大阪弁は悪くない。

「おまん、こりやなぜ食わん

ハラが痛いか 夏やせしたか

ハラも傷まぬ 夏やせもせんが

ハラに八月の お子がある……」

民子が低い声で歌い出した。

「いやらしい、そんな唄、歌わんといてよ」

「そやかて、あんたかてこの手毬唄、歌って糞つきしたんでしょっ？」

民子は歌う。

「もしも」の子が男の子なら

弓矢とらせて甲冑きせて

もしも「の子が女の子なら

琴や三味線縫針させて

育てあげるがお楽しみ……」

「チヨイと百ついた」

とシナが後をつけた。

「おヌイちゃんをお守りする時、この唄歌ったら、なんでかいつつもすぐに泣きやんだわ」

「おヌイちゃん……ああ、貰い子の妹？」

「八月で貰われてきたんやわ。ほんまによう泣く子やった。けど、この唄歌ったら、ふしぎと泣きやんだの」

「八か月で貰われてきたん？ 可哀そつに。けどそろまたなんぞ？」

「おヌイちゃんの父親ちちおやいう人が赤痢で死んでしもつて……その人が横田のお父おとうつあんあにの兄あにさんやったもんやから」

「そんならあんたとイトコになるわけ？」

「そうやない。わたしも貰われて横田へ来た子やもん……血はつながってへん。誰も」

「二人貰い子したわけやね。横田さんの家は」

「おヌイちゃんを貰うことになるとなるんやったら、なにもわたしが貰われていくことなかったんやわ」

「なんでまたあんた、貰われていったん？」

「うちのほんまのお父っつあんは西尾いうて、大阪の新川町で古物市場してたんやけど、同じ町内に北村という表旦那がいて、その北村の小父さんのヨメさんと横田のお母はんが姉妹やったの。子供がないから女の子もろて女学校出して、ええところから婿養子とって家を継がせたいいうて……それで西尾には六人の子供がいたもんやから、どうや、西尾はん、どれか一人、女の子、分けてやらんか、て、北村の小父さんがいいにきてね。お父っつあんもお母さんも『女学校出す』と聞いて、気持、動かしたんやわ。西尾は子供も育てらてんような貧乏やなかったけど、女学校まではやれんかったから……」

「けど、あんたはいややったんでしょっつ。」

「いやも応もないわ。小学校へ上ったばかりで、いやと思つても親に行けといわれたら、どうでも行かんらんもんやと思つてたの」

「おどなしい子やったんね？」

「おどなしいから、この子がええやろっつというところになったんよ」

まるで他人の身の上を語るように、シナは淡々と話している。

養母のシズはもと吉原の花魁で、お職を張っていたというのがなぜか自慢の女だった。養父の

由松その当時の幫間だったという。シズは新井忠重という薩摩藩の侍に落籍されて権妻になっていたが、どういいういきさつで由松と夫婦になったか、そのところはいわないからわからない。

由松は「豆腐を縄でくくったような人や」といわれて、本業は蚊張の織屋だったが、シンガミーシンの代理店をしたり、「おっとせいの鞆丸」を売りに歩いたり、キララの山を買ってひと儲けを企んだり、吉野の山奥で見つけたという滝のガイコツと、手を叩くとケキョケキョと鳴く鶯の欄間の買手を探し歩いたりして、何があっても「はアはアはア」と笑っていた。

シズは毎日大丸髻に結び、女中を置いていた。だが月末になるとシナは借金のいいわけを書いた手紙を持ってお使いに行かされた。シズは近所の歯医者や怪しい仲になり、地元の赤新聞に書かれたこともある。

「おヌイちゃんの母親はおはなはんていうおとなしい人でねえ。おヌイちゃんの父親が死んだ後、姑さんと暫く暮してたんやけど、その姑がきつい人で、おはなはんは裏で洗濯しながらいつも泣いてたんやて。その時、おはなはんはぼた餅を作って飯台の上に置いといたんやわ。そしたらおヌイちゃんがそれ見て、這うて行って、食べようとしてぼた餅に手伸ばしたもんやから、おはなはんが『食べたらいかん！』いうて飛んでいったの……ぼた餅に猫いらずが混ぜてあったのね。鼠を殺そうと思って作ったんですいうて、いくら弁解しても姑さんは、ほんまはわたしを殺すつもりやったんやろというて……とうとう、おはなはんは里へ帰されてしもたんよ……それで横田でおヌイちゃんを貰うことになったの」

「ふーん」

民子は大きく溜息をつき、

「むい話やねえ……けど、ほんまに鼠殺すのが目的だったんやろか？」

「姑さんが『わてを殺す氣いやったんやろ！』て詰め寄った時に、おはなはんは『すみません』って謝ったというのよ。すみませんというたのは白状したと同じや、ということになってしもたんやわ……。けどおはなはんという人は、何をいわれてもすみません、すみませんと謝るのが癖になってて、『今日は寒いなア』て姑さんがいうたら、『すみません』と答えた、そんな話があるくらい。年中叱られてるものやから謝るのが癖になってたんやわ……」

「憐れな話やなあ……」

「おヌイちゃんはほんまによく泣くやつたけど、この毬つき唄歌うたら、ふしぎと鳴きやんだん。わたし、子供心に思ったんよ。おはなはんがこの唄、歌うて寝かせつけてたから、それで泣きやむんやないやろか、って」

山に囲まれた播鉢すいばちの底のような町。冬は底冷えがして夏は暑い。山の向う側のことには無関心で、ただ歴史の遺産に凭たよりて自足して暮す人たちの、饑すえて因循いんじゆんな空気の淀み。その町の暗い冬、死んだような夏。

「貰もらわれていって一年ほど経った頃やったかしら、近所の人から、『シナちゃん、大阪の家へ去いにたいことないか?』って訊かれたもんやから、つい『去いにたい』て答えたんよ。そしたら翌日あくるひ、学校から帰ってきたら、お母かはんが顔ひきつらせてる。いきなり、『こんなに可愛がってるとうのに、それでも足りないっていうんだからねえ』……かん高い東京弁でもいう人でねえ。頭痛こがするいうて三日も起きてこんの。そしたらお父ちちツつあんが『シナやん、お母かはんにあやまり』ていうもんやから……」

「謝あやまったん?」

「布団ふとんの裾すそに坐まって、『お母かはん、すんませんでした。かにして下さい』て……」

「いやらしいお母かはんやねえ、イケズやねえ……」

「わたしその時から、子供心に思うようになったの。これはうっかりしたことはいえん、って。

『お父ちちさんとお母かさんとどっち好きや?』とか『お母かさん可愛がってくれるか?』とか、お節介せつけいやきが仰おほ山やまいいてねえ。そんな時でも用心しんじんして、『どっちも好き……』て答こたえたり……」

シナの掴つかみどころのない性格はこの町で作られた。シナが心のうちを見せない、人を信じない、自分を守ることだけを考える女になったのは横田夫婦のためだ――。寝物語ねものがたりりに聞く思い出話しゅわな

のに憤怒がこみあげてきて、治六は横田夫婦を思いつきり罵倒してやりたくなる。

横田夫婦はシナが女学校の修学旅行で堺へ行ったり帰りに大阪の西尾の家へ一泊したことを根にもって、シナを勘当すると威した^{おど}。

「たいしたことでもないのにイチャモンつけるのが好きなお母はんでねえ。本当はその気はないのに何かとすぐ勘当勘当と騒ぐんやわ。けど威してくれてよかったんやわ。そうやなかったら、今頃は奈良で小学校の教員かなんかの婿さんもろてるどころやろねえ」

晒で小さな枕を縫いながらそういう声は微かに笑いを含んでいる。

「面白いもんやねえ。人の一生で……」

「奈良へ子にやられなかったら……ずっと大阪の西尾にいたら、今頃は町内の職人か商売家のヨメさんになってるとこやわ」

それから気を変えるようにシナはいった。

「ねえ、枕に入れるもの、何にしよ？ そば殻？ 生綿^{きわた}？」

「生綿は柔らかいけど、そば殻の方がええのとちがう？ そば殻は頭の熱、取るいうから……」

シナが今まで口にしたがらなかった過去のことを話すようになってるのは、気持ちが落ち着いてきたからだろう。赤ん坊が生れることがシナをな「ませているのだろう。治六はそう思う。すると治六の胸にはしみじみと優しい喜びが湧き出てくる。彼を蔽っていた憂悶の一角が漸くなごんで、曙の光が射してきたような気持である。治六は思う。母親になることによってシナの強情の角は取れていくだろう。そう思い決めると治六はシナの中に芽生えてきたもの、平塚らいうをも変えた神秘の力に感動せずにはいられない。その芽を大事にはぐくみ育てるのが、男としての自分の務めだと思っるのである。

八郎は学校へ行かなくなった。

「どうしたの？ 学校へ行かないの？」

と母さんがいう。

「行かねえよ」

と八郎は答える。

「学校へ行かねえのはオレが悪いんじゃないよ」

そついうとみんな黙ってしまふ。

悪いのは父さんだ。

それにあの女だ。

父さんはバカかい？

そついうと、みんな黙る。

「ハッチャン、ハッチャン、人間というものはね」

と福士さんはいった。

「善人とか悪人とか、バカとか簡単に決めるもんじゃないんだよ。簡単に裁いてはいけないんだよ。裁いてしまったり、もうその人を理解することは出来なくなるからね」

理解？ そんなものクソくらえだ。

そんなものがなぜ必要なんだ。

理解したってしなくたって、同じだよ。

「それはね、理解しようとすることはね……」

福士さんは考え考えいった。

「それはね、お父さんのためじゃないんだよ、ハッチャン。ハッチャン自身のためなんだよ」

わかるかい、ハッチャン、といったから、わかんないヨとあっさりいってやった。安モノのメ

ガネの奥で、福士さんの目が悲しそうにシバシバしていた。

福士さんは女のエプロンをして、頭を抱えて長いこと考えこんでいた。ロダンの「考える人」

みたいに格好のいい考え方じゃない。福士が考える時ってのは、あれは借金取りに詰め寄られて

途方に暮れているっていう格好だな、といつか父さんがいつていた。

やっぱり父さんはうまいことをいう。

そう思って見ていたら、いきなり顔を上げて、

「津軽平野には岩木山という山があってね、弘前の人間はこの山をお岩木さまと呼んでいる

……」

といい出した。福士さんは弘前をシロサギという。

「福士さん、ヒロサキだろ」

とくろくろく

「そつそつ、シロサギ」

と喋ってアツハツハアと笑った。

「まず、津軽の自慢といえばこの岩木山だ。それはそれは素晴らしい山でね、津軽平野にながーく

裾を引いて、親しいような、重々しいような、怖いような、懐かしいような、愛あくくてたまらね

えような、その時その時の見る人の気持で、どんなにも見える神さまのお山だ。お父さんもこの

ぼくも、生れた時からずーっと、このお山を見ない日は一日もなかったよ……」

富士さんの話はいつも長いのが閉口だ。長くても面白ければいいが、富士さんがひとり面白がっているだけで、聞く方は面白くも何ともないのが困る。

「面白くないよう、そんな話」

「といっても平気で、まあ、まあ、聞きなさい、とつつける。」

多分富士さんは岩木山について話すのが目的ではない。話そうと思っていることはほかにあるのだが、そこへ行きつくまでになぜかふと岩木山のことを話したくなったんだ。

「ああ、ハッチャンにお岩木さまを紹介したいなあ。そのうち是非ハッチャンを津軽へ連れて行くよ。そうだ、岩木山の山カケの時がいい。山カケというのはね」

「知ってるよ。旧暦の八月朔日ついたちにお山に登ってこ来迎を拜むんだろう」

「この前にもその話は聞いている。」

「あちこちの村からお百姓が行列組んで、幟しほを立てて、五色の御幣ごへいを持って、薯いもだの大根だのを捧げて白装束でやってくるんだろう……」

知っているからその話のもういい、といたいたのだが、富士さんはかまわず、

「そうそう、そうだ、そうだ」

と頷うなづく。

「やぶぎ やぶぎ」

どひひひ やぶぎ

お山さ八大金剛はちたいこん道者みちしや

「こなのはい南無なむ帰命頂礼きみやうちやうらい」

りもしない人だった。

父さんにも寂しいのを我慢した時があった、ということも福士さんは八郎にいいたいのだ。

だからハッチャンも寂しいのを我慢しろといたいたいのかい！

それだけのことをいうのに、なぜどっさいさいぎの唄を歌わなくちゃならないんだ！

「オレは寂しくなんかないやい！」

八郎は喚いた。

「うるせえ、うるせえ、うるせえ」

福士さんはそれにとり合わず、

「世の中にはね、ハッチャン。苦しむ人と苦しまない人がいるんだよ。苦しむ人は不幸で苦しまない人は幸福かというと、必ずしもそうではないんだなあ。苦しみはないに越したことはないよ。うなものだけれど……いや、待てよ。いや、やはりこういうことがいえないか。人間、苦しまないよりも苦しむ方がいい。なぜかというとね、苦しむことによって見えないものが見えてくるからだよ」

福士さんはいつも一人よがりで、しゃべればしゃべるほど何をいつているのかわからなくなる。わからないが、福士さんが八郎のために一所懸命になっていて、そのためにますますわからなくなることはわかる。それが八郎をますますいらいらさせる。

「一番の罪はね、何も感じないことだよ。鈍感というんだよ、ハッチャン」
それから急に気が変わったように福士さんは手拍子をとりはじめた。

「アア 津軽一面手にてんてん」

お詣りなさる人々は

さうぎ さうぎ

どっこい さうぎ

アア 水こりとりて身を清め

白装束に身をかため

太鼓叩いて鉦ならし

アア お山さ八大金剛道者

肩にはたすき 背に餅

首に陣笠袋下げ……」

「うるせいやい」

と八郎は喚いたが、福士さんは平気で歌っている。立ち上って踊りながら、部屋の中をグルグル廻る。ヤケクソになって八郎は福士さんの後からついて廻った。わざとヘッピリ腰をして、顔をひょっとこにして踊った。

「アア バタラバタラの掛声で

おかめの面や烏帽子で

踊り狂ってやれっれしやと

豊年満作お礼参り

ヨサレ ソウラヨイ……」

六月、シナは男の子を産んだ。

大正六年六月六日に生れたので、六郎と名がつけられた。

母乳が出ないので山羊の乳が与えられた。山羊の乳は牛乳よりも栄養価が高いという理由である。元看護婦の経験を生かして、民子が六郎の面倒を見た。

ハルとの離婚話は遅々として進捗しない。治六が喜美子を託つつもりでいた杉浦鉄若は、治六の無責任をなじる手紙をよこして、メキシコへ行ってしまった。

「——先生の家庭に光をもたらすものは、先生ご自身による外、ないと思います。喜美さんは決して私を得たことを以てすべての満足幸福は得られますまい。

先生を父としてあたかき家庭となり、しかる後、私を得て始めて満足を得、幸福を得る」と信じます。私としても今の喜美さんでなく、その時の喜美さんを得てこそ真の幸福だと思います。

先生の日本座経営が理想現実の一手段ならば、私の渡墨は正に同意義を持っています。先生は家庭を犠牲にして理想に向って突進せられ、私は喜美さんを犠牲として自分の向上のため渡墨せんとしています。而して富士さんは自分の仕事、あるいは理想を犠牲にして先生のためにはその家庭を、私のためには喜美さんを、各々の犠牲を生かさんがため努力しておられます。私はこれ以上、何も申しますまい。ただ富士さん以上に先生を信頼して渡墨したかったです。

先生の芸術の発展を願う心よりして、日本座の成功を祈ります。同時に先生の家庭に曙光を見出すのは、先生ご自身の力にあつて、到底、私の力では不可能なることを申し上げ、先生の理想現実と家庭復活とが速かに同時に来たらんことを切望します。

私は今、愛する喜美さんに対して、何ごともなし得ないことを恥じます。先生に対しては、托される喜美さんを（物質的援助を托されたとしても）如何いかんともなし得ないことをすまないと
思います。

乱筆でしかも暴言を吐きましたかもしれません。「海容下さい。」

私は大いにベストを尽して働きます。

先生もその主義のため堂々と男らしく御奮闘あらんことを。

若拝」

喜美子への憐憫と若鉄への憤りと、しかし若鉄の身勝手を責める資格がない今の現実に、治六は耐えるしかなかった。

福士幸次郎の手紙は離婚話の経過を報らせずに、金が足りないという報告ばかりしてくる。

「金はこちらで、今月あるのはこれだけです。」

東京毎日 七十円

函館毎日 三十円

婦人之友 三十円

計 百三十円です。このうち定まった支出は、

ピアノ 四十円

八郎さんの寄宿 二十円

お国のおじいさん 二十円

計八十円です。あとは先月の借金を幾らか穴埋めました。近々、看護婦を雇わねばならぬのではないかと考えていますが、そうするとまた、支出が膨らむでしょう。

しかしほくは先生に金を取ってもらいたくありません。先生がいろいろな田舎の新聞にまでお書きになると聞くと、顔がしかんできます。先生は休むこと、永らくの荷をおおろしなされること、それが急務です。人間は休みがないということはいいことではありません。僕は去年来、つくづくそう思いました……」

そんなことはどうだっていいんだ。今更、そんな感想を聞いたところでしようがないんだ。誰も彼も好き勝手なことをいつている。治六はそう思う。ここまできてしまった以上は前に進むしかないのだ。錯綜して糸口の見つからなくなっているこの現実をほどくためにたとえ後戻りをしたとしても、そこに幸次郎という「休み」などあるわけがないのだ。

それでも六郎の誕生から夏にかけての日々は、治六にとって戦場の兵士の休暇にも似て、完全な休養とはいえないまでも、戦闘の合間のくつろぎの時間であった。くつろぎの底には、苦痛への予感が潜んでいる。病の再発がいつかくることを覚悟している病人のように、治六はその日のくることを思っまいとしながら、心のどこかでそれを待っていたといえる。

予期していたそれは、真夏の短か夜の白々明けにやってきた。治六が徹夜仕事の机に向っていると、表の格子戸がガタンガタンと打ち鳴らされる音がして、若々しい配達夫の声が「電報……」というのが聞えた。

「キミコヤマイアツシ」

差出人の名を省いた十字に満たぬ片仮名は、その字数の少なさによって、のっぴきならぬ事態が迫っていることを告げていた。電報を二階へ持ってきたのはシナである。治六が口を切るよりも先にシナはいった。

「梅田発の一番に乗れば、夜には着きます……今すぐ出れば、一番に間に合いますわ」

治六が答えないのは、彼は早くてもその夜か、明日の夜行で上京することを考えていたからである。治六は机の上に電報を置いたままじっと腕組みをしていた。「今すぐ出れば」というシナの言葉に、治六は拘泥していたのである。

シナからそんなふうにいわれたくなかった。東京へ行けばいつ戻ってこられるかわからないのだ。出発を今日の夜か明日の夜まで延ばそうと思ったのは、シナと別れを惜しむ時間を作りたいからだ。だがシナは急いで降りて行った階段から戻ってくると、手に汽車の時刻表を持っていて、頁を繰りながらいった。

「えーとお……東海道線の上りは……」

頁を繰っているシナに、治六はいった。

「お前はぼくが早く行ってしまえばいいと思ってるのかい！」

シナはびっくりした大きな目を時刻表から上げて、治六を見据えた。

「何をいってるんですか、こんな時に……」

瞠った瞳に強い非難の色が動いた。

「喜美ちゃんが重態だという時に……」

「そっだ、喜美子は重態だ……」

治六は我慢出来ずにいった。

「重態だから、行けばいつ帰れるかわからないじゃないか。そうなれば留守中のことも元安たちによく頼んで指図しておかなくちゃならんじゃないか。第一、金のこともある」

「そんなことは心配いりません。わたしだって子供じゃない。お金くらい作れるわ」

——オレは一日だってこの女と離れていられないんだ。だがこの女は、オレがいなくても平気

だというのか……。

そう思うと忽ち喜美子の重態はどこかへけし飛んでしまった。もどかしさと失望とシナを抱きしめたいという欲望が怒りの形をとってやってきた。治六は叫んでいた。

「お前はぼくにいなくなってほしいのかい！」

シナの目の中の非難の色は、「バカバカしい」といわんばかりの露骨に呆れた色になった。

「いなくなっしてほしいとかほしくないとか、そんなことをいつている場合じゃないじゃありませんか。先生の大事な喜美ちゃんのことじゃありませんか……」

——先生の大事な喜美ちゃん？

それは何だ！ イヤミか！ 当てこすりか！ 喜美子よりお前の方が今は大事になっている。

だからこそ、犠牲に目をつむってここにこうしているんじゃないか！

この数か月の平和は一通の電報で忽ち瓦解してしまった。なぜ、行ってはいやだといわないのだ。いつもはすぐに不機嫌を顔に出すくせに、なぜ今は不機嫌にならないのだ。子供を産んで肉付のよくなった丸い肩を黒っぽい薄物で包み、汗をかいているわけでもないのに、濡れたように薄光りしている薄桃色の胸もとに団扇で風を送りながら、シナは治六を見ている。

「ねえ。早く行ってあげて下さい。みんな待ってるんですよ。でないと、わたしが困るわ……。わたしが行かせまいとして、引き止めていると思われま……」

お前には、いつだって、己れ以上に大切なものはないんだな！

失望で治六の頭はクラクラした。それがオレへの侮辱であることを、知っていつているのか、知らないでいつているのか。こんな時でもお前は何よりも先に自分がどう思われるかを考える！

「一緒に東京へ行かないか？ 久しぶりにいろんな芝居を見るのも悪くないよ」

気をとり直していった治六の言葉を、シナはまるで飛んできた灯虫をはたき落とすようにいった。

「そんなこと、出来るわけがないじゃありませんか」

シナはいった。

「本妻のところへ帰る男にくっついていくなんで……そんなみつともないこと……」

オレはみつともないことを山のようにしてきた、と治六は思った。恥知らずといわれ、罪人あつかいをされ、あいつは日本人じゃない、ダツタン人だ、マトモな人間じゃないといわれてきた。

だがそれらの汚辱を投げ返そうとせず、黙って被ることもシナへの愛の証左だと思えば、恥と感じたことは一度もない！

治六は呪縛を受けた人のように、机の前に坐ったまま身動きも出来ない。嘘でもいいから、行ってはいやだ、わたしも一緒に行きたいといってほしかった。せめて早く帰ってきて下さいね。

いつ頃お帰りになる？ というべきだ。シナがそういういさえすれば、治六は立ち上ることが出来るのである。

だがシナは何もいわずに治六の絶望をじれったそつに眺め、

「向うに着替えは残っているんでしょっ？」

といった。

一刻の後、治六は身体中にぶら下っている錘を引き摺り上げるように立ち上った。しかめ面のままシナがさし出す上布を着て袴を穿いた。

「飯は？」

「いひや」

立ったまま味噌汁をすすって玄関を出た。

「行っていらっしやい。お気をつけてね」

治六はシナを見た。門の前に立ったシナは今、大空に向って登っていく夏の朝日の、刺すように鋭い光を全身に受けている。微かな愛想笑いを唇に漂わせて、寝不足の目を眩しそうに細めて治六に向けている。

そのシナを、治六はじれったさと悲しさの混った、そのために怒っているように見える細い目をつり上げて、ものいえぬ牛のようにただ瞞めた。

治六が行ってしまうと、シナは家の中に入って、ぼんやりと座敷の柱に凭れて団扇を動かした。行ってしまった、と思った。

みぞおちのあたりが重苦しかった。治六の顛顛に浮き出た太い青筋。裁判官に向って罪人が哀訴するような目。

「すぐに帰ってくるよ」

と治六はいった。

すぐになんか帰れるわけがないのに。シナは思った。

——べつにわたしは、すぐになんか帰ってきてもらわなくてもいい……。

胸の中がムシャクシャしてきた。

——わたしはべつだん先生がいなくてもかまわないんだから……。

そう思いながら、団扇の手はいつか動きを止めて、目を庭に向けたままシナは呆然としている。

茗荷谷へ行く治六の気持が、どんなに辛いものだとしても。治六は「本宅」へ帰ったのだ。

「本宅」は彼を呼ぶ権利がある。そして呼ばれば、彼は行くのだ。

それを不快に思う資格はシナにはなかった。シナはそれを知っている。資格がない以上、不機嫌を顔に出すのはシナの誇が許さなかった。追い立てるようにして治六を出してやったのはそのためだ。だが治六がいなくなった家の中は、大きな穴が開いたようだった。

「先生がいはらへんと、やっぱり寂しいねえ。灯が消えたようや」

と民子がいった。

治六の独占欲の強さ、シナの一喜一憂を窺う目の煩わしさ、自由の束縛、干渉癖、心配性。そんなものから解放されたら、どんなにせいせいするかと思っていたのに、今、そうってみると置き去りにされたような怨みがまじさがシナを蔽っているのである。

——先生は行った。「オレは行かないよ」とはいわなかった……。

シナは自分が追いつけるようにしたことを忘れて、そう思った。

——なんのканの、うまいことばかりいいながら、やっぱり、行ったやないの！

いつの間にか治六はシナの中に大きな座を占めていたのだ。それが夢というものなのか、執着というものなのか、シナにはわからなかった。何に対してかはわからないままに憤ろしさが胸に

悶^{つか}えていた。

うつらうつらしながら、どこか遠くで父さんが怒鳴る声を聞いたような気がした。夢か？と

思ってもう一度眠ろうとしたら、どしんどしんと足音がしたので、跳ね起きた。

父さんが帰ってきたのだ！

走って行って、

「父さん、お帰り」

といった。喜美子姉さんの病室へ入ろうとしていた父さんはジロリと八郎を見て、

「今何時だと思ってるんだ」

と怒った。

父さんの細い目はつり上がって、白目が真赤だった。

「夜行で眠れなかったんだよ」

弁解するように伯母さんがいった。

「大魔王の目だ!」

と八郎はいった。父さんは何かいふかと思っただが、無視して喜美子姉さんの部屋へ入ってしまった。

チャカは、「父さんの土産はどいだい」といい廻っている。

「そんなもの、ないよ」

伯母さんがつつけんどんに答えていた。

この頃、伯母さんは気が立っている。看護婦の由利さんが気が利かなから、何でもかでも伯母さんの肩に懸かってくるのだそっだ。由利さんは痩せて色が白く白サギみみたいな美人だ。由利さん、オッパイさわらせてくれよ、と頼んだら、あっさりさわらせてくれた。八郎は由利さんの膝に跨ってオッパイを吸った。由利さんはいやがらずにいつまでも吸わせてくれる。その間、怒ったように黙りこくっている。

「由利さん、いいキモチかい?」

と訊いたが、黙っている。由利さんのオッパイはやわらかくて、いくらかフナフナしている。

由利さんは黙ったまま、だんだん強く八郎を抱きしめてくるので八郎の鼻孔はフナフナオツパイに押しつけられて窒息しそうになってくる。

由利さんは美人ですましていて、「冷たい人ふだ」と伯母さんはいつている。

父さんが帰ってきたら、母さんは急に仏頂面になった。久しぶりに帰ってきた時にあんな顔してるのがだいたいいけないのだ、と伯母さんはいつている。

「母さん、父さんが帰ってきて嬉しくないのかい？」

といったが母さんは何もいわなかった。「面白くないので、

「金くれよ」

というと黙って五十銭くれた。夜になってまた「金おくれ」といったら二十銭くれた。どうして「昼間あげたじゃないの」といわないんだ。「何に使うの？」と訊かないんだ。

チャカに、

「母さんに金くれっていつてみる」

と教えた。

チャカは十銭もらったといつていた。

「オレは昼間は五十銭、夜は二十銭もらったぞ」といつたら、

「兄ちゃんは長男だもんな」

とチャカはいつた。

父さんは喜美子姉さんの部屋に寝起きしている。

「喜美子姉さんがのう死ぬからかい」

といたら、伯母さんにぶたれた。

一日に何度も父さんは「おい、郵便はまだか」という。郵便は朝の十時頃に一度と午後三時の二度しかこない。午前中のがさっききたから、あとは三時までできませんとハンを押すように、愛想も何もなく伯母さんが答えている。なのに、

「おい、八郎、郵便を見てこい」

と父さんという。

「来てなかったよ、父さん」

見に行くフリだけして行ってやった。

しまいに父さんは自分で郵便受を見にいっている。

「お百度まいり」

と岡田のボヤテキがいった。父さんは毎日、あの女に手紙を書く。一日に二通も三通も書く。

それを岡田のボヤテキが、「まただよー」といいながら速達にしに行く。

八郎はチャカと喧嘩をした。それで父さんに殴られた。父さんは廊下の向うかた足早につかつかと歩いてきて、ものもいわずに八郎を殴った。父さんは勝手だ。女が手紙をよこさないからといて、子供に八つ当たりなんかしてほしくない。

「うるさくするんじゃない。少しは喜美子姉さんのことを考えろ」

と父さんはいった。

自分こそ、喜美子姉さんのことを考えろよ。

喜美子姉さんは死ぬんだ。

みんなそっぴっている。

「あととは時間の問題だね」とか、「思ったよりもつねえ」とか。

喜美子姉さんは死ぬ。今に死ぬ。この家にいなくなってしまう。喜美子姉さんの部屋は空っぽになる。

空っぽに。そう思うと、わーッと叫んで駆け出して、どこか遠くへ逃げていってしまいたくなる。だが遠くへ逃げていっても、どこまで行っても死ぬものは死ぬ。

「誰だっていつかは死ぬんだよ。どんなえらい人だってね」

伯母さんはいった。平気でそういうのがたまらない。どうして平気でいられるんだ。

「どんなにえらい人も」と伯母さんはいった。えらい人、正直な人、立派な人は死なないというのなら、それなりのやり方というものがあるんだけれども。

ああ、どうして人間は死ぬだろう。

どうせ死ぬのなら、なにも生まれてくることはないじゃないか。

チャカはバカだからいった。

「だって死ななきゃ、地球は人でイッパイになって、ハミ出して、こぼれ落ちてしまっじゃないか」

あんな奴は相手にならない。何の相談も出来ない弟なんていない方がマシだ。

ああ、人はなぜ死ぬ。死んだらどうなる。

土に埋められて、それからどうなるんだ！

「天皇陛下でも死ぬんだぞ」

バカのチャカはへんにえらそつに、物識り顔にいった。

「それがどうした。うるせえー！」

と行って、いきなり殴ってやった。

天皇陛下でも死ぬ！

八郎は徹底的に打ちのめされた。

「わーん」とチャカは泣きながら台所へ行って、伯母さんになにやらいつけている。

死んでいく喜美子姉さんのことを思うと涙が溢れてきた。手の甲で拭くと、どっと涙が湧き出てきて、胸が痙攣してきて嗚咽おえっが洩れた。階段のかけの、へこみのところへ入って、壁に顔を当てて泣いた。喜美子姉さんにした悪いことばかりが次々に思い出されてくる。喜美子姉さんにされたイジワルを思い出そうとしても、何も思い出せない。

やっと涙が止ったので風呂場へ行って顔を洗って出てくると、チャカがおこげのおむすびを食べながら、廊下を歩いていた。

七

家中で一番涼しい部屋を充てているのだが、それでも喜美子の病室は暑かった。部屋と部屋が奥に向って重なり合っようにつづいているこの家では、風通しのいい部屋といえば二階しかない。二階は上り降りが大変だというので、喜美子は庭に向いた八畳に寝かされている。そこは南と西が開いているのでいくらか風は入るが、西日もよく入る。午後になると病室は息詰るような暑さに晒ひされ、雨の日は雨の日で薬と熱と汗の臭いが畳や襖や天井までむっと染みついて、もう永久に抜けることはないかと思わせられる。

午後になると誰もこの部屋に一時間とられない。ハルはここへくると頭痛が始まった。看護婦の由利は何かと口実を設けて席を立っていく。だがその臭いは喜美子が生きつつづけている印だったから、浴六はその部屋に入ったまま、食事のほかは殆ど部屋を出なかった。夜も喜美子の傍に寝た。

「お父さん……そこにいて？」

喜美子は時々、そういつて浴六がいることを確かめる。

「安心おし。父さんはいるよ」

「お父さんがいてくれると、心強いわ」

と喜美子はいった。微笑したつもりだろうが、それが泣き顔に見えるほどの曇れようだった。「父さんに似たんだねえ。黒くて真直で、なんていい髪だろう」とそれが口癖のように伯母さんが褒めている濃い髪が、病み疲れて小さく白茶けてしまった顔を包んでいる。毛髪だけが生々しく生気を帯びていて、枕の外に束ねられてくるぐると流れ落ちているさまは、まるで喜美子の生気はその黒髪に吸い取られているのではないかと思わせるほどだ。

「お父さん、鉄若さんはメキシコへ行ってしまったのよ」

「そうらしいね。だがじきに帰ってくるんだろう」

「当分帰ってこないわ」

喜美子は眩くようにいつ。

「鉄若さんは正直だから……何でもはっきりいう人よ。向うへ行ったらいつ帰るかわからないって……お父さんが坐ってるそこに坐って……最後にお別れをいいに来た時よ。ぼくは駄目な男だっつていつて……兵隊に取られるのがいやで、メキシコへ逃げるんですって……」

微かに目と唇を歪めて笑うのが苦悶の顔に見える。

「だから弱虫なっついていってあげた……」

「なに、そのうち帰ってくるさ。メキシコへ行けば行ったで、面白くないことがあればすぐ、日本へ帰りたくなるよ」

「そっかしら……」

「そっつい男だよ、彼は。その頃は喜美ちゃんもよくなってるよ、きっと。この夏を越えればね。秋風が吹いてきたら元気になるよ。それまでの辛抱だ」

「そっね」

喜美子は素直に頷いた。子供の頃から喜美子は父のいうことは何でも正しいと思っている。

「よくなってるわね。秋には」

「よくなってるよ」

憐れさで胸がはり裂けそうなのを^{こら}えて頷いた。

「さつきね、夢を見てたの。ほら、音羽の、どぶ川に木橋がかかってたでしょう。あすこを走ってるの。子供に戻って……。うちの前の掘めき井戸のそばにしたら柳があったでしょう。あれが遠くに見えてるのよ。……目が醒めたら、懐かしくて……。胸がいっぱいになるほど懐かしくて……。もう一度あの家を見たいわ……」

貧乏のどん底だった音羽九丁目の棟割長屋。

「たべろや、たべろや」と近所の子供らが飴売りの声色で騒いでいた初夏の夕暮。

「お父さんよくシャチホコ立ちをしたわねえ。それから冬と夏の帽子をかぶって、厩屋の平さんの真似が上手だったわ」

「ああ」

仕方なく治六は笑う。豆腐を買う金もないような暮りだったから、飴売りが来ても飴を買ってやれなかった。飴売りが長屋の露地を廻って出て行くまで、何かして喜美子と八郎の気を紛らせなければならなかったのだ。

「八郎と二人でお父さんのお馬に乗ったわ。お父さんはひどく駆け廻るものだから、八郎はすぐふり落とされたのね」

「よく憶えてるね」

治六はそういうしかない。右と左の色の違うベッテンの足袋に、つんつるてんの紺の着物。寒そうな膝小僧。羨ましそくに隣りの子が飴をしゃぶる口もとを見ていた喜美子。ハルから買った焦げ飯のおむすびを半分、八郎に分けていた喜美子。

だがその代り荏苒谷へ来てからは不自由をさせぬばかりか、贅沢三昧を許してきたつもりだった。子供たちの誰よりも喜美子を愛してきた。女中や書生に困まれて、茶碗ひとつ洗ったことのないお嬢さま暮らしをさせた。女学校へも行かせた。風邪をひいたといえば人力俵で学校の送り迎えをさせた。ピアノも買った。外国のオペラにも行かせた。声楽がやりたいといえば、柳兼子に弟子入りもさせた。男の子は叱っても喜美子を叱ったことは一度もない。

いくらそう思っても治六の胸には喜美子に幸福を与えてやれなかったという呵責の傷口に血が滲んでくる。喜美子に涙を見せまいとして顔を庭に向け、治六は思った。神がもし喜美子の命と引き替えにお前の命を貰おうかといわれたなら、喜んで命をさし出すだろう。この気持に微塵も誇張はない。オレは四十三年の年月を十分に生きた。いいことをいい、したいことをしてきた。命は惜しくない。喜美子のためならいつ死んでもかまわない……。

長い夏の炎天が漸く翳りを見せはじめ、手入を怠ったまま鬱蒼と盛り上った樹々の上に赤い夕焼雲が一筋流れて、こゝろ 蝸が啼いている。

突然、シナの姿が浮かんだ。蝸の啼声がああ小さな庭を思い出させたのだ。今頃シナは彼女の好きな白縮みの浴衣を着て、座敷の柱に凭れて（そこがシナは気に入っている）庭に顔を向けて団扇を使っているのだろう。

その姿が蘇ってくるのと同時に、激情が身体を貫いた。

——手紙が来ない——なぜだ！

茗荷谷へ来て四日目だった。その間に浴六の出した手紙は六通だ。だがシナからは何もいってこない。元安や日疋からの手紙が「三笠さんも元気にしています」といっているだけだ。

シナは何を考えているのか。出した六通の手紙のうち三通は速達だった。三通目の手紙からは返事をくれ、そちらの様子を知らせてくれと繰り返し頼んでいる。

シナの真意がわかりかねた。怒っているのか、拗ねているのか、ただ単に筆不精なだけか、冷淡のためか。それとも……と思う。心臓がキュウツと収縮して息が詰りそうになる。

——逃げる気ではないのか？

無我夢中で立ち上ると、部屋の隅の小机の前に坐っていた。上に載せた茶道具を押しやっけて、原稿用紙を広げ、いきなり書き出した。

「万理さんのいない一日がこんなに長く、こんなに苦しいものだとは知らなかった。僕の手紙は届きましたか？ 手紙を見たらすぐに返事を書いてくれ。一日中、喜美子の枕許に坐りながら、考えるのは万理さんのことばかりだ。今日はおハルに離婚問題を切り出した。こちらにいらる間にその決着をつけて、それを土産に帰りたいと思っている。

東京は暑すぎに激しい夕立が降った。住吉は暑いだろうね。六郎は変りはないか。寝冷えさせぬように注意しなくてはいけないよ」

出来るだけ穏やかに書こうと努力した。返事の来ないことを難詰したり、怨みがましく書いたりに却ってシナの機嫌を「じらしてはならない。最後に「愛する妻へ」と書いた。たとえ戸籍上はどつであるうとも、お前はぼくの妻だ、誰が何といおうと、どんなことがあっても。どうかその自覚を持ってくれという気持ちを籠めている。

しかし翌日も一日待って手紙が来ないと、不安が空想を呼んで治六は頭が狂いそうになる。気もそぞろに小机の前に坐って書いた。

「万理さん。

別れてもう五日になる。その五日がぼくには業火に焼かれる百年に思える。

どうして手紙をくれないのだ。ぼくの最初の手紙が着いた時に返事を書いてくれれば、遅くとも一昨日には受け取ることが出来ると思っていた。それなのにどうしたというのだ。手紙は昨日も来ない。今日も来ぬ。万理さんにはぼくがどんな苦痛の中で我慢しているかがわからないのか。君からの手紙だけがぼくを苦しみから救うものだということがどうしてわからないのだ」

優しい愛情に満ちた言葉など、もう求めてはいなかった。「お元気ですか」の一言でいい。シナの心から治六が閉め出されてはいないという確証さえあれば、こんなに不安に苛まれることもないのである。治六は自分をなだめるために日記を書いた。

「八月三日

手紙来らず。憂鬱。

朝飯前に『孔雀草』を書こうと思ったが、『孔雀草』を書かずして手紙を書いた。

元安より葉書。一日の日附なるが、消印は二日の午後八時とあり。書いてすぐ投函せぬは訝し。

男は終生女に苦しめられるものか。

大阪へ行くこうと思う。福士に止めらる。

電報を打つ。

喜美子朝飯なし。昼に粥二碗。

元安、日足、松本に手紙書く」

「八月四日

目ざむれば暁色満つ。喜美子倦怠を訴う。頬と額に接吻してやれば、彼女涙を流す。

おハル昨日より下痢。仰臥せるがため、看護するものなし。看護婦は化粧ばかりして用をなさず。

喜美子吐気に苦しむ。

余は疲労の兆あり。余を疲らすものは恋なり。

それでも『孔雀草』三回書く。

手紙来ず。手紙書く。

電報を打たず。

夜、庭に出て福士と生活を議す。月明かなり。

何ことも不徹底はいけない」

元安から来た速達には、シナが手紙を書かない理由をこう書いていた。

「『本妻さんのところへ行っている人に、手紙を出すなんて、そんなみっともないことは出来ない』と三笠さんはいっています。」

三笠さんはそちらの奥さんに遠慮しているものと思えます。しかし、ぼくや日疋さんたちで、そんなことよりも先生のお気持ちに添うことが一番であることを申しましたので、明日には三笠さんも手紙を書くものと思います」

それでも手紙は来なかったので、治六は電報を打った。

「デガミマツ コウロク」

夜が明けるのを待って次を打った。

「ナゼデガミヲカカヌカ ワケヲシラセヨ」

その後間もなく大阪から電報が来た。

「デガミカイタ スグオクル」

手紙が着いたのは翌日である。治六は興奮に慄えながら封を切った。

「毎日お暑うございますが、そちらの皆さまはお障りございませんか。喜美子さんのご病状は一進一退のこと、この暑さでは健康な者でも病気になるいそうなので、長いご病人は本当にこたえると思います。食欲がないとか、心配ですが、お父様がそばについておられるので、すから喜美子さんもお心丈夫でしょう……。」

真情の籠らぬよそよそしい手紙だった。しかしそれでも治六はくり返しくり返しそれを読んだ。

「八月六日」

夜十二時 手紙来る。心境寂然」

と彼は日記に書いた。

「万理さん

東京に来てから漸く今日、はじめて飯をうまいと思った。今夜はよく眠れるだろう。万理さんの手紙は赤児における乳の如きものだ。かくばかり僕を力つけてくれるものはない。秋になったら『孔雀草』をもって大阪で公演しよう。僕は毎日そのことを空想している。空想のために小説がはかどらぬくらいだ……」

「孔雀草」には二人の女が登場している。一人は女優の国子で、もう一人は成金の百貨店王が小間使いに産ませた娘小枝子^{さえこ}である。シナの役は国子か小枝子か。国子は奔放に恋を獲得して滅びていく女、小枝子は逆境の中でも美しい心を失わずに健気に生きる娘である。治六はシナに小枝子をやらせたいが、シナは国子をやりたがっている。

「もう偶像は沢山。先生の主人公は現実味がなくて、やっても面白くないんです」

とシナはいっていた。

「先生はどうしてあんな偶像を書くんですか？ あんな人間、実際にはいないのに」

シナは現実主義者だ。二度目には「それは理想にすぎないわ」とか「そんなの夢やわ」「そんな人間、ウソですよ」で片付けてしまう。美しく清らかで、正しく優しく純粋な人間——そんな人間は現実にはないとシナがいうのはその通りである。だが治六はずっとそういう人間に強い憧れを抱いてきた。自分はまだにも粗野で醜悪で濁っている人間だと反省するにつけても、純粹で無欲な人間に憧れずにはいられない。だからこそ小説の中でそうした人間を創造せずにはいられない。彼には自分の醜い情念と闘い、それを克服しようと苦しんだ時代がある。釈宗演^{しやくそうえん}を訪

ねて鎌倉で参禅したが何の悟りも得ず、一番町教会へ牧師植村正久まきむらを頼ったこともあった。その頃、一晚に一升の酒を飲んでいた彼は、その時から禁酒し、野心を捨てて二十円の月給で福音新報の編集をした。しかし、キリスト教は彼には窮屈すぎた。どこへ行っても、何をしても彼は自分を矯めることが出来ず、情景だけを痼疾のように身体の奥深くに抱えてきたのだ。

治六の書く聖女のような自己犠牲の女は確かに現実にはいない。だがないからこそ、治六は書くのだった。理想を書くのが何がいけない、と治六は思っていた。少くともそれを書いている時だけは治六は救われているのだったから。そう書くことが彼には必要だったのだ。

喜美子の病状は一進一退のまま、じりじりと日が経っていった。腹が膨張し、痰が喉頭からむ。ハルは下痢が治らず床に就いたままだった。床ずれには粟の布団がいいと聞いてすぐに粟の布団を作らせ、もう二度と起きて部屋を出ることもあるまいと推量して、病室を風通しのいい二階に移した。そしてその枕許で治六はシナに手書きを書き、返事を待ちつつづけた。

「八月十二日

喜美子は八月を過ぎれば治ります、ねえ、お父さんといった時、余の胸はつぶれた。余は万里子のため、我が子の死早かれと祈れり。

これ人道に反する心か。

喜美子の布団を替える。抱いてやる。これが最後の抱擁なり。骨だらけの熱のある手が余の首筋にかかれり。余は眩暈を感じる故に二階を下る」

治六の地獄につき合っているのは幸次郎一人だった。

「田川（大吉郎）氏は先生と三笠さんのことを認めています。それはやむをえぬことだといわれています。道徳にも愛の道にも反したものではありません。個人生活の要求であると。だから認めなければ

ばならないと……」

幸次郎はそういった。だが田川大吉郎が認めるといったとしても、治六の地獄は変わらない。

「人間というものは自分でどうすることも出来ないものを抱えているものです。それに逆らえばその人が滅びてしまう」

幸次郎は真情を籠めていった。

「福士には先生の心がよくよくわかっております。今、先生は赤裸です。もとは曖昧でした。色恋に時代は特に曖昧でした。そこから愛の時代に入り、今は生命の時代です。三笠さんに対する心は、愛よりも更に進んで生命に入っているんです……」

そんな解説に何の意味があるんだ、と思いながら、治六は幸次郎の言葉に慰撫される。

「この世には愛を知らずに生涯を終る人がいます。そういう人は不幸です。たとえ苦しむとも愛を知った人生は幸福です。福士はそう思います」

幸次郎はいった。

「確かに三笠さんは我儘です。しかし、あの人は純粹です」

治六の苦悶はその一言で和らぐのだった。

八郎とチャカは夏休みの間、三浦三崎へ行くことになった。

三浦三崎にノロセの友達のゴンドウという人が釣宿をしている。そこへ行くのだ。

ゴンドウさんの家の裏の畑には西瓜やまくわ瓜がゴロゴロしていて、食べ放題だ、とノロセはいった。

それをゴンドウさんは包丁を使わず、ゲンコツでバカツと割って食うのだそうだ。

「西瓜はゲンコツ割りに限る」

ノロセはまるで自分がゲンコツ割りの名人のような顔をした。

麦藁帽をかぶったノロセに連れられて、八郎とチャカは門を出た。父さんは門のところまで見送りに出て、（そんなことは八郎が生れてからはじめてのことだ）

「あんまりゴンドウさんに手を焼かせるんじゃないぞ」

と一円ずつくれた。

少し歩いてふり返ると、父さんは炎天の下に、くたびれた浴衣を着て立っていた。八郎の方を見ずに、道の遠くへ目をやっていた。

——郵便屋を待っているんだ……。

直感的に八郎はそう思った。

「行ってまいります……」

「行ってまいります……」

八郎とチャカはかわるがわる手を上げて叫んだ。

「おっ」

と父さんはいった。目は八郎と節の頭を越えて、まだ道の遠くを見ていた。父さんは上の空だった。

医師は喜美子の命はあと一週間だといった。

——あと一週間！

冷六は思った。

——とうとう、あと一週間になったのか。

冷六はその日を怖れながら待っていた。怖れる心よりも待つ心の方がだんだん強くなっていて、どうせ死ぬのなら早く死んでくれればいいと思いついたことが蘇ってきた。どっと冷汗が噴き出した。父から与えられた不幸を背負ったまま、喜美子はこの世からいなくなってしまつ。喜美子の不幸を補う時間はもうないのだ。

動こうとしても身体がいうことをきかなかった。女のように涙を出せば硬直が取れたかもしれないが、声も涙も出なかった。凝然と立ったまま、「では」と行って去っていく医師の後ろ姿を見詰めていった。

——あと一週間。

今日が何日だったか、思い出せなかった。とにかくあと一週間だ。その一週間の間に、冷六がしなければならぬことがある筈だった。だがそれが何かがわからない。わかっていることは、一週間では間に合わないということだった。

——もう間に合わない。何も取り返しをつけることが出来ない……。

いても立ってもいられない。しかしその焦燥感の底に、薄ぼんやりした光が生れ、それが少しずつ広がっていくのを感じた。

——あと一週間。

それは冷六がシナを抱ける日だった。彼の解放を約束している日にちである。絶望と希望とが強い力でぶつかり合った。頭の中でガンと音がした。目が見えなくなった。彼は廊下の曲り角に

卒倒した。

幸次郎に介抱され、布団に寝かされた治六は短い夢を見た。

芝居が始まるというので、シナの草履を買いに行っている。草履屋にはねじ鼻緒がない。草履屋は鼻の尖った細目の中年男で、にべもなく「おまへん」という。仕方なく他の草履に決めようとしている時、目が醒めた。それほどの悪夢でもないのに、憂鬱が身体を押えつけていた。

——草履屋はオレを嫌っていた……。

天井を向いたまま治六は思った。あの目はオレを憎んでいる目だった。ねじ鼻緒の草履はあるのに、わざと売らない——それを告げている目だった。その目には彼一人を除くすべての人の目が凝縮されていた。

起き上ると部屋いっぱい西日が射し込んでいた。全身汗にまみれている。アブラ蟬が啼いていた。つくつく法師も啼いていた。蝉の鳴声の他は何の音も聞えない。

「ああ……」

治六は絞り出すような声を上げた。孤独がわっと襲ってきた。

「どうすればいいんだ、どうすればいいんだ、誰か教えてくれ……」

すべての不幸の根源は治六にあった。彼はそれを知っていた。だが彼の身体中に渦巻き沸騰するマグマ。抑制を撥ね退けて奔流してしまう欲望の力は、まるで魔性の者たちが取り憑いて彼を狂奔させるかのような力は、どこからくるのか。彼はそれに抵抗することが出来ず、無力な幼な子のように引きずられるばかりである。

——私のような男を、なぜ神は創られたのですか？　なぜ私はこんなに人を苦しめ、自分も苦しまなければならぬのですか。私の生きている意味は何ですか？

その神がどんな神かは知らぬままに治六は手を合せ、指を組んで頭を垂れていた。

——私にだって、正義を愛する心はあるのです。清らかで純粋な魂に憧れる気持は人一倍あるのです。けれども私が生きようとする時、それらはどこかへ消えてしまいます。自分で自分をどうすることも出来なくなります。どうか、私から私が生きようとする情熱を奪って下さい。才能も名声も金も何もいららない。死ぬことが許されないのならば、どうか私を溷らせて下さい……。

治六は懇願した。神は彼の死ではなく、喜美子の死をもって彼を罰しようとしているのだった。

——これは私の責任ですか？ 私を動かす力はどこからくるのですか？ なぜあなたは、どんな意味があつて、私を、このように創ったのだ……。

祈りは怒りに変わっていき、治六はいっそ命を絶って、自分を創った存在に刃向おうかと考え、その不遜を反省して神に赦しを乞う。

だがその翌日には治六は憤怒に狂って日記を書きなぐっていた。

「彼らは余が築き上げたるまじめな城を破壊せり。

彼らは余の空巢を覗いて、余の神聖なる宝を汚せり。

彼らは余の苦境に同情する念一点だもなし。

彼らは余の妻に対する礼儀なし。

彼らが俗悪卑猥なる談話に涎を流しつつある時、余は遠く離れていかに『孔雀草』を脚色せんか、いかに月末の諸払いをすまさんか、いかに座員の小遣いを得んかに苦しみつつあるなり。喜美子の呻吟を聞きながら、墓地の狭きを思い、火葬にせんかなどと思う。

大阪を出てより二週間、されど半年、牢獄にあるのを思いあり。

憤恨。絶望。元安、日疋、妻に手紙を出す」

大阪からの座員の手紙に、望月という女優が遊びに来て、毎晩、猥談をして騒いでいる、「猥談の巧拙は芸の巧拙にも繋るものか存じ候」とあったのが憤激のもとである。

怒りの余り冷六はシナに宛てて書いた手紙を引き裂いた。

「妻には手紙を出さぬことに決す。『先生一流の文句』として読み流しにされるのでは余が大切な時間を割いて書く手紙は反古ほんじに等し」

書き終えて彼は卒倒し、人々の介抱で生気づいてから書き足した。

「自己を反省せよと余の心は叫べり。人を怨むなかれ、人に叛かるるは自己が足らざるためなり。

割然として悟る。余はまじめに主張すれども、余の行動力は座員を感化する力なきなり。余は妻を教育することさえ出来ず。況んや座員をや。

彼らは余に同情なし。その筈なり、妻すら余に同情なきにあらずや。

彼らは余を尊敬せず。その筈なり妻すら余を尊敬せず。

彼らは妻に対して礼を知らず。その筈なり妻それ自身が野卑を喜ぶ傾向あるなり。それを感化せざるは余の罪なり。

大革命、大教育、新生活。余は妻と共に並行して自己を反省し、一座の長たる品位を作らざるべからず。元安へ詫びの手紙を送る」

反省を経て、静かな気持で冷六は夜を迎えた。喜美子の枕許でハルと一緒に夕食をとった後、彼はハルに話しかけた。彼はハルに対してどれだけの同情と呵責を持っているか、しかしそれは心にあるばかりで表現が下手だったことを述べてハルに謝った。喜美子の枕許で話したのは、その真面目な気持を喜美子に知ってもらいたかったためである。自分は自分なりに苦しみ努力したつもりだ。だがどう考えても同情はあくあでも同情であって、愛ではない……。

聞いているハルの突き出た頬骨の奥の、鶏のような目に次第に力が籠ってきて、突然上ずったソプラノが響いた。

「努力してきたって……どんな努力なの？」

「ぼくはぼくなりの努力をしたつもりだよ。しかし力及ばずこうなってしまったからには、せめておハルがこの後、今の、こんな暮しよりは幸せだと思おうような生活に入ってもらいたいと考えて……」

慄えるソプラノが遮った。

「あなたはお芝居を書く人だから、ものをいうことはお上手よ。心にないことでもあるようにいうのはお手のものだといっていた人がいます。誰かはいわないけれど……。あたしはそれに皆さん欺されてきたからもう欺されやしないわ。欺されないようになさって、三笠さんにもいつてあげたいくらい……」

治六は思わずハルを打とうとして腰を浮かし、渾身の力で思い止まった。そこは喜美子の枕許だった。ハルは思いつく限りの罵言ばげんを治六に向けて投げつけた。

「黙れ」

弱々しく治六はいった。

「黙れ、黙れ……向うへ行ってくれ。行け！」

これ以上、ハルと憎み合いたくなかった。ハルに許されて別れたいと思うのは身勝手というものだったかもしれない。だがハルの心に憎しみを残したまま別れなくなかった。それは自分のためではない、この後のハルの心の平和のためだ。

その時喜美子は閉じていた目を開いて一言いった。

「母さんが悪いわ」

ハルを階下へ追いやった後、彼は眠れぬままに書き足した。

「喜美子は余を諒解せり。」

福士は床に俯伏うつぶしになり顔を上げず。加藤はうしろを向いている。姉は長大息す。

ああ、あの女は曾かて余の妻たりしなり。

余は二十五年間の辛抱強きに今更驚く。

余の苦悶は妻の心を動揺させまいために、いかに余が苦しみつつあるかを語るあたこと能わざるにあり。

余の苦悶は妻が余の家庭のため、自らを潔くするために余の手を逃れはせずやと危あぶむにあり。妻に向って苦悶を語る能わざるものは不幸なるかな。

金、家庭、劇団、恋、余の苦しみは今、絶頂に達す」

二日後、追いつちのようにシナの手紙が来た。一読して彼は卒倒した。シナの手紙には「お手紙に妻と書くのはやめて下さい」とあったのだ。終りに冷たく「佐藤紅緑殿」と書かれていた。

「これを見ろ、これを！」

治六は何もかも忘れて幸次郎に手紙を投げつけて叫んだ。

「すぐ大阪へ行く！ 俤おを呼んでくれ」

それでも「孔雀草」を一回分だけでも書かなければならなかったから、彼は机に向った。二、三行書いて再び卒倒した。

気がつくくと幸次郎と加藤とそわがまわりを取り囲んでいた。治六は声を上げて泣いた。幸次郎は治六の頭を膝に抱えて泣いた。加藤も声を出して泣いた。

「ぼくは、もう何もいえません。先生は本当に真面目になったんだから、真剣なんだから、もう、何もいえません」

幸次郎はいった。

「三笠さんはどうして先生をこんなにしてしまったんでしょう……」

八月十五日、治六は幸次郎に見送られて大阪へ向った。喜美子はもう四、五日はもつだろう、といいわけがましくいうと、幸次郎は苦渋を肩に刻んだまま、「大丈夫です」と祈るように答えた。

何ものをもってしても、もはやシナを一目見たいと思う治六の欲望を抑えることは出来なかった。幸次郎はそれを知ったのである。

三日間シナのもとにいて、治六は茗荷谷に戻ってきた。

「八月十八日

十二時、東京駅着。元安同行。

喜美子、見違えるほど衰弱。

牛込の兄を訪う。兄に逐一を語る。

兄、やむを得ざる」と認め、離婚に賛成。

尚、密蔵兄と相談して善後策を講ずべしといふ。

妻へ手紙」

「八月十九日

喜美子睡眠多し。

『孔雀草』一回半にて眩暈。冷やす。

三時また書きつづける。

神村医師、一両日に迫るといふ。

喜美子を抱えて枕を替えてやる。

また眩暈す。冷やす」

三日後、喜美子は死んだ。

ノロセが迎えに来たので、八郎は東京へ帰った。

喜美子姉さんはいなかった。喜美子姉さんは死んだ。

八郎とチャカがいると厄介を起すから、いないうちに葬式をすませたのだ、とノロセがいった。

喜美子姉さんの寝ていた部屋へ行くと、ガラーンと片付いていた。唐紙が外され、南風が気持

よく流れ込んでいた。とても明るかった。

母さんは布団を敷いて寝ていた。いつ覗いても向うを向いて寝ている。

父さんは忙しそうに、大きな下駄を鳴らして出て行ったり帰ってきたりしている。

福士さんもノロセも忙しそうだ。

おそわ伯母さんもタスキがけをして一日中、働いている。

そのうちこの家から、みんななくなるのだとノロセがいった。

母さんとチャカとキュウは新しい家へ行く。その家は台町にあつて、とても小さい家らしい。

ワタルは西宮の密蔵みつぞう伯父さんのところに預けられる。

八郎は早稲田中学の寄宿舎に入る。

父さんや母さんや福士さんや牛込の伯父さんや、西宮の伯父さんたち、みんなでそう決めたのだ。だが八郎は学校なんか行く気はないよ、と思つている。

父さんはあの女のところへ行く。

ワタルは何も知らないで、相変わらずメエメエ泣いている。

キュウはギヤアギヤア泣いている。これでもか、これでもか、と泣いているのに、誰も相手にしないものだから、根負けしたように泣き寝入りしているのを見ると、可哀そうに、あんまり可哀そうだから虐めたくなくなる。

チャカはバカだから、新しい家へ行くというので興奮してはしゃいでいる。誰かがいつているのを聞き齧つたのだろう。ホーカイだ、ホーカイだ、と叫んでいる。

ホーカイは崩壊と書く。大言海を調べなくても、それくらい八郎はわかる。

第二章 崩壊の始まり

一

大正七年の正月を、佐藤家の家族は文字通りチリヂリバラバラに迎えた。

十五歳の八郎は父に勘当され、福士幸次郎につき添われて小笠原諸島の父島へ行った。五歳の

弥わたるは兵庫真鳴尾村なるおの密蔵伯父に預けられた。十三歳の節たかしと二つになった久の二人が、母ハルと共に

茗荷谷から小石川台町の借家へ引越したが、節が元日を過ぎたのは野呂瀬のろせ芳雄の家である。そして彼らの父六は三笠万里子と日本座を率いて、十年ぶりという大雪の福井にいた。

ハルが引越したばかりの小石川台町の借家はたった四間しかなかった。茗荷谷の屋敷の四分の一にも満たぬ平屋である。それでもそわが郷里へ帰ってからは、ハルは二歳の久の面倒を見かねて、千葉から来た十六になるふみという小娘を置いていた。

「松の内には随分年賀のお客もおいでになりますから、親戚同士とか或はごく懇意のお客様方

に家人のつくしとして喜びのひとさしを舞うのもまた時にとって一興でしょう」

ハルは読売新聞の婦人家庭欄に出ている節弥子という署名入りの記事に目を走らせ、二年前の正月を思い出すと大きな溜息が出てくる。

「私共ではよく初春の宴に私が長唄を歌って娘が舞いましたり、男の子たちがピアノを弾いて娘が舞ったりいたして、一同楽しく時を過しますが、新しい香りの漂うなかに、ゆったりとした三味や唄の声をたてながら年の初めを送るということは、まことに何ともいえぬ幸福な感じに打たれるのでございます」

佐藤家の正月はそんな優雅なものではなかったが、それでも三が日は年賀の客が次々に訪れて、家の中は陽気な会話や笑い声で沸き返っていたものだ。喜美子も健在で、その二人の娘たちとかるたや福笑いに笑い興じ、ピアノを弾いたり歌ったりしていた。その賑やかさの上に八郎と節が喧嘩して走り回る騒動が加わって、その時はただうるさい、忙しい、ああ、静かなところへ入りたいとひたすら思うばかりだったが、こうなってみるとあの時が一番幸せな正月だったことがわかる。今年は正月がくるということで仕方なくお義理のように用意した鏡餅があるだけで、喜美子の喪が明けぬという口実で門松もしめ飾りもない。暮も正月も同じ、うす暗く湿っぽい寒い一日が暮れては明けている。

「ハッチャンはどうしているんでしょう」

ハルは野呂瀬の顔を見ると同じことを訊くのが癖になった。それから、

「チャカチャンはどうしてこう落ちつかないんでしょう」

と訊く。

「弥はおとなしくしているかしら」

昨日いったばかりだが、またいう。

野呂瀬はこの家を訪ねる数少い訪問客の一人だが、それは洽六から頼まれているからで、それ
にここへ来れば安酒ながら二合ばかりにありつけるためである。

「まったく……うーん……」

不得要領じふじやうりやうに頷くと、その返事のいい加減さの申しわけのように禿頭かぶくにつづく広い額に手を当て
て、無意味に唸って頭を振る。

「先生は……」

最後にハルはいう。

「ど」なの？ 今は……」

「今は巡業中で……」

さて、どのあたりでしょうかな、と首をひねったついでに手酌で酒をつぐ。

「ねえ、野呂瀬さん。これを読んでたら、あたし、なんだか悲しくなっちゃって……」

ハルは読売新聞をさし出した。

「あたしだって、娘時代はこんなお正月を過ぎたのよ」

「はあ」

と、いつて新聞を受け取って目を走らせ、

「まったく……」

と酒を飲み、

「そうですな……」

と、いつつ、徳利をとり上げる。

「巡業はうまくいってるのかしら……」

「ちゅあ……」

「どうせ苦労しているんじゃないっ？」

「多分そうでしょう」

「ねえ、野呂瀬さん、三笠さんでどういう人なんでしょう。うちの先生はあんなに一所懸命にな
ってるけど。結局は捨てられるんじゃないっ？」

「どういう返事がハルには一番好ましいかを知っているから、

「とにかく、冷たいひとですからね」

「どう。」

「冷たくて、打算的だっていう人がいるけど」

「そう、功利的なひとです」

「子供を産んだんだって？」

「そうらしいです。去年」

「その子供を連れて巡業してるのっ？」

「いや、預けてるらしいです。三笠さんの父親が大阪で古物市場をやってるんですが、そこへ預
けてると聞きましたが」

「子供にも冷たいのね」

「とにかく芝居一筋のひとですよ」

「ぶっなのっ。上手なのっ」

「容姿だけで勝負してる女優ですからね。華はあるけど小廻りは利かないんです」

「松井須磨子ほどにはなれないんでしょう？」

「まず、無理でしょう」

「もし須磨子ほどになったら、先生は捨てられるんじゃないですか？」

「考えられないことはないですな」

「でも大丈夫ね、須磨子ほどにはなれないから……」

「ハハハ……」

野呂瀬は天井を向いて笑った。その笑い声をよそにハルは火鉢の灰をじっと見て上の空になっていた。奥深い丸い目が愈々落ち窪んで、火箸を持った手が無意識に灰を掻いている。その痩せた手の甲に青筋が浮き上がっているのを見ると気の毒だなあと野呂瀬は思い、しかしかなわねえなと思いつつ、手酌で酒をつぐ。酒がもつないことを知らせるために、徳利を振った。が、ハルはそれに気づかない。癖になった溜息をついて、口の中で呟いた。

「ほんとに……なんてお正月でしょう」

元旦の雑煮をそそくさと食べ終ると、節は玄関を飛び出し、そのまま四日間、家に寄りつかなかった。

正月はどこの家へ行っても浮き浮きと明るくて「馳走がある。女の子は着飾ってどの子も可愛らしい。追羽根やカルタの相手をして、わざと負けてやるとますます浮き立ってきて、チャカチヤン、チャカチヤンと寄ってくる。羽根を打ち損じて顔に墨を塗られ、八方から笑い声を浴びせられると、節はゾクゾクするほど嬉しくなった。

茗荷谷にいた頃、仲よくしていた友達の家や、可愛がってくれた隣近所のおばさんたちは、節

の身の上に同情してみんな親切である。

「ハッチャンの方は狸みたいだけど、チャカさんはおとなになつたらなかなかの二枚目になるわ
よ」

佐久間のおばさんがいつかいったことを忘れないから、節は行き場に困ると佐久間さんの家へ行く。佐久間のおばさんは「おてかけ」だということだった。佐久間家の女中のおよねは、うちの奥さんはヒスで困ると始終いつていた。ヒスが起るのはこの三月みつきばかり旦那旦那が来るのが間遠まゝになつているからで、奥さんも女盛りだからその気持はわからないことはないといい、

「チャカさん、あんた、子供なのにおとなと話が出るのねえ。たいしたもんねえ」

とおよねはへんに感心した。節は佐久間のおばさんのところへ行つて、

「おばさん、花盛りなの？」

といった。

「花盛り？ 何のこと？」

訊き返されて女盛りと花盛りを間違えたことに気がついた。おばさんは、

「いやねえ、チャカチャン、誰がそんなこといつて？」

軽くポンと節をぶつて、機嫌がよかった。

父とあの女の悪口をいふと、どのおとなくとも熱心に聞いた。父親は悪い女に欺たぶされて子供を捨てた。母は病気で寝たり起きたりしている。姉は肺病で死んだ。伯母さんはどっかへ行つてしまった。弟の久は二つなのにまだ満足に口が利けない。五つの弥は伯父さんに預けられて鳴尾という所にいる。兄貴は不良少年で、小笠原の父島へやられている。

そんな話をするとき涙をこぼすおばさんがいる。菓子や蜜柑がどんどん出てきて、夕飯も食べて

お行き、泊ってお行き、ということになる。敷いてもらった布団の中で蜜柑を食べていると、

「でも、チャカチャンは明るくしているからえらいわ、ねえ……」

という声が聞えてきて、「これからも明るくしよう」と節は思う。

弥は正月前に鳴尾へ行った。

野呂瀬に手を引かれて汽車に乗った。節のお下りの紺緋の筒袖に、小倉の袴だけは新しく買ってもらった。毛糸の手袋の人さし指は両方とも穴があいていたが、下駄は新しかった。汽車に乗るとすぐに野呂瀬は弥のために弁当を買い、自分は酒を飲みながら、

「鳴尾はいいよ。うん、いい所だ」

といて一人合点に頷いた。

「あつただだし、海は近いし、川もあるし、それに莓がハラいっぱい食べられるんだよ。伯父さ

ん家にはお姉ちゃんが二人いるよ。一人はチャカチャンより一つ上でもう一人はハッチャンより

二つ上だ。もう大きいからきつと可愛がってくれるよ」

「うん」

と弥はいったただけだ。何を聞いても弥は「うん」しかいわない。家を出る時、節が、

「よう、ワタル、行くのかい」

とといった時も「うん」だった。

「お前はおでこが出っばってるから、俯くとおでこの重みで倒れるからな、だから、いつもこうやって歩いてろ」

節がいったことは八郎の受け売りである。節は八郎がしたようにそっくり返って歩いてみせた

が、弥はやはり「うん」といっただけだった。

「じゃあ、行っておいで。気をつけてね。伯父さんは厳しい人だからね。お行儀よくするのよ」
ハルがいったときも「うん」だった。

何をいっても「うん」というので、この子なら鳴尾にやっても大丈夫だと皆が思った。はじめは節が行く筈だった。しかし節では向うで手を焼くだろうという心配から、弥に決ったのである。

佐藤密蔵は治六の二つ上の兄で、この時四十六歳、大阪毎日新聞経済部長をしていた。五年前に恭子と良子という二人の娘を遺して妻に死なれ、二年前にゆきという後添えを貰った。ゆきは長年、女学校の習字と裁縫の先生をしていた人で三十七歳になっており、初婚だがもう子供を産むこともないだろうし、恭子と良子はなさめ仲だから、行く行くは自分の老後を托すつもりで弥を引き取ることに賛成した。

弥なら反抗したり泣いて帰りがったりすることはないだろうと皆が思った。八郎や節に虐められるために生れてきたような子供だったから、どこへ行っても兄たちがいる家よりはいいと思うにちがいない。おでこの下からこの世を諦めたような老人くさい目で、じっと人を見るだけである。

そうして弥は見たこともなかった伯父のところへ預けられた。なぜ家族と離れて、そんな所へ行かなければならないのかわからなかったが、いやだということも、なぜかと訊ねることも弥には思い浮かばなかった。

正月の雑煮の餅を弥が八つも食べたといって二人の従妹はさんざん囁し立てた。二人の従妹のうち、下の方の良子は十四で、姉の恭子は三つ年上の女学生である。

「そんなちっこい身体はどこに入るのん！」

「この子身体中、胃袋なんや」

いいかけたら二人はしつこい。この家へ来て以来、弥の大食は二人の姉妹の格好のからかいの材料になった。だが弥は一向にこたえないで、黙々と食べる。

「もつと食べる？」

ゆきが訊くと、

「うん」

こっくりして、二人の姉妹に見詰められたまま、おとな用のお椀に顔を突っこむ。からかわれたり虐められたりすることは、茗荷谷の暮しの中で馴れっこになっていた。食べている物をいきなり取り上げられたり、わけもなく殴られたりしたことに較べると、ずっとらくだった。いわれるままに幼稚園へ行き、夜はゆきの隣で寝た。母や兄たちが恋しくて帰りたいということもなかった。

ゆきは小さな声で穏やかにものをいう。大声で笑うこともない無口でおとなしい女だった。平らな丸顔にちんまりとつぼめた口、間が離れている小さな目は優しいのかそつでないのかよくわからない。

「お母さんの話は面白くないからキライ」

と娘たちにいわれても、ただ困ったように微笑していた。暇さえあれば夫や娘たちの着物を縫い、足袋のつづくりをし、花や活け一人で茶を点^たて、あとはいつも行儀よくまるで置物のようにじっと坐っていた。

密蔵は毎日新聞社の中でも外でも頑固で強情者として知られていたが、その一方で学識の深さと、強烈な信念の持主として誰からも一目置かれる存在だった。だが、彼は家庭内のことは何の

目配りも出来ない男だった。

「弥、どうだ、東京へ帰りたいか？」

普段は忘れていたが、時々、思い出したように弥に声をかけた。

「んんんん」

と首を横にふるのを見ると、

「んん」

と頷いて、それきり忘れた。痩せて骨ばった身体によれよれの背広を着て、青白い面長の顔に時代遅れの髭を真横に「ん」と伸ばしている。長すぎるほどの面長の顔に細い切長の目、高い鼻、広い額の形まで治六と瓜ふたつとっていいほどだが、治六にはない人を寄せつけぬ厳しさがその顔を貫いている。

弥を哀れに思つて情をかける者はこの家には一人もいなかった。ゆきは弥に小ざっぱりした着物を着せ、かちかち山や舌切雀の話をし、「もつとお食べ。遠慮なんかしないでよ」と山盛りに「飯をよそつたが、弥に親身な愛情を抱いているわけではなかった。生意氣盛りの二人の継子に愛情を注ぎかねて、心のやり場を弥に向けているだけのようだった。

前の年の晩秋、八郎は福士幸次郎ふくしこうじちろうと一緒に横浜から小笠原へ向う船に乗っていた。

東京から横浜行きの電車の中で見た寒い灰色の空は、八丈島に着いても変わらずに暗い密雲に閉ざされたままだったが、黒い波がうねる海上を五日間かかって父島に到着した時は漸く晴れて、まるで無人島かと思えるほどに岩と緑が重なり合った島は深閑として明るく、その明るさが怖ろしいほど寂しかった。

父が茗荷谷の家を出て行った後、八郎は早稲田中学で二度目の一年生をやっていたが、ふと思立って父のいる住吉へふらりと行った。日本座は浪花座ななわで芝居をしていたので、毎日楽屋へ遊びに行つて下つ端女優をからかっていた。東京へいつ帰る気だと父に訊かれたので、帰りたくないといったら、それならこっちの学校へ行けといわれ、神戸の中学へ入学させられた。仕方なく行ったが、十日ばかりでやめてしまった。

「お前、どこから来てん？　なんでここの学校がっこうへ来てん？」

と声変りのジャラジャラ声が大坂弁でいったのが気に障ったので、いきなり殴ったら騒ぎになった。それで今度は京都の中学へ行くことになった。神戸の学校もそうだったが、今度も金を積んで無理やり入れてもらったのだ。そのうち日本座の京都南座公演が始まったので、学校へは行かずに楽屋へ入り浸つて女優の尻を追いかけて廻した。何さ、キモチ悪い。あんたコドモじゃないのと、あつちでフラれ、こっちでフラれ、面白くないので酒を飲んで、地元不良と喧嘩した。下駄で相手の眉間を割って警察へ引っぱられた。幹部女優が泊っている部屋へこっそり入って、押入れの中に忍んでいて、夜中にそーっと女優の足を引っぱったら大騒ぎになった。「年増は何のかのいっても、やがてはオチるさ」と役者が話していたのを聞いてやってみたのだが、子供のくせに異常性欲だといわれた。それでまた酒を飲んで喧嘩した。金もないのに飲んで、オレは佐藤紅緑の息子だ、文句があるなら父親のところへ行けといったので、父は怒髪天を衝いて八郎を腰車にかけて撥ね飛ばした。

いろんな悪いことをした。朝起きたら、今日は何をしてやろう、と考えるようになった。治六は治六で今度悪いことをしたら、どうやって懲らしめてやろう、と考えていた。八郎の顔を見るだけで治六の眉間に怒り皺しわが現れた。

シナは八郎と目を合わせるのを避けていた。治六が八郎を怒鳴り始めると、

「そんなに怒ってばかりいたって……」

低い声でいった。

「ハッチャンの気持にもなってあげて下さいよ……」

それを聞くと八郎はもっと悪いことをしてやろうという気持になった。シナが何もいわず、じつと口を噤んで悲しそうに陰気に目を伏せている横顔を見ると、何ともいえない悩ましい気持になった。この女と笑って、仲よくしてみたいという気になった。

「ハッチャンはね、ハッチャンは悪い子じゃないんだよ。悪い子じゃないけど悪いことをしてしまっただなあ」

と幸次郎はいった。

「悪い子だから悪いことをするんだろ？」

「ちがうんだよ。悪い子じゃないんだけど、悪いことをしてしまっんだよ」

「悪いことをするのは悪い子じゃないか」

「ちがうんだよ。ちがうんだよ。悪い子じゃないのに、悪いことをしてしまっんだよ」

幸次郎はそうだったが、治六はあんな奴はダメだ、徹底的に懲らしめてやるというって勘当をいい渡した。

「帰れというまで帰ってくるな」といい、

「父島には感化院がある。丁度いい、そこへ入っちまえ！」

と叫んで、八郎を殴った。殴られることには馴れていたが、感化院という言葉は父の拳固よりも応えた。泣きながら福士幸次郎に訴えると、幸次郎はいった。

「ではハッチャン、こうしよう。ぼくも一緒に父島へ行こう」

「福士さんも感化院へ一緒に入ってくれるのかい？」

「^{すが}縫る思いでそういうと、幸次郎は笑った。

「感化院なんていうのはお父さんの威^{おど}しだよ。ぼくと一緒に父島へ行ってみようじゃないか。きつといろんな発見があると思うよ。今までの生活とは違う生活に入ってみるというのも面白いものだ。そこには汚れていない自然、人の手が加わっていないありのままの自然がある。素晴らしいじゃないか！　そこで原始の暮らしを偲ぼうよ。きつと何か、素晴らしいものが見つかるよ……」

福士さんみたいにぼくは楽家じゃないんだ、と思いながら、仕方なく八郎は行く気になった。武士のハシクレだった頑固者の弘前のおじいさんの所に預けられるよりは、まだその方がましだと思ったのだ。

重い行李を担いで船を降りると、棧橋の脇に正覚坊の生鬘^{うぶかみ}があつて、一匹が水から頭を出していた。

「やあ、こいつ、珍しそうにオレの顔を眺めてら」

わざと陽気にいったが、正覚坊の大きな目玉が濡れて光っているのを見るとジワジワと悲しくなってきた。涙を^{なみだ}泳^{およ}べて海に落ちていく赤い太陽をじつと見ている頭の上を、あほう鳥が忙しく啼きながら飛び交っていた。

「こんな奴は島流しだ！」

と父が叫んだときは高を括っていたが、本当に「島流し」の実感があった。正覚坊と目を合せて、「おじ」

というと、それまでは好きだなんて思ったこともなかった母やチャカが恋しくて、泳えきれぬ

涙が溢れてきた。

五日ばかり棧橋の近くのたった一軒の旅館で過した。八郎が正覚坊を眺めに行っている間に、幸次郎は測候所の脇にたった二間の家を見つけてきた。そこは大村という三十軒ばかりの集落である。屋根は芭蕉の葉で葺き、便所は外にある。便所の窓からパイヤの木が二本見えて、実が幾つも下がっている。チャカがいればなあ、と八郎は思う。あの実を取って頭に投げつけてやるのに。たまらなくチャカに会いたかった。

「弟よ、チャカよ、

感化院へ行けといわれて、ここへ来た。

えらいことになったと思ったが仕方がない。

見送り人は一人もなし。いっそさっぱりしていいや。荷物は柳行李二つと布団だ。

相棒は福士さんだ。察してくれ。

お前はマジメに学校へ行ってるかい。

そのうち野呂公に連れられて、ここへ来るようになるんじゃないだろうな。

今のところオレは元気だ。そのうち暴れなくなるだろうけど、ここじゃいくら暴れても誰もいないからつまらない。福士さん相手じゃあ。わかるだろう。

弟には書いたが、母にも父にも手紙は書かなかった。幸次郎は頻りに、「ハッチャン、お父さんに書いたかね。お母さんにも書いたかね」というがどうしても書く気にならなかった。父親やおふくろに改まって手紙を書くなんて、恥ずかしくてそんなことが出来るかい、と思った。

——お父さん、いろいろ心配かけてすみませんでした。ぼくはここで心を入れ替えて、毎日勉強しています。昨日は英語の口を勉強しました。ここの生活はきびしいですが、自分のためになるのだと思っています……。

そんな心にもないことが書けるかというんだ。福土さんは思ったままを素直に書けばいいんだよ、というけど、思ったままを書いたらどうなるか。

——父さん、いろいろ心配かけましたが、父さんの方だってぼくらに心配をかけたんだから、アイコじゃないですか。ここの生活はきびしいです。父さんもいっぺんここで暮したらどうですか。父さんのためになると思います。ぼくは毎日ここですることがないから、マスをかいています。昨日は四回かきました。一日十回を目ざして一所懸命にやります……。

幸次郎と小さな机を挟んで漢字の書取りを勉強しながら八郎はそんなことを考えている。

芭蕉の葉で葺いた屋根をゆさぶって西風が吹き過ぎていく。赤茶けた檳榔びんろうの茂った山が右に左に揺れる。ヒイヒイと山が泣く。どどど、どーんと海が鳴る。

「ハッチャン、ハッチャン」

幸次郎は話しかける時、必ず名前を二度呼ぶのが癖だ。

「ハッチャン、ハッチャン。小笠原諸島を形成している島は、まず父島、母島、それから兄島、弟島、孫島があるのに、姉島、妹島はない。それはいったいなぜだろう……これは実に興味深いことだと思わないかい？」

どこにいても幸次郎は変らない。八郎がいらいらしていることがわからないのか。東京にいても父島にいても同じなのが八郎を苛立たせる。

「ハッチャンはなぜだと思っかね？」

「知らねえよ、オレは」

噛みつくようにいうと、さっきから抑えている凶暴な衝動がムラムラと上ってきて、幸次郎を殴り倒したくなった。

「ひとつ、考えてみようじゃないか……」

「勝手に考えろ」

パイと表に出て便所に入ると藁半紙が貼ってある。藁半紙には数学の問題が書いてある。

「便所というところは、ゆっくりものを考えるのに一番いいところなんだよ。排便はおもむろにゆっくりやるのがいいんだ。早飯、早糞というのは下郎ゲッポウのすることだね。高貴な人間はゆっくり食って、ゆっくり出す。考えることに集中すると、これはいやでもゆっくり出すことになるからね。数学は便所でやるのが一番いいんだよ」

糞くらえ！ と毒づいて便所を飛び出すとどこへ行くという当もなく闇にも走った。

だが日が暮れてくると八郎は幸次郎の待つ家に帰った。帰りたくなってもここではそこへ帰るしか行く所がない。

「やあ、お帰り。お腹が空いたろう。餅を貰ったんだよ。雑煮にしたからおあがり」

幸次郎は機嫌よく机の前から立ち上る。何をいってもしても怒らないのが、余計に八郎を苛立たせる。

八郎はやにわに机の上にあった金子薫園くんえんの「歌の作り方」を掴むと壁に向かって叩きつけた。与謝野晶子歌集、北原白秋の「思ひ出」、アンデルセン童話集……手当り次第掴んでは投げた。それは幸次郎が八郎に読ませるために行李いっぱい詰めてきた本だ。

「あッ、八郎君、何を……」